

## 第2章 名蔵シタダル海底遺跡採集明代陶磁器の研究

関口 広次

### 1. 採集陶磁器の数量と分類

大瀨永巨氏がおよそ半世紀間に亘って採集した名蔵シタダル海底遺跡の明代陶磁器全点について、2007年5月～6月に整理、分類を行った。結論から先に述べておくと私たちはこれらの陶磁器は明代中期（15世紀第3～第4四半期）の沈没船からの一括遺物と考えている。（挿図1・2）この時期明では海禁政策中であるので明の中央政府から見れば密貿易船であり、琉球側から見れば朝貢に伴う貿易船ではないので私貿易船ということになる。その採集陶磁器の詳細な報告と検討そして結論を以下に記述したい。全数量があまりに膨大であることもあり、青磁の小片についてはカウントから除外した。その抽出数量は3,461点であった（第1表）。釉薬から見た分類では青磁・白磁・青花・鉄釉の4種類からなる。長期間サンゴの発達した海中でローリングし、岩礁性の海岸に打ち上げられた陶磁器であるため、青磁・



挿図1 名蔵シタダル海底遺跡 名蔵湾より遠景

白磁・青花の碗や皿類では薄い部位で割れやすい口縁部の遺存率が極めて低い。逆に厚手のでがっしりした底部での遺存率はかなり高く、良好な資料も多い。青磁では底部1/2以上残存したものを抽出し、それを1個体とみなした。その数量は2,845個体であった。器形の内訳では青磁碗2,675個体、青磁大皿（底径125～180mmのものを大皿に分類した。口径は300mm以上となる）11個体、青磁中皿（底径70～125mmのものを中皿に分類した）50個体、青磁小皿・鉢類（底径50～70mmのものを小皿・小鉢に分類した）82個体、青磁大鉢（底径135mm以上のものを大鉢に分類した）3個体、青磁大碗（底径65～90mmのものを大碗に分類した）18個体、小碗1個体、小香炉（註1）5個体となる。上記器形のほかに青磁では瓶形をしたものも確認出来る（第8図-10・12）。青磁のうち94%以上が碗であり、内底面（見込み）の施文（印文）の有無と文様により細分類をも試みた。



挿図2 名蔵シタダル海底遺跡

青磁碗2,675個体中1,685個体（63%）は内底面無文であり、61個体（2.3%）が内底面無釉か蛇の目釉剥ぎにし、製品の重ね焼きをしている。明確に花文の印文と分かるものは401個体（15%）あり、さらにその他・不明とした516個体（19.3%）の多くも花文の印文と思われる。その他の印文中には数量は少ないが、「金玉満堂」（第5図9・写真21A. B-6）や梵字文（第8図9・写真11A. B-1この例では器形は皿）、双魚文（第5図6・写真21A. B-1）、福鹿（禄）文（第5図10・写真22A. B-5）、天字文（第5図8・写真21A. B-7）などが複数個体含まれる。「顧氏」銘印の青磁碗は12個体（0.45%）確認され、名蔵シタダル海底遺跡の特

微的な製品として注目される。(第4図5・巻頭カラー5A、B-1、第5図1・巻頭カラー4A、B-1、第5図2・写真19A、B-2、第5図3・写真19A、B-5、第5図4・写真20A、B-2、第5図5写真20A、B-6) この「顧氏」銘青磁碗については、後段でさらに詳しく検討してゆく。青磁口縁部については口径復元が可能になるとと思われる残存部30mm以上の破片を抽出して第2表にまとめた。器形は碗鉢皿類を一括しているが、148点と大変少ない量であった。その内訳は外面無文タイプが111点(75%)と多く、さらにその内、無文外反タイプは82点(55.4%)で皿類の多くがここに入る。無文直立タイプは29点(19.6%)あり碗類で占められる(第8図3・4・5・6)。

また外面に文様のある碗として、口縁直下に1~3条の圏線のあるもの27点(18.2%)で、崩れた雷文帯のあるものは7点(4.7%)、やや退化した線刻連弁文のあるものは3点(2.0%)である。点数は少ないながらも崩れた雷文タイプと「やや退化した線刻連弁文タイプ」の碗の伴出は注目してよい。崩れた雷文タイプとは口縁直下に線刻でラフに幅15mm程の雷文帯を彫り、さらにその下の胴部には幅広く早いタッチの線刻連弁文をラフに描いた碗である。第7図13(写真31A、B-3)・14(写真31A、B-1)、第8図1(写真31A、B-2)・2(写真31A、B-4)がその口縁の例である。また第7図1(写真27A、B-1)・2(写真26A、B-2)・3(写真27A、B-3)・6(写真28A、B-2)等はその胴部から底部の破片である。胴部~底部の資料ではかなりの量が採集されていることが分かる。また「やや退化した線刻連弁文タイプ」とは口縁直下から胴部下半部にかけて幅10~20mm程の線刻連弁を施したもので、連弁の先端は側部から連続して描き、連弁間には補助線を入れている。第7図10(写真31A、B-11)・11(写真31A、B-12)・12(写真31A、B-10)がその口縁の例である。また第6図5(写真23A、B-6)・6(写真23A、B-2)、第7図4(写真28A、B-5)・5(写真28A、B-4)等はその胴部から底部の破片である。これまた胴部~底部の資料ではかなりの量が採集されていることが分かる。この「やや退化した線刻連弁文」碗の外に連弁文として一般的に知られる「鎬連弁文」碗や鎬連弁文の退化した輪郭線のみ残した「幅広い線刻連弁文」碗は今回の整理品中から検出されなかった。また「細線刻連弁文」タイプすなわち連弁側部を棒線で引き、頂部を山形文や鋸歯文で別に線刻するよりラフな最も退化した線刻連弁文タイプも全く採集されていない。本報告掲載の参考事例としては図版47A・Bに引用した山梨県東八代郡一宮町新巻本村出土の青磁連弁文碗が最も退化した細線刻連弁文タイプに当たる。なお森田勉氏らの編年によれば上記崩れた雷文タイプの碗は龍泉系C 2類に分類され、やや退化した線刻連弁文タイプの碗は龍泉系B 4類の中に分類されることになる(註2)。

皿では口縁稜花となるタイプと丸いまま普通に収まる円形タイプとの2種類があり、第2表でも分かる通り稜花タイプが多い。稜花タイプの青磁大中皿の例には第2図1(写真1A、B-1)、第4図1(写真2A、B-1)があげられる。稜花タイプの青磁小皿の例には第7図7(写真30A、B-4)・8(写真30A、B-5)があげられる。いずれも平縁状の口縁として、その先端部を削り稜花にしている。後者の普通に収まる円形タイプの口縁の青磁大中皿の例として第3図1(巻頭カラー3A、B-1)は平縁状になるものであり、第3図2(巻頭カラー3A、B-2)は丸縁のものである。後者の例は少ない。

白磁は440個体カウントすることが出来た。第1表備考3にも示した通り、白磁小皿は底部1/3以上残存しているものを抽出してカウントした。それ以下のものはカウントからは除外した。青磁碗の場合は1/2以上残存したものを1個体としたが、白磁小皿は完品もあるが、底部が小さいためか損傷が青磁碗よりも大きいものが多いので、あえて1/3の残存率を以って1個体と想定した。白磁小皿が98.9%を占め、碗形が3点検出されたのみである。白磁小皿の437個体のうち割高台白磁小皿(抉り高台とか、桜高台などと報

告されているものと同一の高台である。この報告書では以下、割高台白磁小皿と呼称して記載する)は357個体あり、白磁小皿中81.7%を占めることになる(第9図1~14)。さらにこの割高台には4分割のもの(第9図1・巻頭カラー6A. B-5、2・巻頭カラー6A. B-6、3・巻頭カラー6A. B-8、4・巻頭カラー7A. B-2、5・巻頭カラー7A. B-1、6・巻頭カラー7A. B-8、7・巻頭カラー7A. B-5、8・巻頭カラー7A. B-3)と5分割のもの(第9図9・写真35A. B-6、10・写真35A. B-3、12・写真36A. B-6、13・写真36A. B-1、14・写真36A. B-5)とがあり、4分割のものが232個体、5分割のものが19個体、不明のものが106個体となる。4分割のものと5分割のものととの比率(92:8)から推測すれば、4分割のものが恐らく全体の90%以上であると言えよう。さらに高台部の施釉状況で2分類してみた。胴部下半から高台部、底部にかけて無釉のものあるいは釉の掛け残しのあるものをaタイプとし、底部全体に施釉し、畳付部(割高台の先端部)も施釉されたもの、ただし畳付は製品を重ね時の接着面なので釉薬が剥離したのものもある。こうした全面施釉タイプをbタイプとした。割高台白磁小皿片の多くは海中でローリングを受け、表面の釉薬が剥落しているものも多く、また破片であると全面施釉か否かの判定が出来ない。したがって底部が完全に残存していて判定の付いた29個体について見た。27個体(93.1%)は全面施釉しているbタイプであり、2個体(6.9%)がaタイプになる。割高台白磁小皿の総個体数である357個体に、この比率を援用すると約332個体はbタイプとなり、残り25個体がaタイプとなる。第11表に割高台白磁小皿を出土した日本全国の遺跡報告書の一覧を掲載してある(遺跡報告に重複はあるが、文献目録の意義をも含めてあえて、そのまま掲載してある)。この表には、筆者が直接当たり得た報告書から底部・高台部の施釉状況を読み取り「aタイプ」「bタイプ」判定不能な「不明」に3分類した考察結果をも記載した。この表と名蔵シタダル海底遺跡採集の割高台白磁小皿とを比較してみると、名蔵シタダル海底遺跡採集の割高台白磁小皿がいかに多量であるのかが分かり、またこの遺跡の数値により全国での出土比率が一変してしまうことに気付くであろう。割高台白磁小皿についての詳細は後述する。

高台を割っていない通常の高台を有したものを輪高台と称した。輪高台白磁小皿の数量は78個体で白磁小皿の約18%の占有率である(第9図)。このうち製品の重ね焼きのために内面を無釉にしもの50個体(輪高台白磁小皿の64.2%)、同じく内面を蛇の目釉剥ぎにしたもの4個体(5.2%)、不明なもの22個体(28.3%)であり少なくとも70%以上が重ね焼きのために内面に無釉部分を造って、焼成時の溶着を防止している。内面施釉したものは2個体(2.6%)であった。これは、もしかすると重ね焼きした際、最上部に置いた製品かも知れない。割高台白磁小皿は重ね焼き時の接着面積を小さくする為、高台を削り4脚あるいは5脚で支え、内面釉剥ぎや「目」を置いて重ねるといったこともしない簡略な方法に進化(見方によれば退化)している。輪高台白磁小皿に見られた窯詰め方法は中国各地の窯跡で宋~元代にかけてすでによく見られるものであり、明代にも踏襲された技法であった。そこからさらに簡略化された方法として高台を最初は浅く削り、無釉の状態すなわち割高台白磁小皿aタイプの状態で重ね焼きするようになった。それが次第に深く削りこむようになり、さらには高台造りもほとんど無いような状態で割高台に削り込むようになる。同時に釉薬も全面施釉すなわちbタイプの状態で、釉薬を拭いたり、掛け分けたりといった手間を省略したどぶ漬けのままとなっていったと想定される。こうした状況は割高台白磁小皿を生産していた中国福建省邵武市四都窯址でも後述するように確認されている。

白磁にはこの外、碗、小碗(杯)や菊花小皿も採集されているが、後段で個別に考察報告する。白磁で特に注意しておきたい点の一つに、日本の中世遺跡で割高台白磁小皿としばしば伴出する面取り白磁杯(輪高

台タイプと割高台タイプの2種がある)は全く発見されていない点があげられる。この面取り白磁杯も中国福建省邵武市四都窯址で生産されており、やはり後述する。

青花は採集量が極めて少なく、大瀨氏の現地での採集時の考察によれば、名蔵シタダル海底遺跡と想定している500m程の海岸でも特定の地点からのみ採集されるという。台風などの後に、沖合いの海底に集積した場所、恐らく青花の荷積みの沈んだ場所から流されて海岸に打ち上げられてくるものと思われる。青花は量も少ないので、すべての底部破片をカウントして分類した。底部から胴部への立ち上がり状態を考慮した上で碗と皿に区別した。青花底部は60片であり、碗が47片(78.3%)で皿が13片(21.2%)という内容である。見込み(内底面)に描かれた文様で各器種が細分出来る。碗では捻り菊文16片、梅枝文16片と半々である。中国では捻り菊文は月華文、梅枝文は月梅文などと呼称する書籍もある。捻り菊文の碗として第10図1(巻頭カラー8A. B-2)、第10図2(巻頭カラー8A. B-5)などがあげられる。梅枝文の碗として第10図8(巻頭カラー9A. B-6)、第10図9(巻頭カラー9A. B-7)、第10図10(巻頭カラー9A. B-2)、第11図1(巻頭カラー9A. B-1)、第11図3(写真40A. B-5)等があげられる。小碗には寿字状梅枝文14片と梅枝文1片とがある。寿字状梅枝文とは「寿」字に梅枝を折り曲げ表現した文様で、第11図5(写真42A. B-5)、第11図6(写真42A. B-4)、第11図7(写真42A. B-2)等がその例としてあげられる。皿類は13片あり、大中小に細分出来、うち4点を図版に掲げた。第10図3(巻頭カラー10A. B-3)は底径110mm以上あり大皿とした。内面に羯磨文、中国では宝杵文と称する場合もある文様が描かれている。第10図4(巻頭カラー10A. B-2)は捻り菊文の描かれた小皿である。第10図5(巻頭カラー10A. B-5)と第10図6(巻頭カラー10A. B-8)はそれぞれ異なる花文が描かれた皿である。第10図7(巻頭カラー10A. B-9)は蕙状の植物で、野菜文と見た文様が描かれている。この外、青花片は9片胴部と口縁部の小片が採集されており、第11図8(写真42A. B-9)は碗の胴部、そして第11図9(写真42A. B-6)、第11図10(写真42A. B-7)、第11図11(写真42A. B-5)、第11図12(写真42A. B-8)の4片は碗口縁部付近の破片で、いずれも上記青花碗類の胴部、口縁になるものと思われる。

鉄釉と分類したものは、沖縄ではかつては南蛮と称された壺・甕類を指す。やや硬めの陶器質あるいは半磁質の壺・甕類の表面に茶色乃至黒色の鉄釉が施された器である。器形が大型であるので破片数も比較的多いが、ここでは底部から胴部への立ち上がり部の残存したもののみをカウントした。個体数ではない。117片の底部が確認された。また口縁部は72片採集されており、分類した内容を第3表に掲載した。そのうち遺存状況の良い口縁部8点と底部2点を第12図に図示した。第8表に考察表も掲載した。第3表の口縁形状からの分類では全数量72片中、肥厚口縁タイプが66点(91.7%)と多く、ラップ状の口縁をしたものが3点(4.2%)、玉縁状口縁が2点(2.8%)、その他1点(1.4%)という内訳になっている。第12図1(写真43A. B)、第12図2(写真43C. D)、第12図3(写真43E. F)、第12図4(写真44A. B)が肥厚口縁の鉄釉甕(壺)となる。第12図5(写真44C. D)、第12図6(写真44E. F)がラップ状口縁の鉄釉壺となる。第12図7(写真46A. B-2)、第12図8(写真46A. B-1)が玉縁口縁の鉄釉甕(壺)としたものである。第12図9(写真45C. D)第12図10(写真45A. B)は残り良い底部で、肥厚口縁タイプの底部になるものと思われる。この外に写真45E. F及び写真46A. B、写真46C. Dに採集されている鉄釉製品を掲載した。

次に採集陶磁器の青磁・白磁・青花・鉄釉の中から代表的なもの及び稀少なものを抽出して、図に従って個別に考察してゆくこととする。

## 2. 青磁について

第6表に青磁考察表を掲げてあり、本報告書に写真掲載したすべての青磁片の特色をまとめてある。以下に報告するのは、それらの中から代表的で基準となりうる資料、また類例の稀少な資料との両面の視点からさらに絞り込み抽出して実測図を作成し、考察し得た内容をより詳しくまとめたものである。

### 皿 類

第2図1（写真1 A. B-1）は大皿で口径320mm高台外径160mm高さ54mmである。胎土は灰白色を呈し磁質（磁器質）である。青磁釉は灰青色、半透明で貫入が入っている。底部は蛇ノ目状に釉を拭っており、この部分で焼台にのせて溶着を防止している。「蛇ノ目釉剥ぎ」と表現することもある。口縁端部を削って稜花にしている。内外面ともヘラ彫りで蓮弁文を表現している。第2図2（巻頭カラー2 A. B-2）も大皿に分類される。口径、高さは不明で高台外径125mmである。胎土は灰白色を呈し半磁質である。青磁釉は灰緑色、半透明で貫入が入っている。底部は蛇ノ目状に釉を拭っている。内底面中心部に花文を印（印文）で押している。その周囲をヘラ彫りで稜花を描き、さらに内側面にはヘラ彫りで草花文らしき文様を描いている。外側面はヘラ彫りで浮刻蓮弁文を描いている。

第2図3（巻頭カラー2 A. B-3）も大皿に分類される。口径、高さは不明で高台外径約125mmである。胎土は灰褐色を呈し半磁質である。青磁釉は剥落、摩滅が著しく本来の色調は不明である。内底面に印花で輪違文を押し、外側面はヘラ彫りで浮刻蓮弁文を描いている。第2図5（巻頭カラー2 A. B-1）も大皿に分類される。口径350mm高台外径180mm高さ53mmである。胎土は灰色を呈し磁質（磁器質）である。青磁釉は灰緑色、半透明状で貫入が入っている。底部は蛇ノ目状に釉を拭っており、内底面中心部に印花で花文を押し、内側面はヘラ彫りで蓮弁文を表現している。外側面はヘラ彫りで浮刻蓮弁文を描いている。

第2図4（写真2 A. B-4）は中皿に分類される。口径は不明、高台外径84mm高さ68mmである。胎土は灰白色を呈し半磁質である。青磁釉は青緑色、半透明で貫入が入っている。底部は蛇ノ目状に釉を拭っている。内底面中心部に印花で草花文を押し、内側面にはヘラ彫りで蓮弁文を表現している。割れ口に黄白色で層状になった胎土の接合痕が確認出来る。第3図1（巻頭カラー3 A. B-1）は中皿で口径280mm高台外径127mm高さ48mmである。胎土は灰白色を呈し磁質である。青磁釉は青緑色、半透明で貫入が入っている。底部は蛇ノ目状に釉を拭っている。内底面に印文で輪違文を押しているのが確認出来る。削りの方向が左回轉轆轤で行われていることも確認出来た。第3図2（巻頭カラー3 A. B-2）は中皿で口径280mm高台外径150mm高さ51mmである。胎土は灰白色を呈し磁質である。青磁釉は青緑色、半透明で貫入が入っている。底部は蛇ノ目状に釉を拭っている。内底面に印文で輪違文を押し、さらに内側面にヘラ彫りで唐草文を描いている。第4図1（写真2 A. B-1）は中皿で口径200mm高台外径89mm高さ36mmである。胎土は灰色を呈し半磁質である。青磁釉は灰緑色、半透明で貫入が入っている。底部は蛇ノ目状に釉を拭っている。口縁は平縁状に造り、端部をヘラ削りで稜花にしている。内側面にはヘラ彫りで唐草文を描いている。削りの方向が左回轉轆轤で行われていることも確認出来た。

第8図7（写真8 A. B-1）は小皿で口径117mm高台外径53mm高さ30mmである。胎土は灰白色を呈し半磁質である。青磁釉は青緑色、半透明で貫入が入っている。底部は無釉である。口縁は端反りに造り、端部をヘラ彫りで稜花にしている。内底面中心部に印花で文様内容がはっきりしないが、円圈内に花文風の文様を押している。内側面はヘラ彫りで草花文を描いている。第8図8（写真8 A. B-2）は小皿で口径

137mm高台外径64mm高さ35mmである。胎土は灰色を呈し半磁質である。青磁釉は黄褐色、半透明で貫入が入っている。底部は無釉である。口縁は端反りに造り、端部をヘラ彫りで稜花にしている。内底面中心部に円圏内に印文で花文風の文様を押している。内側面はヘラ彫りで草花文を描いている。削りの方向が左回転轆轤で行われていることも確認出来た。また割れ口に接合痕が確認出来、巻き上げ轆轤成形で造られていると推定された。第8図9（写真11A. B-1）は小皿で口径、高さは不明である。高台外径は59mmである。胎土は灰褐色を呈し半磁質である。青磁釉は灰青色、半透明で貫入が入っている。底部は無釉である。内底面中心部に凸円圏線内を施し、その中に印文で梵字文が押されている。その梵字の意味内容は正確には把握されていないようであるが、通説に従ってここでも梵字文とする。削りの方向が左回転轆轤で行われていることも確認出来た。

#### 大鉢・大碗類

第4図2（写真14A. B-1）は大鉢で口径、高さは不明である。高台外径は144mmである。胎土は灰白色を呈し磁質である。青磁釉は灰緑色、半透明状で貫入が入っている。底部は蛇ノ目状に釉を拭っている。焼台痕も残っている。内底面中心部に印花で花文を押し、内側面にはヘラ彫りで唐草文風の草花を描いている。外面にも同様のヘラ彫り文が描かれている。割れ口の状況から見て、底板を置いて巻き上げ轆轤で成形されていると推定された。第4図3（写真16A. B-1）は大鉢で口径、高さは不明である。高台外径は140mmである。胎土は灰色を呈し磁質である。青磁釉は灰緑色、半透明で貫入が入っている。底部は蛇ノ目状に釉を拭っている。焼台痕も残っている。外面にヘラ彫りで唐草文が描かれている。第4図4（写真15A. B-1）は大鉢で口径、高さは不明である。高台外径は135mmである。胎土は灰白色を呈し磁質である。青磁釉は灰緑色、半透明で貫入が入っている。底部は蛇ノ目状に釉を拭っている。焼台痕も残っている。外面にヘラ彫りで唐草文が描かれている。第4図5（巻頭カラー5 A. B-1）は大碗で口径、高さは不明である。高台外径は90mmである。胎土は灰白色を呈し磁質である。青磁釉は灰緑色、半透明で貫入が入っている。底部は蛇ノ目状に釉を拭っている。内底面中心の円圏内に「顧氏」銘の印が押されている。「顧氏」銘青磁については別項にて詳述する。割れ口の状況から見て、底板を置いた上に巻き上げ轆轤成形で器物を造っていると推定された（挿図3の青磁碗成形工程模式図参照）。この資料は胎土・釉薬の分析サンプルとした（サンプル1）。第5図1（巻頭カラー4 A. B-1）は大碗で口径170mm高台外径70mm高さ95mmである。胎土は灰白色を呈し磁質である。青磁釉は灰緑色、半透明で貫入が入っている。底部は蛇ノ目状に釉を拭いている。内底面中心の円圏内に「顧氏」銘の印が押されている。削りの方向が左回転轆轤で行われていることも確認出来た。

#### 碗類

第5図2（写真19A. B-2）は碗で口径、高さは不明である。高台外径は約65mmである。胎土は褐色を呈し半磁質である。青磁釉は剥落している。底部は蛇ノ目状に釉を拭っている。焼台痕も残っている。内底面中心の円圏内に「顧氏」銘の印が押されている。この資料は胎土・釉薬の分析サンプルとした（サンプル2）。第5図3（写真19A. B-5）は碗で口径、高さは不明である。高台外径は約68mmである。胎土は灰褐色を呈し半磁質である。青磁釉は灰緑色を呈す。底部は蛇ノ目状に釉を拭っている。内底面中心の円圏内に「顧氏」銘の印が押されている。第5図4（写真20A. B-2）は碗で口径、高さは不明である。高台外径は約65mmである。胎土は灰褐色を呈し半磁質である。青磁釉は灰緑色で貫入が入っている。底部は蛇ノ目状に釉を拭っている。内底面中心の円圏内に「顧氏」銘の印が押された部分がわずかに確認出来る。割れ

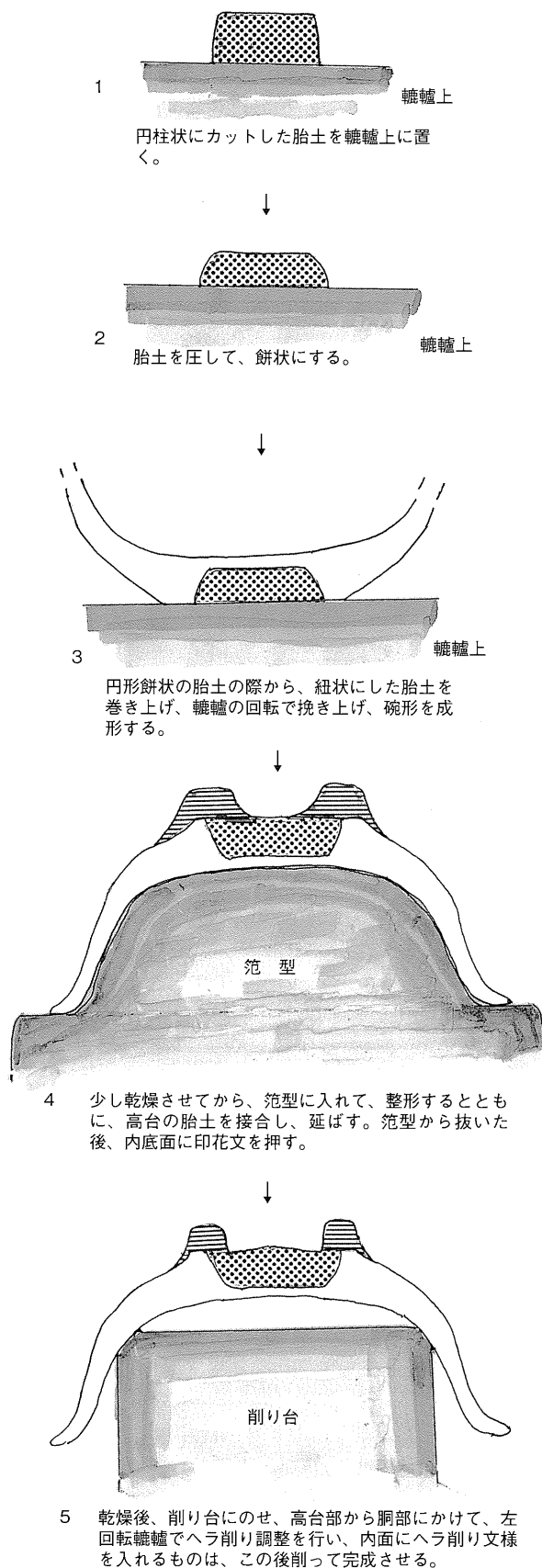
口の状況から成形方法が看取出来る。底板を置いた際から巻き上げ轆轤成形で胴部、口縁部を造り、その後高台部を接合（いわゆる付け高台）し、さらに左回転の轆轤削りで調整しながら器形を完成させていると推定された（挿図3の青磁碗成形工程模式図参照）。第5図5（写真20A. B-6）は碗で口径、高さは不明である。高台外径は約62mmである。胎土は灰褐色を呈し半磁質である。青磁釉は剥落している。底部は無釉のようである。内底面中心の円圏内に「顧氏」銘の印が押された部分が確認出来る。

第5図6（写真21A. B-1）は碗で口径、高さは不明である。高台外径は約62mmである。胎土は灰褐色を呈し半磁質である。青磁釉は剥落している。内底面中心の円圏内に大吉を配し左右に双魚文を置いた印が押されている。割れ口から底板を置いた上に巻き上げ轆轤成形で器物を造っていることが確認出来る。第5図7（写真21A. B-4）は碗で口径、高さは不明である。高台外径は約60mmである。胎土は灰褐色を呈し半磁質である。青磁釉は灰青色、半透明で貫入が入っている。文様は不鮮明ながら上記碗と同様に、内底面中心の円圏内に大吉を配し左右に双魚文を置いた印が押されている。割れ口の状況から見て、底板を置いた上に巻き上げ轆轤成形で器物を造っていると推定された。第5図8（写真21A. B-7）は碗で口径、高さは不明である。高台外径は約60mmである。胎土は灰褐色を呈し半磁質である。青磁釉は灰色、半透明で貫入が入っている。内底面中心の円圏内に天字文の印が押されている。削りの方向が左回転轆轤で行われていることも確認出来た。第5図9（写真21A. B-6）は碗で口径、高さは不明である。高台外径は約56mmである。胎土は灰褐色を呈し半磁質である。青磁釉は剥落している。底部は無釉のようである。内底面中心の円圏内に「金玉」の印が押されているのが確認出来、本来「金玉満堂」の四字が押されていたものと推定される。成形時の轆轤回転方向は左回転であることが確認出来た。第5図10（写真22A. B-5）は碗で口径、高さは不明である。高台外径は約52mmである。胎土は灰緑色を呈し半磁質である。青磁釉は灰褐色、半透明で貫入が入っている。内底面中心の円圏内に動物の鹿文その胴部上方に福字、臀部後方に靈芝風の文様の印が押されている。鹿（lu）が中国語の発音で禄（lu）と同じ音声になることから「福禄」を意味する内容の文様となっている。第5図11（写真22A. B-1）は碗で口径、高さは不明である。高台外径は約66mmである。胎土は灰色を呈し半磁質である。青磁釉は青緑色、半透明で貫入が入っている。底部は無釉となっている。内底面全体にヘラ彫りで捻り菊状の文様が描かれている。外面は線刻蓮弁文の下部と思われる棒線が見られる。削りの方向が左回転轆轤で行われていることも確認出来た。第6図1（写真22A. B-6）は碗で口径、高さは不明である。高台外径は約49mmと小振りである。胎土は灰白色を呈し半磁質である。青磁釉は青緑色、半透明である。底部は蛇ノ目状に釉を拭っている。内底面に輪違文を印で押している。第6図2（写真23A. B-3）は碗で口径、高さは不明である。高台外径は約52mmと小振りである。胎土は灰褐色を呈し半磁質である。青磁釉は灰緑色、半透明で貫入が入っている。底部は無釉である。内底面中心の円圏内に草花文の印を押している。第6図3（写真23A. B-5）は碗で口径、高さは不明である。高台外径は約59mmである。胎土は灰褐色を呈し半磁質である。青磁釉は剥落している。内底面中心の円圏内に草花文の印を押している。割れ口の状況から見て、底板を置いた上に巻き上げ轆轤成形で器物を造っていると推定された。第6図4（写真23A. B-1）は碗で口径、高さは不明である。高台外径は約59mmである。胎土は灰色を呈し半磁質である。青磁釉は灰緑色、半透明で貫入が入っている。底部は無釉となっている。内底面中心の円圏内に草花文の印を押している。削りの方向が左回転轆轤で行われていることも確認出来た。第6図5（写真23A. B-6）は碗で口径、高さは不明である。高台外径は約60mmである。胎土は灰色を呈し半磁質である。青磁釉は黄褐色、半透明で貫入が入っている。底部は無釉となっている。内底面中心の円圏内に草花文の印を押している。外

面は線刻蓮弁文の下部と思われる棒線が見られる。削りの方向が左回転轆轤で行われていることも確認出来た。第6図6（写真23A. B-2）は碗で口径、高さは不明である。高台外径は約59mmである。胎土は灰色を呈し半磁質である。青磁釉は剥落している。底部は無釉となっている。内底面中心の円圏内に草花文の印を押している。外面は線刻蓮弁文の下部と思われる棒線が見られる。削りの方向が左回転轆轤で行われていることも確認出来た。

第6図7（写真24A. B-3）は碗で口径、高さは不明である。高台外径は約57mmである。胎土は灰褐色を呈し半磁質である。青磁釉は青色、半透明で貫入が入っている。底部は無釉となっている。内底面中心の円圏内に草花風文様の印を押している。第8図7の小皿の内底面の印花文に類似する。外面は線刻蓮弁文の下部と思われる棒線が見られる。削りの方向が左回転轆轤で行われていることも確認出来た。割れ口から成形状況がよく分かる資料である。底板を置いた際から巻き上げ轆轤成形で胴部、口縁部を造り、その後高台部を接合（いわゆる付け高台）し、さらに左回転の轆轤削りで調整しながら器形を完成させていると推定された（挿図3の青磁碗成形工程模式図参照）。第6図8（写真25A. B-1）は碗で口径約150mm高台外径約56mm高さ約68mmである。胎土は灰色を呈し半磁質である。青磁釉は青色、半透明で貫入が入っている。底部は無釉となっている。内底面中心の円圏内に印花文があるが文様は不明である。口縁が端反に造られ、外面には文様は施されていない。削りの方向が左回転轆轤で行われていることも確認出来た。

第6図9（写真25A. B-2）は碗で口径約150mm高台外径約60mm高さ約74mmである。胎土は灰色を呈し半磁質である。青磁釉は剥落している。底部は無釉となっている。内底面中心の円圏内に印文があるが文様は不明である。口縁が端反に造られ、外面には文様は施されていない。削りの方向が左回転轆轤で行われていることも確認出来た。第6図10(写



挿図3 青磁碗成形工程模式図



真26A. B-1)は碗で口径約150mm高台外径約60mm高さ約74mmである。胎土は灰褐色を呈し半磁質である。青磁釉は灰緑色、半透明で貫入が入っている。底部は無釉となっている。内底面中心の円圏内に印文があるが文様は不明である。口縁は直行して造られ、外面には文様は施されていない。削りの方向が左回転轆轤で行われていることも確認出来た。第7図1(写真27A. B-1)は碗で口径約155mm高台外径約56mm高さ約77mmである。胎土は灰褐色を呈し半磁質である。青磁釉は灰緑色、貫入が入っている。底部は無釉となっている。内底面中心の円圏内に花文らしき印があるが詳細は不明である。口縁は直行して造られ、外面には口縁直下に幅20mm程の崩れたヘラ彫り雷文帯を描き、その下にラフなヘラ彫り蓮弁文を描いている。削りの方向が左回転轆轤で行われていることも確認出来た。第7図2(写真26A. B-2)は碗で口径、高さは不明である。高台外径約61mmである。胎土は灰褐色を呈し半磁質である。青磁釉は青緑色、半透明で貫入が入っている。底部は無釉となっている。内底面中心の円圏内に花文らしき印があるが詳細は不明である。外面には口縁直下に幅20mm程の崩れたヘラ彫り雷文帯を描き、その下にラフなヘラ彫り蓮弁文を描いている。削りの方向が左回転轆轤で行われていることも確認出来た。第7図3(写真27A. B-3)は碗で口径、高さは不明である。高台外径約57mmである。胎土は灰白色を呈し半磁質である。青磁釉は灰青色、半透明で貫入が入っている。底部は無釉となっている。内底面中心の円圏内に花文らしき印があるが詳細は不明である。外面胴部にラフなヘラ彫り蓮弁文を描いている。削りの方向が左回転轆轤で行われていることも確認出来た。上記第7図1・2と同一タイプの青磁碗である。第7図4(写真28A. B-5)は碗で口径、高さは不明である。高台外径約55mmである。胎土は灰色を呈し半磁質である。青磁釉は青色で貫入が入っている。底部は無釉となっている。内底面中心の円圏内に花文らしき印があるが詳細は不明である。外面胴部に線刻蓮弁文を描いている。削りの方向が左回転轆轤で行われていることも確認出来た。第7図5(写真28A. B-4)は碗で口径、高さは不明である。高台外径約60mmである。胎土は灰白色を呈し半磁質である。青磁釉は灰青色、半透明で貫入が入っている。底部は無釉となっている。内底面中心の円圏内に花文らしき印があるが詳細は不明である。外面胴部に線刻蓮弁文を描いている。削りの方向が左回転轆轤で行われていることも確認出来た。第7図6(写真28A. B-2)は碗で口径、高さは不明である。高台外径約60mmである。胎土は灰色を呈し半磁質である。青磁釉は灰緑色、半透明で貫入が入っている。底部は無釉となっている。内底面中心の円圏内に花文らしき印があるが詳細は不明である。外面胴部にラフなヘラ彫り蓮弁文を描いている。割れ口の状況から見て、底板を置いた上に巻き上げ轆轤成形で器物を造っていると推定された。削りの方向が左回転轆轤で行われていることも確認出来た。上記第7図1・2・3と同タイプの青磁碗である。

第7図7(写真28A. B-4)は碗で口径、高さは不明である。高台外径約60mmである。胎土は褐色を呈し半磁質である。青磁釉は灰青色、半透明で貫入が入っている。底部は無釉となっている。前出の第5図4や第6図7等と同様に成形状況がよく分かる資料なので断面状況を図示して掲載した。磁土を煎餅状にして、底板として置き、その際に磁土の紐を巻き上げ、轆轤の回転力を使って挽き上げる、いわゆる巻き上げ轆轤法で成形していると推定された。高台部分は剥離しているが、そこから高台部も本体成形後に付け高台で造られていたことも分かる。以下2点も同様に成形痕跡がよく分かる資料である(挿図3の青磁碗成形工程模式図参照)。ちなみにこのことに気付いてからいくつかの窯址で、この点に注意して陶片を観察してみた。その結果、この青磁碗成形方法と同一の方法で成形を行っている例は、福建省莆田庄辺碗窯壟窯址の南宋時代の青磁碗、福建省莆田庄辺五斗窯址の元時代白磁碗皿などで確認出来た。第7図8(写真30A. B-5)は碗で口径、高さは不明である。高台外径約60mmである。胎土は灰褐色を呈し半磁質である。青

磁釉は剥落している。内底面に印花文は見られない。底部は無釉となっている。これも成形状況がよく分かる資料なので掲載した。高台部分は一部残存しており、剥離した状態であり、本体成形後に付け高台で造られていたことも分かる。第7図9（写真30A. B-2）は碗もしくは皿で口径、高さは不明である。高台外径約57mmである。胎土は灰褐色を呈し半磁質である。青磁釉は剥落している。内底面に印文は見られない。底部は無釉となっている。高台部分は一部完存しており、また剥離した状態を良く示した高台部分が見られる。本体成形後に付け高台で造られていたことも分かる。高台添付後に左回転ヘラ削りで底面と高台部の調整をしている。

第7図10（写真31A. B-11）は碗の口縁部である。胎土は褐色を呈し半磁質である。青磁釉は灰青色、半透明で貫入が入っている。口縁直下から胴部下半にかけて幅20mm程の線刻蓮弁文が彫られている。蓮弁間には補助線が刻まれ2本線となっている。第7図11（写真31A. B-12）も碗の口縁部である。口径約140mmである。胎土は褐色を呈し半磁質である。青磁釉は灰青色、半透明で貫入が入っている。口縁直下から胴部下半にかけて幅20mm程の線刻蓮弁文が彫られている。蓮弁間には本来補助線が刻まれ2本線となっていたものと思われる。上述した第7図1・2・3・6の口縁部となるものであろう。第7図12（写真31A. B-10）も碗の口縁部である。口径約150mmである。胎土は褐色を呈し半磁質である。青磁釉は灰青色、半透明で貫入が入っている。口縁直下から胴部下半にかけて幅20mm程の線刻蓮弁文が彫られている。蓮弁間には本来補助線が刻まれ2本線となっている。また頂部の蓮弁部にも補助線を入れており、幾分丁寧な造りであることが分かる。

第7図13（写真31A. B-3）は碗の口縁部である。口径約160mmである。胎土は灰色を呈し磁質である。青磁釉は青緑色、半透明で貫入が入っている。外面には口縁直下に幅20mm程の崩れたヘラ彫り雷文帯を描き、その下にラフなヘラ彫り蓮弁文を描いている。上述した第6図5・6や第7図4・5の口縁部となるものであろう。第7図14（写真31A. B-1）も碗の口縁部である。口径約150mmである。胎土は褐色を呈し半磁質である。青磁釉は青緑色、半透明で貫入が入っている。外面には口縁直下に幅20mm程の崩れたヘラ彫り雷文帯を描き、その下にラフなヘラ彫り蓮弁文を描いている。第8図1（写真31A. B-2）も碗の口縁部である。口径約160mmである。胎土は灰白色を呈し半磁質である。青磁釉は青緑色、半透明で貫入が入っている。外面には口縁直下に幅20mm程の崩れたヘラ彫り雷文帯を描き、その下にラフなヘラ彫り蓮弁文を描いている。第8図2（写真31A. B-4）も碗の口縁部である。口径不明である。胎土は灰色を呈し半磁質である。青磁釉は剥落している。外面には口縁直下に幅20mm程の崩れたヘラ彫り雷文帯を描き、その下にラフなヘラ彫り蓮弁文を描いている。

第8図3（写真32A. B-4）は碗の口縁部である。口径約150mmである。胎土は褐色を呈し半磁質である。青磁釉は灰青色、半透明で貫入が入っている。無文の碗で直行する口縁である。第8図4（写真34A. B-14）は碗の口縁部である。口径約160mmである。胎土は褐色を呈し半磁質である。青磁釉は灰緑色、半透明で貫入が入っている。無文の碗で口縁端がわずかに玉縁状に造られている。第8図5（写真33A. B-6）も碗の口縁部である。口径約150mmである。胎土は灰色を呈し半磁質である。青磁釉は灰青色、半透明で貫入が入っている。無文の碗で直行する口縁である。同じく第8図6（写真34A. B-2）も碗の口縁部である。口径約160mmである。胎土は褐色を呈し半磁質である。青磁釉は灰緑色を呈する。無文の碗で直行する口縁である。

## 瓶・香炉

第8図10（写真7 A. B-7）は瓶の口縁と思われる。盤状の部分ではなかろうか。口径約150mmである。胎土は灰色を呈し磁質である。青磁釉は青緑色で半透明である。外面の口縁直下に花文が印で施されている。第8図11（写真7 A. B-1）は香炉の底部である。底径約40mmである。胎土は灰褐色を呈し半磁質である。青磁釉は灰青色である。底部は無釉で高台部の外側に3脚が貼り付けられている。また内面は無釉で、底面に溶着痕（剥離痕）があり、他の器物を入れて焼成していたことも分かる。第8図12（写真7 A. B-8）は瓶の口縁である。口径約42mmである。胎土は灰白色を呈し半磁質である。青磁釉は灰緑色で半透明で貫入が入っている。第8図13（写真7 A. B-4）は香炉の胴部と思われる。胎土は灰色を呈し半磁質である。青磁釉は剥落している。胴部に算木文を凸状に彫り出している。

## 3. 白磁について

第7表に白磁考察表を掲げてあり、本報告書に写真掲載したすべての白磁片の特色をまとめてある。以下に報告するのは、それらの中から代表的で基準となりうる資料、また類例の稀少な資料との両面の視点からさらに絞り込み抽出して実測図を作成し、考察し得た内容をより詳しくまとめたものである。

### 割高台白磁小皿

第9図1（巻頭カラー6 A. B-5）は割高台白磁小皿の完器である。口径は約80mm底径約40mm高さ約18mmである。胎土は白色を呈し半磁質である。白磁釉は黄白色、半透明で貫入が入っている。前述したように施釉状況で分類すると内外面全体の全てに施釉された全釉タイプであり、bタイプになる。割られた脚数は4脚で内面にも重ねた小皿の脚の剥離痕、これを目跡と称す（以下「目跡」と称す）が、4箇所確認される。高台部の削り轆轤の回転方向は左回転である。第9図2（巻頭カラー6 A. B-6）も割高台白磁小皿の完器である。口径は約75mm底径約42mm高さ約14mmである。胎土は褐色を呈し磁質である。白磁釉は灰白色、半透明である。施釉状況で分類するとbタイプになる。割られた脚数は4脚で内面にも4個の目跡が確認される。第9図3（巻頭カラー6 A. B-8）も割高台白磁小皿の復元完器である。口径は約84mm底径約40mm高さ約23mmである。胎土は灰白色を呈し磁質である。白磁釉は灰白色、半透明である。施釉状況で分類するとbタイプになる。割られた脚数は4脚で内面にも4個の目跡が確認される。第9図4（巻頭カラー7 A. B-2）も割高台白磁小皿の完器である。口径は約73mm底径約40mm高さ約18mmである。胎土は黄白色を呈し磁質である。白磁釉は灰白色、半透明である。施釉状況で分類するとbタイプになる。割られた脚数は4脚で内面にも4個の目跡が確認される。高台部の削り轆轤の回転方向は左回転である。第9図5（巻頭カラー7 A. B-1）も割高台白磁小皿の完器である。口径は約85mm底径約38mm高さ約23mmである。胎土は褐色を呈し半磁質である。白磁釉は黄白色、半透明で貫入が入っている。施釉状況で分類するとbタイプになる。割られた脚数は4脚で内面にも4個の目跡が確認される。高台部の削り轆轤の回転方向は左回転である。第9図6（巻頭カラー7 A. B-8）も割高台白磁小皿の完器である。口径は約81mm底径約41mm高さ約19mmである。胎土は灰白色を呈し磁質である。白磁釉は白色、透明である。施釉状況で分類するとbタイプになる。割られた脚数は4脚で内面にも4個の目跡が確認される。高台部の削り轆轤の回転方向は左回転である。成形時の轆轤回転方向が左回転であることも分かった。第9図7（巻頭カラー7 A. B-5）も割高台白磁小皿である。口径は約79mm底径約45mm高さ約19mmである。胎土は褐色を呈し磁質

である。白磁釉は青白色、半透明である。施釉状況で分類するとbタイプになる。割られた脚数は4脚で内面にも4個の目跡が確認され、さらに中心部に目(粘土の支え)が1個付着している。第9図8(巻頭カラー7A. B-3)も割高台白磁小皿の完器である。口径は約76mm底径約37mm高さ約19mmである。胎土は灰色を呈し磁質である。白磁釉は灰白色で貫入が入る。施釉状況で分類するとbタイプになる。割られた脚数は4脚で内面にも4個の目跡が確認される。第9図9(写真35A. B-6)も割高台白磁小皿である。口径は約79mm底径約40mm高さ約19mmである。胎土は白色を呈し磁質である。白磁釉は白色、半透明である。施釉状況で分類するとbタイプになる。割られた脚数は4脚で内面にも4個の目跡が確認される。高台部の削り轆轤の回転方向は左回転である。この資料は胎土・釉薬の分析サンプルとした(サンプル3)。第9図10(写真35A. B-3)も割高台白磁小皿の完器である。口径は約76mm底径約42mm高さ約15mmである。胎土は褐色を呈し磁質である。白磁釉は灰白色、半透明である。施釉状況で分類するとbタイプになる。割られた脚数は5脚で内面にも5個の目跡が確認される。高台部の削り轆轤の回転方向は左回転である。第9図11(写真36A. B-6)も割高台白磁小皿の完器である。口径は約79mm底径約41mm高さ約17mmである。胎土は灰白色を呈し磁質である。白磁釉は灰白色、半透明である。施釉状況で分類するとbタイプになる。割られた脚数は5脚で内面にも5個の目跡が確認される。第9図13(写真36A. B-1)も割高台白磁小皿である。口径は約80mm底径約44mm高さ約18mmである。胎土は白色を呈し磁質である。白磁釉は灰白色、半透明である。施釉状況で分類するとbタイプになる。割られた脚数5脚で、内面には目跡がない。高台部の削り轆轤の回転方向は左回転である。この資料は胎土・釉薬の分析サンプルとした(サンプル4)。第9図14(写真36A. B-5)も割高台白磁小皿の完器である。口径は約73mm底径約42mm高さ約14mmである。胎土は白色を呈し磁質である。白磁釉は灰白色、透明である。施釉状況で分類するとbタイプになる。割られた脚数5脚で、内面には目跡がない。

#### 輪高台白磁小皿

第9図15(写真37A. B-4)も輪高台白磁小皿の完器である。口径は約82mm底径約37mm高さ約20mmである。胎土は灰褐色を呈し磁質である。白磁釉は灰褐色、半透明で貫入が入っている。胴部下半から底部は無釉である。内底面も無釉にしている。高台部の削り轆轤の回転方向は左回転である。第9図16(写真37A. B-2)も輪高台白磁小皿の完器である。口径は約75mm底径約35mm高さ約15mmである。胎土は灰褐色を呈し半磁質である。白磁釉は灰黄色、半透明で貫入が入っている。胴部下半から底部は無釉である。内底面も無釉にしている。高台部の削り轆轤の回転方向は左回転である。第9図17(写真37A. B-1)も輪高台白磁小皿の完器である。口径は約74mm底径約49mm高さ約19mmである。胎土は灰褐色を呈し磁質である。白磁釉は灰白色、半透明である。胴部下部から底部は無釉である。内底面も無釉にしている。高台部の削り轆轤の回転方向は左回転である。また成形時の轆轤回転方向が左回転であることも分かった。

#### その他の白磁

第9図18(写真38A. B-6)は小碗である。口径、高さは不明である。高台外径は約34mmである。胎土は褐色を呈し磁質である。白磁釉は青白色、透明で貫入が入る。底部は無釉である。内底面は蛇ノ目状に釉を拭っている。高台部の削り轆轤の回転方向は左回転である。第9図19(写真38A. B-2)は小皿である。口径約100mm高台外径約45mm、高さ22mmである。胎土は灰白色を呈し磁質である。白磁釉は青白色、透明である。畳付のみ無釉である。内面は型打ちにより菊皿形状としている。外面無文である。薄手の造りで割高台白磁小皿とは対照的な作となっており、上記白磁群とは産地・時代に相違があるかも知れない。唯一

片の採集品であり、混入品の可能性もあり、16世紀代に下る製品となるものかも知れない。ただ上記一括製品群と共伴した可能性も捨てきれず、今後の研究課題として敢えて省略せずに掲載した。第9図20（写真37A. B-3）は碗である。口径約127mm高台外径約52mm高さ55mmである。胎土は灰白色を呈し半磁質である。白磁釉は青白色、半透明である。畳付のみ無釉である。内底面の釉は薄く重ね焼痕と思われる痕跡がある。きわめて厚手の造りで唯一点の採集品である。第9図21（写真38A. B-4）は碗である。口径約150mm高台径、高さは不明である。胎土は灰色を呈し磁質である。白磁釉は灰色、透明である。口縁は外反している。唯一点の採集品である。第9図22（写真38A. B-3）は碗である。口径約180mm高台径、高さは不明である。胎土は白色を呈し磁質である。白磁釉は青白色、透明である。口縁は口禿となっている。唯一点の採集品である。こうした口禿白磁碗・皿は13世紀末～14世紀前半頃に位置付けられ、後述する割高台白磁小皿を生産していた中国福建省邵武市四都窯址でも発見されている。たんなる混入品としてしまうには気になる。古いタイプの製品も何らかの理由で一緒の船に積載されていた可能性もあり、今後の検討課題として、敢えて掲載した。

#### 4. 青花について

第8表に青花考察表を掲げてあり、本報告書に写真掲載したすべての青花片の特色をまとめてある。以下に報告するのは、それらの中から代表的で基準となりうる資料、また類例の稀少な資料との両面の視点からさらに絞り込み抽出して実測図を作成し、考察し得た内容をより詳しくまとめたものである。

##### 碗 類

第10図1（巻頭カラー8A. B-2）は捻り菊文碗である。口径高さは不明である。高台外径約60mmである。胎土は灰白色を呈し磁質である。白磁釉は青白色、透明である。畳付のみ無釉である。コバルト顔料による青花は内底面に2重圏線内に13弁の捻り菊文を描いている。外面は高台際と胴部下部に圏線が見られ、側面の文様は内外面とも不明である。高台底面にカンナ痕が見られ、高台は失われているが、かなり内傾しており、削り出し高台ではなく付け高台と思われる。第10図2（巻頭カラー8A. B-5）は捻り菊文碗である。口径高さは不明である。高台外径約60mmである。胎土は白色を呈し磁質である。白磁釉は青白色、透明である。畳付のみ無釉である。コバルト顔料による青花は内底面に2重圏線内にやはり13弁の捻り菊文を描いている。外面は高台側部に1圏線高台際と胴部下部にもそれぞれ圏線が見られ、側面の文様は内外面とも不明である。上記第10図1に類似する。高台はかなり内傾しており、削り出し高台ではなく付け高台と思われる。青磁碗のつくりと比べると薄い造りであるが、成形工程は挿図に示した青磁の成形工程に近いものようである。以下の青花碗についてもすべて同じような成形方法が想定される。

第10図8（巻頭カラー9A. B-6）は梅枝文碗である。口径高さは不明である。高台外径約60mmである。胎土は褐色を呈し磁質である。白磁釉は白色、半透明である。畳付のみ無釉である。コバルト顔料による青花は内底面に2重圏線内に梅枝文を描いている。外面は高台側部に2圏線、胴部下部にも2圏線が見られ、側面の文様は内外面とも不明である。高台部付け高台の痕跡がある。第10図9（巻頭カラー9A. B-7）は梅枝文碗である。口径高さは不明である。高台外径約65mmである。胎土は灰白色を呈し磁質である。白磁釉は白色、半透明で貫入が入る。畳付のみ無釉である。コバルト顔料による青花は内底面に2重圏線内に梅枝文を描いている。外面は高台側部に2圏線が見られ、側面の文様は内外面とも不明である。高台部付け高

台と思われる。第10図10（巻頭カラー9A. B-2）は梅枝文碗である。口径高さは不明である。高台外径約60mmである。胎土は褐色を呈し磁質である。白磁釉は黄白色、半透明で貫入が入る。畳付のみ無釉である。コバルト顔料による青花は内底面に2重圏線内に梅枝文を描いている。外面は高台際に2圏線が見られ、側面の文様は内外面とも不明である。高台部付け高台と思われる。第11図1（巻頭カラー9A. B-1）は梅枝文碗である。口径高さは不明である。高台外径約62mmである。胎土は褐色を呈し磁質である。白磁釉は白色、半透明で貫入が入る。畳付のみ無釉である。コバルト顔料による青花は内底面に2重圏線内に梅枝文を描いている。上記3点の梅枝文よりも簡略化された図柄になっている。外面は高台際に2圏線が見られ、側面の文様は内外面とも不明である。高台部付け高台の痕跡がある。第11図3（写真40A. B-5）は梅枝文碗である。口径高さは不明である。高台外径約60mmである。胎土は灰白色を呈し磁質である。白磁釉は黄白色、半透明で貫入が入る。畳付のみ無釉である。コバルト顔料による青花は内底面に2重圏線内に梅枝文を描いている。外面は高台際に2圏線が見られ、側面の文様は内外面とも不明である。高台部付け高台と思われる。第11図4（写真41A. B-2）は梅枝文碗である。口径高さは不明である。高台外径約46mmでやや小振りの碗となる。胎土は褐色を呈し磁質である。白磁釉は黄白色、透明である。畳付のみ無釉である。コバルト顔料による青花は内底面に2重圏線内に梅枝文を描いている。「月」の部分も良く残っている。高台部、胴部とも欠失し側面の文様は内外面とも不明である。高台部付け高台の痕跡がある。

第11図5（写真42A. B-1）は梅枝文（寿字文）碗である。口径高さは不明である。高台外径約45mmでやや小振りの碗となる。胎土は灰白色を呈し磁質である。白磁釉は青白色、透明である。畳付のみ無釉である。コバルト顔料による青花は内底面に2重圏線内に梅枝文を寿字文風に描いている。外面は高台際に2圏線が見られ、側面の文様は内外面とも不明である。高台部付け高台の痕跡がある。第11図6（写真42A. B-4）は梅枝文（寿字文）碗である。口径高さは不明である。高台外径約40mmでやや小振りの碗となる。胎土は白色を呈し磁質である。白磁釉は青白色である。畳付のみ無釉である。コバルト顔料による青花は内底面に2重圏線内に梅枝文を寿字文風に描いている。高台部、胴部とも欠失し側面の文様は内外面とも不明である。高台部付け高台と思われる。第11図7（写真42A. B-2）は梅枝文（寿字文）碗である。口径高さは不明である。高台外径約40mmでやや小振りの碗となる。胎土は白色を呈し磁質である。白磁釉は青白色、透明である。畳付のみ無釉である。コバルト顔料による青花は内底面に2重圏線内に梅枝文を寿字文風に描いている。外面は高台際に2圏線が見られ、側面の文様は内外面とも不明である。高台部付け高台と思われる。

第11図8（写真42A. B-9）は碗の胴部である。口径、高台外径、高さはいずれも不明である。胎土は褐色を呈し磁質である。白磁釉は青白色、半透明である。コバルト顔料による青花は外側面に圏線と草花状の文様が垣間見られる。胎土・釉色・コバルト顔料・文様筆法などの類似性から上述の青花碗類の胴部になるものと推定する。第11図9（写真42A. B-6）は碗の口縁部である。口径、高台外径、高さはいずれも不明である。胎土は褐色を呈し磁質である。白磁釉は黄白色、透明である。コバルト顔料による青花は口縁下に唐草状の文様と胴部に圏線が見られる。口縁は軽く外反する形状である。胎土・釉色・コバルト顔料・文様筆法などの類似性から上述の青花碗類の口縁部になるものと推定する。第11図10（写真42A. B-7）は碗の口縁部である。口径、高台外径、高さはいずれも不明である。胎土は褐色を呈し磁質である。白磁釉は灰白色、半透明である。コバルト顔料による青花は外面口縁下では円渦状の花文が描かれ、内面口縁下には雷文帯が見られる。口縁は外反する形状である。胎土・釉色・コバルト顔料・文様筆法などの類似性から上述の青花碗類の口縁部になるものと推定する。第11図11（写真42A. B-5）は碗の口縁部である。口径、高台外

径、高さはいずれも不明である。胎土は白色を呈し磁質である。白磁釉は青白色、透明である。コバルト顔料による青花は外面口縁下では唐草状の文様が描かれている。口縁は外反する形状である。胎土・釉色・コバルト顔料・文様筆法などの類似性から上述の青花碗類の口縁部になるものと推定する。第11図12（写真42A. B-8）は碗の口縁部付近の破片である。口径、高台外径、高さはいずれも不明である。胎土は白色を呈し磁質である。白磁釉は青白色、透明である。コバルト顔料による青花は外面口縁下では唐草状の文様が描かれ、内面口縁下には雷文帯と思われる文様が見られる。胎土・釉色・コバルト顔料・文様筆法などの類似性から上述の青花碗類の口縁部付近になるものと推定する。

### 皿 類

第10図3（巻頭カラー 10A. B10）は羯磨文皿である。口径高さは不明である。高台外径約110mmである。胎土は褐色を呈し磁質である。白磁釉は灰白色、透明で貫入が入る。畳付のみ無釉である。コバルト顔料による青花は内底面に2重圏線内に羯磨文を描き、さらにその外側の内側面（内壁）に花卉状の楕円点文を配している。他の青花に比して筆法がしっかりしている。第10図4（巻頭カラー 10A. B-2）は捻り菊文皿である。口径高さは不明である。高台外径約50mmである。胎土は白色を呈し磁質である。白磁釉は灰白色、透明である。畳付のみ無釉である。コバルト顔料による青花は内底面に2重圏線内に捻り菊文を描いている。第10図1・2の捻り菊文碗の花卉が13弁であるのに対して、ここでは6弁かと思われ、幅広い花卉とし2重線で表現されている。第10図5（巻頭カラー 10A. B-5）は花文皿である。口径高さは不明である。高台外径約70mmである。胎土は褐色を呈し磁質である。白磁釉は青白色、透明である。畳付のみ無釉である。コバルト顔料による青花は内底面に2重圏線内に抽象的な花文が描かれている。第10図6（巻頭カラー 10A. B-8）は花文皿である。口径高さは不明である。底部径約60mmである。この皿はいわゆる碁笥底となっていて、底部が抉られていて、本来の高台はない。胎土は白色を呈し磁質である。白磁釉は黄白色、透明である。畳付のみ無釉である。コバルト顔料による青花は内底面に抽象的な花文が描かれ、その外周に蓮弁風の文様が配されている。外面にも縦線文が連続して描かれている。第10図7（巻頭カラー 10A. B-9）は野菜文皿である。口径高さは不明である。高台外径約60mmである。胎土は白色を呈し磁質である。白磁釉は青白色、透明である。畳付のみ無釉である。コバルト顔料による青花は内底面に圏線内に蔦を伴った植物文が描かれ、野菜文とした。第11図2（巻頭カラー 10A. B-9）は梅枝文皿である。口径高さは不明である。高台外径約60mmである。胎土は白色を呈し磁質である。白磁釉は青白色、半透明である。畳付のみ無釉である。コバルト顔料による青花は内底面に2重圏線内に梅枝文が描かれ、月の部分も見られる。外面胴部下半に青花の圏線が見られる。

## 5. 鉄釉について

第7表に鉄釉考察表を掲げてあるが、それらは名蔵シタダル海底遺跡採集の鉄釉陶器のうち、代表的で基準となりうる資料で、なるべく遺存状態のよいものを抽出した。鉄釉の製品には混在の恐れのある陶片も含まれるが、敢えて写真には掲載して今後の検討課題として提供した。

第12図1（写真43A. B）は甕の完全に残った口縁部である。肥厚口縁形状となり、口径は約191mmである。胎土は灰褐色を呈し陶質で、小石粒などの混入物は少ない。鉄釉は茶褐色であり、内面も残存している部分の部位には施釉されている。頸部には荒い回転痕が見られ、その下の肩部には叩き状の加圧痕が円周上に巡っ

ている。内外面所々にサンゴ石灰が付着している。第12図2（写真43C. D）は甕の完全に残った口縁部である。上記例と酷似するが、両個体とも口縁部が完存しているので別個体である。肥厚口縁形状となり、口径は約200mmである。胎土は灰色を呈し陶質で、小石粒などの混入物は少ない。鉄釉は茶褐色であり、内面も残存している部分の部位には施釉されている。頸部には荒い回転痕が見られ、その下の肩部には叩き状の加圧痕が円周上に巡っている。内外面所々にサンゴ石灰が付着している。第12図3（写真43E. F）も甕の口縁部である。これも肥厚口縁形状となり、口径は約188mmである。胎土は灰褐色を呈し陶質で、小石粒などの混入物は少ない。鉄釉は茶褐色であり、内面も残存している部分の部位には施釉されている。頸部には荒い回転痕が見られ、その下の肩部には叩き状の加圧痕が円周上に巡っている。肥厚口縁の製作が粘土紐を本体口縁部を巻く様に1回継ぎで行っていることが分かる資料である。内外面所々にサンゴ石灰が付着している。上記2点と同種だが別個体である。第12図4（写真44A. B）も甕の口縁部である。これも肥厚口縁形状となり、口径は約190mmである。胎土は灰白色を呈し陶質で、小石粒などの混入物は少ない。鉄釉は茶褐色であり、内面も残存している部分の部位には施釉されている。頸部には荒い回転痕が見られ、その下の肩部には叩き状の加圧痕が円周上に巡っている。内外面所々にサンゴ石灰が付着している。上記3点と同種だが別個体である。

第12図5（写真44C. D）は壺の口縁部である。これもラッパ状口縁形状となり、口径は約190mmである。胎土は灰褐色を呈し陶質で、わずかに小石粒などの混入物が認められる。鉄釉は黒色であり、一部剥落している。内面は頸部付近まで施釉されていて、それ以下は無釉である。肩部に横耳が貼付されていて、直下に2圏線が施されているらしい。内面肩部付近に回転痕が見られる。このタイプの鉄釉は時としてタイ産といわれるもので、タイ陶磁に詳しい吉良文男氏のご教示ではタイのメナム・ノイ（Mae Nam Noi）窯の製品ではないかとのことである。メナム・ノイ（Mae Nam Noi）窯とは15～16世紀のタイ・アユタヤ王朝の時代に中部タイのメナム・ノイ（Mae Nam Noi）地域にあった窯で、鉄釉のかかった壺・甕類を集中的に生産していた窯址群である（註3）。第12図6（写真44E. F）も壺の口縁部である。これも上記よりも小振りのラッパ状口縁形状となり、口径は約110mmである。胎土は灰赤色を呈し陶質で、わずかに小石粒などの混入物が認められる。鉄釉は黒色であり、一部剥落している。内面は頸部付近まで施釉されていて、それ以下は無釉である。肩部に横耳が貼付されている。一部にサンゴ石灰が付着している。

第12図7（写真46A. B-2）は甕の口縁部である。玉縁口縁形状として分類したが、口縁端は必ずしも明確な玉縁とはしてはいない。頸部から口縁部にかけて斜めに口縁を絞り口径を狭め、口縁端を丸く収めた形状である。口径は約280mmである。胎土は茶褐色を呈し緻密な陶質であり、叩くと石質音を発す。鉄釉は黒褐色であり、一部剥落している。また内外面の一部にサンゴ石灰が付着している。第12図8（写真46A. B-1）も甕の口縁部である。上記と同種の玉縁口縁形状として分類した鉄釉甕である。こちらでは口縁端はより玉縁形状を残している。頸部から口縁部にかけて斜めに口縁を絞り口径を狭め、口縁端を折り返して玉縁形状としている。口径は約280mmである。胎土は茶褐色を呈し緻密な陶質であり、叩くと石質音を発す。鉄釉は黒褐色であるが、かなり剥落している。また内外面の一部にサンゴ石灰が付着している。この2点と同種の資料を八重山博物館収蔵資料の中にも見出した。

第12図9（写真45C. D）は甕の底部である。底径約158mmあり、底部をかなり上げ底に造っている。胎土は灰褐色を呈し陶質である。鉄釉は茶褐色がサンゴ石灰の付着面下に薄く確認出来る。内底面に回転痕は認められず、フラットな造りとなっている。また断面は層状をなしており、紐造り（巻き上げ轆轤成形か）



を示唆している。胎土に違いがあるが、肥厚口縁タイプの鉄釉甕の底部と考えている。第12図10（写真45CA. B）も上記と類似した甕の底部である。底径約190mmあり、底部をかなり上げ底に造っている。胎土は黒褐色を呈し陶質であり、小石粒をかなり含んでいる。鉄釉は相当剥落しているが、外面黒褐色で内面茶褐色気味の色調を残している。内底面に回転痕は認められず、フラットな造りとなっている。また断面は層状をなしており、紐造り（巻き上げ轆轤成形か）を示唆している。肥厚口縁タイプの鉄釉甕の底部と考えている。

## 6. 「顧氏」銘青磁碗考

今回整理した名蔵シタダル海底遺跡の採集品中に青磁碗内底面に「顧氏」銘印の打たれたものは、12例確認された。また八重山博物館収蔵の名蔵シタダル海底遺跡採集の資料中にも1点確認出来た。前述したように上記の資料のうち6点を図版（実測図）掲載した。すなわち第4図5（巻頭カラー5A. B-1）の青磁大碗、第5図1（巻頭カラー4A. B-1）の青磁大碗、第5図2（写真19A. B-2）の青磁碗、第5図3（写真19A. B-5）の青磁碗、第5図4（写真20A. B-2）の青磁碗、第5図5（写真20A. B-6）の青磁碗が「顧氏」銘の青磁碗の代表例である。世界の遺跡でこれほどの量がまとまって出土した例は他に無く、名蔵シタダル海底遺跡の特色ある遺物とし注目される。ちなみに日本出土の「顧氏」銘青磁の集成を行い、第10表に報告書を掲載した。山梨県東八代郡一宮町新巻本村の報告の重複分を除外すると46遺跡（遺跡群については地点ごとに一遺跡としてカウント）で54点である。沖縄県の遺跡は15遺跡から23点発見されている（名蔵シタダル海底遺跡分除外）。ついで大阪府堺環濠都市遺跡で7遺跡（地点）7点、福井県一乗谷朝倉氏遺跡で5遺跡（地点）5点、福岡県博多遺跡群で4遺跡（地点）4点という順になり、日本を代表する中世遺跡からの出土が目立つ。名蔵シタダル海底遺跡の「顧氏」銘青磁を計上すれば全点で67点となり、全国の19.4%を名蔵シタダル海底遺跡の採集量で占めることになる。また沖縄県全体で見ると総数36点で53.7%と全国出土点数の半数以上を占めていることになる。第13～16図に上記第10表掲載の日本国内遺跡から代表的な「顧氏」銘青磁の実測図を抜き出し34点を転載した。また巻頭カラー11A. Bに静嘉堂文庫美術館所蔵「顧氏」銘青磁盤を掲載した（註4）。写真47A. Bには山梨県東八代郡一宮町新巻本村出土の「顧氏」銘青磁碗を載せた。書体や印刻デザインなどを比較する資料となるように配慮した。さらに第16図3～7に漢印といわれる資料のうち、名蔵シタダル海底遺跡採集の「顧氏」印になるべく近い例を選び「顧」と「氏」の漢字を参考として掲載し、まずは青磁内底面に押された印文が「顧氏」と判読出来ることを示した。「顧」字では「顧氏」銘青磁の「顧」とぴったりの例は無いが、偏や旁の一部分に類似する書体が認められよう。また「氏」では趙氏昌印、清の陳豫鍾印、王氏睢印などがぴったりになる例である。これら「顧氏」銘青磁の年代観については後述する。

「顧氏」銘青磁に注目する理由に、この青磁が中国浙江省の龍泉窯で明代正統時期（1436-49）に活躍した顧仕成に由来する名称である点が挙げられる。顧仕成及び「顧氏」銘青磁に最初に注目されたのは中国の代表的陶磁研究者で龍泉青磁研究のパイオニアでもある陳万里先生（以下敬称略）であった。またわが国で同じく顧仕成に注目されたのは、これまた日本の陶磁研究の基礎を作られた小山富士夫先生（以下敬称略）であった。両巨匠が注目されるだけの意味を持つものであったが、その後ほとんど何故か研究されることはなかった。筆者はかつて1979年12月～1980年1月に大瀨永亘氏、谷川章雄氏らと自費で発掘調査を行って、報告書を出版した『石垣島仲筋貝塚発掘調査報告書』（註5）の中で、1980年までに採集されていた名蔵シ

タダル海底遺跡の明代陶磁器の検討をした際に、陳万里の「顧氏」銘に関する研究成果を活用させていただいた。以下にその後、顧仕成及び「顧氏」青磁について知りえた内容を名蔵シタダル海底遺跡採集の「顧氏」銘青磁と関連付けながら、考察してゆくこととする。

陳万里は1941年に『瓷器與浙江』を出版し、また1956年に『中国青瓷史略』を出版しているが、両著書中に顧仕成の記載が見られる(註6)。特に前著の中の「龍泉訪古記」は1928年に龍泉を訪ねた際の記録であり、そこで既に『龍泉縣志』所載の顧仕成について引用し、龍泉の竹口が顧仕成の窯のあった地であると述べられている。また後者の書籍でも『龍泉縣志』の同一箇所(物産編)を引用した上で、龍泉の大窯と竹口に「顧氏」銘青磁片が見られ、特に大窯には多く見られることを報告している。竹口一帯は『龍泉縣志』に記されている「化治」以降、すなわち成化期(1465-1487)・弘治期(1488-1505)以降の青磁の質が悪化した時期の窯とされている。陳万里は引用した『龍泉縣志』がいつの刊本なのかは明記していないが、内容は後述した乾隆27年刊本(1762)や光緒4年刊本(1878)からの内容である。陳万里の書籍には陶磁器片の写真や図が全く掲載されていないため、こうした窯址から採集された具体的な陶磁器内容がつかみ得ない点は残念である。

一方小山富士夫は『支那青磁史稿』の中で「顧氏」銘青磁について、多くは陳万里の研究成果を紹介され、旧帝室博物館で所蔵されていた1点の「顧氏」銘青磁碗を写真で紹介している(註7)。この作品は1935年に『やきもの趣味』という雑誌ですでに紹介されており(註8)、その際の図版解説とも併せて考察してみると、それは本報告の「顧氏」銘青磁のいずれとも異なっている。内底面に楷書風の「顧氏」印を打った後、印文部以外の内面全体に鉄釉を塗り、(上記解説では内面全体に鉄釉を施しているとあるが、写真では印文部分が無釉に見える)その後口縁端部から外面にかけて青磁釉を施釉し、さらに鉄斑文を置いて所謂飛青磁とした青磁碗に見える。また氏は『龍泉縣志』には直接当たられていたようである。龍泉縣志には「顧仕成孝子の門、南隅の人、繼母に事へて孝謹なり、母疽を病む、血を呪ひて愈ゆ。歿するに及び墓に廬すること三年、明景泰の年に旌す」とあり、龍泉縣南隅の人で、義母への孝養の篤かつたのでしられてゐた人である(註9)と記されている。この「南隅の人」との記述は後に記載した順治12年刊本(1655)、乾隆27年刊本(1762)、光緒4年刊本(1878)のいずれの『龍泉縣志』中にも見出せない(註10)。小山富士夫は同書中別の箇所、順治或いは萬曆版の龍泉縣志には「近亦窯戸稀絶矣」とあり、明末既に窯数の非常に少なくなつたのは事實のやうである。とも記載され、萬曆版の『龍泉縣志』をも閲読されていることを示唆されており、筆者が見ていない萬曆版中にある記載であろうか。ちなみに順治12年刊本『龍泉縣志』の巻首や光緒4年刊本『龍泉縣志』の例言中には嘉靖乙酉(1525)の嘉靖版、萬曆戊戌(1598)の萬曆版の存在が記載されているので、そうした書籍には顧仕成に関する記載に違った内容も記されていた可能性がある。残念ながら筆者の調査では順治12年刊本まで探るのが限度であった。次に顧仕成に関する記述を『龍泉縣志』から抜粋報告しておくこととする。

順治12年(1655)刊本『龍泉縣志』「卷之四 食貨」中

「青瓷窯 辨課

琉田 一都	道泰 二十一都
大□垵 二十都	安福二十三都
蛤湖 二十一都	因溪垵 二十一都已上見存
官田	兪溪

大浪坑 已上廢久

瓷窯昔屬劍川自柘鄉立慶元縣窑地遂屬慶  
元去龍邑幾二百里不知者尚搜之劍川舟輿  
躡沓地方驛騷兩邑均任其責且竹口一方邇  
來閩寇闖入燒燬民居窯戶稀絕以鳩鵲子遺  
應不次供辦噫其亦難矣

烏瓷窑 辨課

宏山 十七都見存

陳彎 久廢

磚瓦窑 辨課

大沙 二十都 塘田 十八都已上見存

里山 南坑

直衛 大口

盧陂 沛田 已上久廢

缸鉢窑

劍池湖 在治南二里見存」

と見える。この大意を以下に記す。

「青瓷窯 課税

琉田 一都（地区・図）にあり 道泰 二十一都（地区・図）にあり

大□垵 二十都（地区・図）にあり 安福 二十三都（地区・図）にあり

蛤湖 二十一都（地区・図）にあり 因溪垵 二十一都（地区・図）にあり 以上は現存

官田 兪溪

大浪坑 以上は廢窯になって久しい

瓷窯は昔、劍川に属していたが、郷を分けて慶元県を立ててからは窯のある地域はついに慶元県になり、龍泉の村々の数百里先である。このことを知らない人は窯を今なお劍川の山河に捜し求めたりする。その地方が乱れて、二村にひとしくその責任を負わされたが、一方の竹口にはその後福建からの略奪者達が暴れ込み民家を焼き尽くし、窯工場はほとんど無くなってしまった。野山の鳩やコウノトリだけはかろうじて生きながらえているが、その実情を後世に伝えることは出来ない。ああそれも何とも忌まわしいことかな。

烏瓷窑 課税

宏山 十七都にあり

陳彎 廢窯になって久しい

磚瓦窑 課税

大沙 二十都（地区・図）にあり 塘田 十八都（地区・図）にあり 以上は現存

里山 南坑

直衛 大口

盧陂 沛田 以上は廢窯になって久しい

缸鉢窑

劍池湖 県治の南二里にあり 現存」との内容と概ね理解したが、意味を明確に出来なかった部分もあり、今後の課題としたい。

さらに「卷之六 人物」の孝友中に

「明

顧仕成少失所恃父娶後母李氏父没仕成事後  
母曲盡子道凡母嗜好率如所欲母疾必供養  
湯藥衣不解帶暨母裘廬墓三年朝夕哀哭誠  
感禽鳥有司以孝聞景泰壬申旌爲孝行立孝  
子坊」

と見える。この大意を以下に記す。

「顧仕成は幼くして母を失い、父は後妻に李氏を娶った。父が亡くなってから、顧仕成は継母につかえ、子としての道はすべて尽くした。おおよそ母が好き好むものは、すべてその意のままにした。母が病になった時には、面倒をみて煎じ薬を与え、上着を脱いで休むことすらしなかった。亡くなった際には喪に服し、墓のそばの庵で三年朝夕泣き暮らした。そうした心は禽鳥たちさえをも感動させた。役人が顧仕成の孝行ぶりを聞き伝え、景泰壬申（1452）の年に孝子坊を立てて彼を表彰した」との内容である。

次に乾隆27年（1762）刊本を載せる。「卷之三 賦役 物産」に以下の記述がある。

「青瓷窑 一都琉田

瓷窑昔屬劍川自析郷立慶元縣窑地遂屬慶元去  
龍邑幾二百里明正統時顧仕成所製者已不及生  
二章遠甚化治以後質麤色惡難玄雅玩矣

烏瓷窑 十七都宏山

磚瓦窑 十八都塘田等處

缸鉢窑 治南二里劍池湖」

とある。この大意を以下に記す。

「青瓷 一都（地区・図）の琉田にあり

瓷窑は昔、劍川に属していたが、郷を分けて慶元県を立ててからは窯のある地域はついに慶元県になり、龍泉の村々の数百里先である。明の正統時（1436-1449）顧仕成が製造する陶磁器は、（龍泉窯の創始者といわれる宋時代の）生二章の作品には、すでに遙か遠く及ばなくなっていた。成化（1465-1487）・弘治（1488-1505）以後の製品の質は粗く色も悪く、とても鑑賞には堪えられないものになっていた。

烏瓷窑 十七都（地区・図）宏山にあり

磚瓦窑 十八都（地区・図）の塘田などの処にあり

缸鉢窑 県治南二里の劍池湖にあり」との内容である。

また「卷之十 人物 孝友」に以下の記述がある。

「明

顧仕成父没事繼母李氏孝謹凡母嗜好率如所欲母  
疾供侍湯藥衣不解帶及歿哀毀既葬廬墓三年有  
白兔紫芝之祥有司以孝聞景泰壬申立孝子坊以

旌之」

と見える。この大意を以下に記す。

「顧仕成は父が亡くなってから、継母の李氏に大変慎み深くつかえた。おおよそ母が好き好むものは、すべてその意のままにした。母が病になった時には、その側につかえて煎じ薬を与え、上着を脱いで休むことすらしなかった。亡くなった際には喪にあたって哀しみ瘦せてしまい、葬儀後には墓のそばの庵で三年暮らした。瑞兆の知らせである白兎と靈驗のあらたかな紫芝（靈芝）の兆しが現れた。役人が顧仕成の孝行ぶりを聞き伝え、景泰壬申（1452）の年に孝子坊を立てて彼を表彰した」との内容である。

光緒4年刊本（1878）の『龍泉縣志』では上記乾隆27年刊本の内容と二部分とも一字一句同じであるので、重複は避け、ここには掲載しない。この他に光緒3年刊本（1877）の『光緒處州府志』「卷之二十 孝友」中に顧仕成の記述があるので掲載する。

「顧仕成龍泉人事繼母孝謹母病疽吮血而愈及歿哀

毀既葬廬墓有白兎紫芝之祥景泰間旌其門」

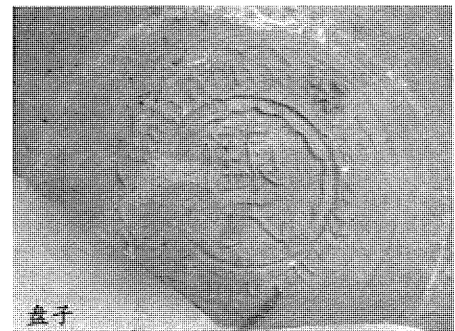
と見える。この大意を以下に記す。

「顧仕成は龍泉の人である。継母に大変慎み深くつかえた。母が腫れものの病を患った時、その血を吸って癒した。亡くなった際には喪にあたって哀しみ瘦せてしまい、葬儀後には墓のそばの庵で暮らした。瑞兆の知らせである白兎と靈驗のあらたかな紫芝（靈芝）の兆しが現れた。（そこで役人は）景泰の頃（1450－1456）にその一族を表彰した」との内容である。

以上の文献内容を整理し、まとめてみることにする。順治本の食貨編の青瓷窯の記載中には顧仕成の記載はなく、その後の乾隆本・光緒本には青瓷窯の文中には顧仕成の名が見える。またいずれの文献中の人物編の顧仕成の項目の中でも、窯業・陶磁器に関する記載はなく「孝子」の人であったことのみ語られている。こうしてみると乾隆本・光緒本の付加部分は他の書籍か嘉靖刊本の龍泉縣志などに記載されていたものを切り取り貼り付けたことも考えられる。順治本よりも乾隆本では顧仕成をクローズアップしていることが言えよう。

昔、龍泉の諸窯が慶元県に属していたとの記載内容は間違いであるとの指摘は、陳万里の書籍中に見られ、ただ竹口のみは慶元県に属しているとも指摘されている。しかしこの文献の原本になったと思われる嘉靖4年（1525）本の編纂された時期に青磁を焼成していた中心地域が竹口地域であった故からの記載と考えられまいか。また前述したように陳万里は「顧氏」銘の青磁が大窯と竹口一帯特に後窯許窯や後窯陳窯などの窯で発見されることを指摘している。この「後窯」の意味は先にあった窯、以前あった窯すなわち大窯地域にあった顧仕成の窯に対しての意味なのかとも問題を提起されていて、後代顧仕成に関わる工房が大窯地域から竹口地域に移転したことも指摘されている。

順治本にのみ記載された内容で「閩寇」とあり、竹口に福建地方からの略奪者達が暴れ込み民家を焼き尽くし、窯工場はほとんど無くなってしまった。との記述があり、これは弘治（1488－1505）～嘉靖4年（1525）の間に起こったことと考えられる。後述するように名蔵シタダル海底遺跡の「顧氏」銘青磁は竹口を中心とする地域の製品と想定される。浙江省の西南部で福建省境でもある慶元県で生産された青磁が福建の福州付近までおそらく福建第一の大河である閩江を經由して運ばれ、福建省邵武四都付近



挿図4 大窯楓洞岩窯跡出土顧氏銘盤

の白磁類とともに外洋船に積み替えられ沖縄方面に回漕されたものと考えられる。こうした経済活動の運搬役は福建人（閩人）の船頭たちであり、下層労働者達であろう。青磁の生産は浙江龍泉の窯業生産者であり、仲介商人・問屋たちは閩人・浙江人のいずれか、あるいは両者であったのであろう。上記「閩寇」の原因がこうした経済活動上のトラブルからだとしたら、竹口での窯業の復興は非常に難しいことになったのではなかろうか。消費地確保が出来ず、輸送ラインが切断されてしまったら、窯工場の復帰はあっても経済活動自体が成り立たない状況である。上記文献の記述のみからでは、こうした憶測が限度であろう。次に最近の大窯楓洞岩窯跡の発掘成果を活用して顧仕成とその製品について検討する。

2006年9月から2007年1月にかけて浙江省文物考古研究所・北京大学考古文博学院・龍泉青瓷博物館の連合調査団で大窯楓洞岩窯跡の発掘調査が実施された。元・明の瓷器が大量に出土し、永楽9年（1411）、永楽辛卯（1411）、「乙卯中・・・」（1375年もしくは1435年）等の年代を示す資料が多数発見されている。遺構として7期以上に亘って重複した竜窯1基、素焼窯1基、轆轤ピット2箇所、水箆粘土池3箇所、井戸1箇所、さらに工房・住居跡の石囲い、道路、排水溝などが発掘されている（註11）。

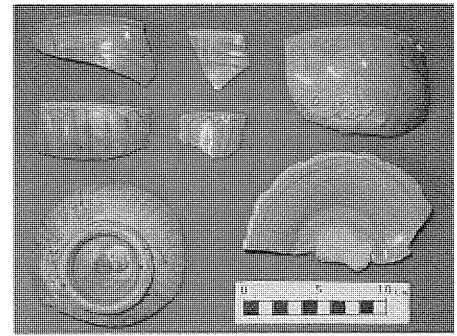
顧氏に関わる資料として内底面無釉のまま中央に行書体風の「顧氏」銘印の押された盤が発掘されている。重ね焼の痕跡も見える（挿図4）。また「顧閩祠堂」とヘラ書きされた瓷器碗が出土しており、これは特に注目される資料で、出土地が住宅中庭の空間からであり、そこが祠堂祭祀の行なわれていた場所ではないかと想定されている。（註12）今回の調査で出土している上手の明代青磁は永楽期のもので、いわゆる「処州官窯」の製品とも考えられている。窯跡の発見者たちは、すでに処州官窯として報告している。（註13）2007年12月～2008年12月に麗水市青瓷博物館と龍泉市博物館を訪問して参観した印象では、確かに並べられたこの窯跡からの上手の青磁の数々はトプカブ宮殿所蔵の明代青磁（註14）に類するものも多々あり、官窯レベルのものと感じられた。逆にトプカブ宮殿伝世の明代青磁の中に「顧氏」銘青磁を求めてみると、挿図5に示した青磁刻花蓮唐草文皿（註15）が内底面の中央の中房部に「□氏」と判読出来る印花文があり、「顧氏」となる可能性が強い。ここでの文様は中房に篆刻で「□氏」と印刻し、氏の部分は確かに「氏」と読めるが、前の一字は写真からでは不明である。その周囲に蕊を配し、さらにその外側に線刻で稜花式の蓮弁文を描く。蕊の表現は出土資料の挿図の「顧氏」銘青磁盤の蕊表現に似ている。そして内側面にヘラ彫りで流麗な唐草文を全面に描いたパターンである。後代の「顧氏」銘青磁はこの内側面のヘラ彫り文を省略した構成になるか、さらに内底面の印花文のみに簡略化されていることが分かる。トプカブ宮殿所蔵のこの作品が「顧氏」銘青磁だとすれば、まさに顧仕成の時代の作品となる例で15世紀第2四半期の製品となる。（挿図5）ただ大切な点は大窯楓洞岩窯跡の出土した青磁がすべてこうした上手のものなのか、層位や地点・遺構ごとに製品の内容に違いはないのか、時代差はないのかなどの点である。ちなみに上記「顧氏」銘の盤は新聞写真（挿図4）で見る限り、必ずしも上等な作ではなく、また巻頭カラー12Aに掲げた大窯烏窯出土の「顧氏」銘碗も最上級の製品とは言い難い。時代差なのか、供給先での質の相違のかなどの点を含めて、全体像が分かる本報告を待ちたいと思



挿図5 トルコ・トプカブ宮殿所蔵青磁皿「顧氏？」銘

のみに簡略化されていることが分かる。トプカブ宮殿所蔵のこの作品が「顧氏」銘青磁だとすれば、まさに顧仕成の時代の作品となる例で15世紀第2四半期の製品となる。（挿図5）ただ大切な点は大窯楓洞岩窯跡の出土した青磁がすべてこうした上手のものなのか、層位や地点・遺構ごとに製品の内容に違いはないのか、時代差はないのかなどの点である。ちなみに上記「顧氏」銘の盤は新聞写真（挿図4）で見る限り、必ずしも上等な作ではなく、また巻頭カラー12Aに掲げた大窯烏窯出土の「顧氏」銘碗も最上級の製品とは言い難い。時代差なのか、供給先での質の相違のかなどの点を含めて、全体像が分かる本報告を待ちたいと思

うが、筆者なりの想定をしてこの節をまとめたいと思う。顧仕成は明代正統年間（1436-1449）に活躍した陶磁製造業者で、当初、龍泉の大窯楓洞岩窯で青磁を生産していた。その工房は出土陶磁器から見ると永樂期（1403-1424）にも遡るようで、時には官からの委託を受けて、上記に述べたような「官窯」レベルの上手の作品を製造していたと推定する。すでにこうした上手の作品の一部に「顧氏」銘印は使用され出していたらしい。彼の没後ほどない景泰壬申（1452）に「孝子」の功で役所から表彰され、一門、工房にとっても大変な栄誉となり評判となった。それ故、青磁の刻印の「顧氏」銘もブランド銘としての名声を得、工房側も以前よりも多く「顧氏」銘を採用したのであろう。大窯楓洞岩窯址の「顧閭祠堂」は顧仕成自身が作ったものか、顧仕成の工房後継者一門が祖先を敬って建てたものかは不明で本報告を待ちたい。現状では、この遺跡から出土している「顧氏」銘青磁は15世紀第2～第3四半期のものと推定しておく。静嘉堂美術館所蔵の「顧氏」銘青磁盤（巻頭カラー11A・B）などもこの頃の作品と推測する。日本出土例では沖縄県那覇市湧田古窯跡出土の第13図6や第13図8がそうした頃ののものとなる可能性がある。外面に彫られた青磁蓮弁文が古式の鎬蓮弁文をまだ踏襲している点などに名蔵シタダル海底遺跡の一群の「顧氏」青磁に先行していると見るのである。この後、「顧氏工房」は竹口に移転するか、もしくは竹口にも第2、第3工房を展開していったものと想定する。龍泉県大窯村と慶元県竹口鎮とは直線距離では20数kmしかなく、大変近い地理的關係にある。この明代中期以降には、大窯窯址と竹口窯址は同一窯址群と見ることも可能かも知れない。成化（1465-1487）・弘治（1488-1505）以後の製品の質は粗く色も悪く、とても鑑賞には堪えられないものとは、まさに名蔵シタダル海底遺跡採集品に代表される「顧氏」銘青磁碗に冠された評価であると考えられる。ただし、名蔵シタダル海底遺跡採集青磁の中では「顧氏」銘青磁の一群は他のより質の粗い青磁よりも胎土・釉薬・焼成具合などの点で優れた感のある資料が多いことは銘記しておく。名蔵シタダル海底遺跡採集の他の青磁は、多少の個別差はあるが基本的には同一産地の製品と思われる。やはり浙江省龍泉県大窯から慶元県竹口地域（註16）（挿図6）のものではなからうか。



挿図6. 竹口鎮後窯窯址の製品

名蔵シタダル海底遺跡の線刻蓮弁文碗と酷似する青磁碗として江蘇省淮安県明代王鎮夫婦合葬墓出土の線刻蓮弁文碗があげられる（写真47C）。この墓主である王鎮の埋葬年代は墓誌から1496年であると判明している。この墓からはいわゆる人形手と呼ばれる歴史故事の内容をもった文様が内面一杯に深く型打ちされた青磁碗も伴出している（写真47D）（註17）。この発見は上記名蔵シタダル海底遺跡の青磁が15世紀第3～第4四半期のものとする傍証となる。

竹口地域に「閩寇闖入」と文献に記された様に福建からの略奪者達が暴れ込み民家を焼き尽くし、窯工場はほとんど無くなってしまったようである。竹口の「顧仕成工房」も多大の被害を受け恐らく窯の火を閉じたであろう。この事件の起きたと思われる弘治（1488-1505）～嘉靖4年（1525）頃の製品として山梨県東八代郡一宮町新巻本村出土の細線刻蓮弁文碗タイプの「顧氏」銘青磁碗（写真47A・B）を想定する。このタイプは碗自体が小振りになっており、外面のヘラ彫り蓮弁文の筆法に明らかな退化現象が見て取れる。蓮弁側部をラフな単線の棒線引きで描き、頂部の弁端も連続波形文もしくは連続鋸歯文で無造作に一周描いている。内底面には花文中に篆書で「顧氏」と刻まれた印が押され、その外周には線刻で蓮弁文が描かれている。こうした例が「顧氏」銘青磁の最後の製品になるものと推定する。

## 7. 割高台白磁小皿考

名蔵シタダル海底遺跡分を除外して筆者の日本全国からの報告書集成では、第11表に示した様に313冊の報告書類に割高台白磁小皿を確認している。報告書類に同一遺跡の同一遺物であるといった多少の重複もあるが、日本全国でおよそ250～300近くの遺跡で、割高台白磁小皿が出土している。参考のためその大まかな数量と内訳を重複したままの数値で見ると、割高台白磁小皿の出土点数696点で、うちaタイプ212点（30.5%）、bタイプ174点（25%）、不明310点（44.5%）である。県として、沖縄県が圧倒的に多く沖縄本島の首里城を中心として、先島地域の石垣島・西表島・竹富島・宮古島など琉球諸島の隅々の遺跡から出土している。本土の遺跡で集中して多く発見されているのは、福井県一乗谷朝倉氏遺跡が際立って多く、ついで大阪府堺環濠都市遺跡であり、さらには福岡県博多都市遺跡群などである。鹿児島県も本土の遺跡中ではかなり多い出土地域であるが、面白い点は奄美諸島の遺跡からの報告が少ない点である。これはただ15世紀代の遺跡調査例が少なかったり、報告事例が少なかったりしているだけの理由からなのか、あるいは貿易ルート上の問題なのか、今後確認して行く必要があるだろう。同じく日本の中世を代表する遺跡である広島県福山市の草戸千軒遺跡からは当然一定量の発見は見られるが意外と少ない。さらには瀬戸内地域全体での発見も大変少なく、逆に太平洋側の高知県南国市田村遺跡から12片以上出土し、同じく後述する明應2年（1493）の墨書のある護符を同一層で伴出している高知県喜川郡芳原城跡では6片の出土があり、集中した出土量が目立つ。応仁の乱（1467～1477）を前後する時期の航海ルートの変更なども関連するのか興味ある点であろう。日本海側では北陸・東北地方に多く、福井県一乗谷朝倉氏遺跡のほかには新潟県北蒲原郡江上館跡で20片以上の報告がある様に城館跡からの出土がかなり目立つ。ただし石川県江沼郡山中町九谷A遺跡出土例のように日本海からはかなり離れた今までの概念では山間僻地といわれた様な山間部にまで普及していることは中世の流通を考える上で今後再検討課題となろう。関東・甲信越地方では神奈川県、埼玉県、栃木県、茨城県、山梨県、長野県等では筆者の力不足からであろうが、割高台白磁小皿の発見に至っていない。東京や千葉でそれなりの数量が発見され、特に千葉県匝瑳郡光町の篠本城跡では23片以上の割高台白磁小皿が発見されている。この遺跡は太平洋側の遺跡でもあり、上記諸県を経由してこの陶磁器も搬入されたと考えるのが普通である。地域史として交易ルートを探ることも今後の課題となってゆこう。それには第11表をもとにさらに精度の高い出土表を作成すると交易ルートの問題や地域間の歴史が見えてくるものと思う。そうした基礎資料にも活用願えれば幸いである。ちなみに割高台白磁小皿が出土した最も新しい時期の遺跡としては、筆者も実見した江戸城外堀跡の四谷御門外橋詰の石垣からの事例で18～19世紀の遺構から多数の近世陶磁器と伴出している（註18）。さて、こうした日本列島の遺跡の中でも名蔵シタダル海底遺跡からの割高台白磁小皿の採集量は群を抜いて多い。

名蔵シタダル海底遺跡の357点の割高台白磁小皿中ほとんど90%以上の資料がbタイプである。ただし少ないながらも、確実にaタイプも伴出している。いくつかの報告書では、aタイプが先行しbタイプすなわち全釉タイプは後出であるとする報告がなされている。ところで割高台白磁小皿は大宰府の編年基準を作成した森田編年では白磁D類の中に入れられ、14世紀後半～15世紀前半の編年感が与えられていた（註19）。この資料は大宰府の推定金光寺跡のSD1429と称される溝から出土したもの（註20）であり、高台部に4脚の割りが入れられたaタイプの資料である（第18図13及び写真48A・B-上段右）。この資料は大宰府歴史資料館で拝見させて頂いた（註21）が、注記には「K-0001 9KKK ED36・S-35B南側ウラゴメ780707」と書



かれていた。法量は口径94mm外底径44mm器高24mmを測る。胎土は黄白色で半磁質であった。釉薬は半透明で細かく貫入が入っており、胴部下半まで施釉されている。一部の釉は流下し割高台畳付付近まで達していた。成形後の削りは左回転ヘラ削りで行われて、挟りこみは浅い。内底面に4個の目跡が確認された。また上記と同種のaタイプの資料で2片が接合した資料があった。それぞれの破片に「9KKK F0-91 R-002」「9KKK FK92 黒灰土」と注記されていた。口径約90~100mm外底径約44mm高さ約22mmの法量になる。胎土は黄白色で半磁質、混入物は見られない。釉薬は半透明で細い貫入が入っており、胴部中位まで施釉されている。内面は全釉で目跡が1個確認される。成形後の削りは左回転ヘラ削りで行われて、1箇所畳付部が残り、挟りこみは浅い(写真48A・B-下段右)。実見の折、さらにこの遺跡からは実はbタイプの全釉タイプの割高台白磁小皿も出土していることを知った。資料は小片ではあったが、注記には「9KKK FL67 S-Z5 灰砂 780609 R-002」と記されていた。口径約90~100mm高さ約10mmとなる。胎土は黄白色で、上記2例よりも白味がある。釉薬は半透明で貫入が少し入り、高台部まですべて施釉され、内面は降灰などの付着物で汚れている。目跡は残存部の範囲では確認できなかった。窯詰めした時、重ねた最上部に置かれた小皿なのかも知れない。挟りは前記2点と同じく浅めである(写真48A・Bの左下)。報告書に掲載されていなかった後者2点の出土地点を筆者には俄かには知り難い。ただ報告された冒頭資料の出土したSD1429の溝の廃棄年代が問題となるのであるが、15世紀後半に下げるような要素はなさそうである。ただ逆に14世紀後半にまで上げてしまっても良いのかといった点でも大変疑問である。15世紀前半~中葉頃と見ておくべきと考える。恐らく日本での割高台白磁小皿出現の早い段階の遺跡であることは確かな様で、こうした古い段階からa b両タイプが併存していたことになりそうである。同じく報告者が15世紀前半の遺跡としている福井県興行寺遺跡の割高台白磁小皿でも両タイプ混在しているらしい(第18図14~26)(註22)。また15世紀前半代の資料とされる首里城京の内SK01からは5点の割高台白磁小皿が出土している。ここではすべてaタイプであった(第18図1~5)(註23)。

こうした割高台白磁小皿の年代が15世紀前半代とする説に対して、水澤幸一氏は青森県十三湊遺跡の火事場整理遺構(1432年)以前の遺構からは割高台白磁小皿が出土しないことを一つの根拠とされ、1432年以前にはそれらの陶磁器は搬入されていないのではないかとされた。同時に名蔵シタダル海底遺跡でも多く出土している雷文帯青磁碗も十三湊遺跡の火事場整理遺構(1432年)以前の遺構からは明確な出土事例を確認できないと述べられている。ちなみに亀井明德氏はかつて雷文帯蓮弁文碗の年代を14世紀中葉から15世紀前半を中心とし、一部後半まで及んでいるとした論文を書かれている(註24)。水澤氏は十三湊遺跡の発掘成果を踏まえた上でさらに首里城京の内SK01出土資料を天順3年(1459)の倉庫消失に伴う遺物群とされ、また福井県興行寺遺跡資料を15世紀第3四半期に下る火災痕跡(炭化物層)出土資料であるとの見解を示されている(註25)。筆者もこちらの説により近い見方をしている。

さらに割高台白磁小皿の年代を示す遺跡として高知県喜川郡の芳原城跡出土の事例が上げられる。ここでは6点の割高台白磁小皿が明應2年(1493)の墨書のある護符と同一層から出土している(第18図6~12)(註26)。この資料では4点がaタイプで2点は不明であった。このように見てくると白磁小皿の盛行時期は、15世紀第3~第4四半期に位置づけられそうである。ただ後述する四都窯址の製品群を見た時、15世紀前半代には割高台、挟り高台の技法が始まっていた可能性は強いと考えるようになった。当初はaタイプが主流であったが、15世紀後半代に次第に簡略化したbタイプが普及し、さらに15世紀末近くに及ぶとbタイプが主流になって行くという大まかなプロセスが辿れるようである。このように見ると大宰府の推定金光寺跡の

SD1429の出土例、首里城京の内SK01の出土例、福井県興行寺遺跡の出土例などが日本での早い出土例で15世紀第2四半期に遡り得る資料と考えても整合性がとれてくる。従って、現状では割高台白磁小皿の年代は15世紀第2～第4四半期の間に生産・消費されたものと推定しておく。そうした期間の中でも名蔵シタダル海底遺跡採集の割高台白磁小皿は15世紀第3～第4四半期の限られた時期に大量に一括運搬され、沈没した船の積荷であったと言える。次に割高台白磁小皿を生産した福建省邵武市の四都窯址について述べておく。

## 8. 福建省邵武市四都窯址について—割高台白磁小皿の生産窯址— (註27)

### (1) はじめに

沖縄県石垣市の名蔵湾の一角にある名蔵シタダル海底遺跡はおよそ半世紀ほど前に今回の共同研究者でもある地元在住の大濱永亘氏により発見された遺跡である。名蔵湾の通称名蔵シタダルと称される海岸からは、大量の中国明代の青磁、白磁そして若干の青花、鉄釉陶器などが打ち上げられてくるのである。およそ3千数百個体の陶磁器が確認されている。私達は採集される陶磁器の内容分析から、それらは前述してきた様に15世紀第3～第4四半期にかけての一括遺物であり、明代の沈没船からの陶磁器である可能性が極めて高いものと考えている。そのうちの白磁の中で、割高台白磁小皿は357個体以上大量に採集され、この遺跡での特徴的な陶磁器となっている。この割高台白磁小皿は「挟り高台白磁小皿」とか「桜高台白磁小皿」等とも報告されているもので、沖縄は与那国島から始まり、日本全国北海道までの15世紀代を中心とする中世遺跡から数多く出土している資料である。こうした日本列島の遺跡の中でも名蔵シタダル海底遺跡からの採集量は群を抜いて多く、その貿易ルートや生産地が注目されるわけである。そうしたことから、名蔵シタダル海底遺跡採集陶磁器の報告書作成の調査の一環として割高台白磁小皿の生産地と目された福建省邵武市四都窯址のフィールド調査をすることとした。そうした調査成果をここにまとめておく。

### (2) 福建省邵武市四都窯址についての文献

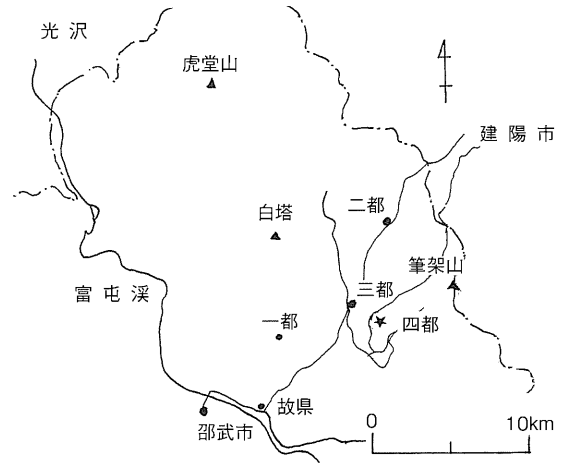
福建省邵武市の四都窯址で挟り高台すなわち割高台の白磁小皿類が発見されたことを日本に最初に報じたのは田中克子氏の論文であろう(註28)。同氏はこれらを邵武市博物館で見つけ出している。また邵武市四都窯址についての報告は、傳宋良・王上の二人により紹介されている(註29)。その報告では青雲窯址すなわち四都窯址群は四都村内の3地区に確認され、後門山窯址・巴掌山窯址・拳頭山窯址と区別されて呼称されている。さらに1986～1987年頃の村民からの聞き書きとして当地の窯は「百座窯」と称されていたとのことで、青雲山麓に130基余りの窯があり、規模雄大であったとの記載もされている。

筆者は清光緒26年(1900年)刊本の『福建省邵武府志』(註30)を調べ、その「卷之十 物産」の中に「白磁器 邵武四都青雲、泰甯安仁保滌口窯、泰甯蘭溪鄉蘭窯より出ず。ただ泰甯はやや佳なるのみ」といった記事を見出した。さらに上海図書館で民國26年(1937年)本の『民國重修邵武縣志』の「卷十一 物産」中に「白磁器四都青雲窯より出ず」という記載を見出した。要するに福建省邵武府では1900年頃にも3箇所まで白磁が特産品として生産されており、その後まもなくの1937年頃には四都村のみが白磁を特産品として生産し続けていたことを示している内容と理解出来る記事である。

### (3) 福建省邵武市四都窯址について

四都窯址には2度調査に訪れた。最初は2007年12月で2度目は2008年4月であった。福建省の省都福州に流れる閩江を遡り、さらにその支流富屯溪を遡ること北西およそ300Kmに邵武市があり、この街の郊外に

四都村はある。四都村の位置は挿図7に示した様に地図上の直線距離では、邵武市東北10数kmの位置にある。邵武市からだと市内を流れる富屯溪にかかる東関大橋を渡り、邵武故県の料金所を過ぎてから三都村方面に向かう。三都村内の三都小学校を通過後右折して、15分程度で四都村窯上の集落に着く。道はやや複雑な田舎道であるが、車で道さえ間違わなければ市内からは小一時間で到達可能である。この集落の後方が一つの大きな窯址群であり、地元では「窯上」と称している。さらに村の前面1km程先の竹林となっている丘陵地帯がさらに規模雄大な「窯下」と称されている窯址群である（巻頭カラー12B）。窯の形態は立地からすれば、龍窯形式の窯構造と想定されるが、その規模や時代による窯構造変化などの詳細な点は将来の発掘調査成果を待ちたい。窯址群のある両ブロックともに村人の許可を必要とする畑地内であったり、さらに案内を必要とするブッシュ内であったり、竹林内であったりする。こうした窯址群から古くは宋代の白磁に始まり、近くは中華民国期と思われる洋食器類が出土してくる。時代によって、窯址はグループをなしているような地点もあるが、「窯上」の物原では上記時代の遺物が混在したような状況を呈している。割高台白磁小皿は、明代の白磁碗皿類の集中する物原から、他のいろいろな器種にまじって採集される。私は当初、割高台白磁小皿は大量に集中生産され、この製品のみ集中して発見されるのではないかと期待を持っていたが、今回訪れた窯址ではそのような状況にはなかった。近くに私がイメージするような窯址ブロックがある可能性は大いにある。しかしここでも確かに割高台白磁小皿は焼成されており、高台部無釉タイプ（筆者はこれをaタイプと呼称する。後述bタイプよりも採集量が多い）と、高台部まで全面施釉したタイプ（筆者はこちらをbタイプと呼称する。採集量は少ない）の両方が採集される。次にこれら割高台白磁小皿とともにこの窯址から発見された代表的陶磁器について紹介する。



挿図7 中国福建省邵武市四都窯址所在地

(4) 邵武市四都窯址の製品

宋代の白磁製品として覆焼技法（いわゆる「伏せ焼き技法」）により焼成された薄造りで口禿口縁の碗や皿が発見され、覆焼用の窯道具であるリング状支圈具も見られた。覆焼技法については、筆者の「定窯の覆焼技法につて」を参照願いたい（註31）。おそらく13世紀から14世紀前半頃の製品と推定する。このあたりが四都窯の生産開始時期になりそうである。

#### (4) 邵武市四都窯址の製品

宋代の白磁製品として覆焼技法（いわゆる「伏せ焼き技法」）により焼成された薄造りで口禿口縁の碗や皿が発見され、覆焼用の窯道具であるリング状支圈具も見られた。覆焼技法については、筆者の「定窯の覆焼技法につて」を参照願いたい（註31）。おそらく13世紀から14世紀前半頃の製品と推定する。このあたりが四都窯の生産開始時期になりそうである。

第20図に示した実測図は明代の白磁・鉄釉と清朝期の青花である。第20図の5（巻頭カラー13A・B-3）と7（巻頭カラー14A・B-2）の碗は、見込み部が重ね焼用に蛇の目釉剥ぎに造られている。高台部は輪高台である。第20図1（巻頭カラー13A・B-5）は4脚の割高台で全面施釉タイプすなわちbタイプの割高台白磁小皿である。挟りが深く、挟りの方向も底部中心部から丸カンナ状の工具で一気に四等分割している。内面は降灰ではっきりしないが1個の目跡は確認出来る。胎土・釉薬分析のサンプルとした（サンプル5）。第20図2（巻頭カラー13A・B-1）は4脚の割高台で胴際以下より底部まで無釉のaタイプ割高台白磁小皿である。外面には重ね焼した時に溶着した他の小皿破片が付着しており、内面には重ね焼の剥離跡がある。胎土・釉薬分析のサンプルとした。（サンプル6）第20図3（巻頭カラー13A・B-2）は碗形状であり、高台は5脚の割高台となっている。aタイプ割高台白磁である。内面には4個の目跡が残る。第20

図4（巻頭カラー13A・B-4）も小碗形状で、高台は4脚の割高台でaタイプ割高台白磁である。内面には4個の目跡が残る。第20図3や4の白磁小碗からは、高台部にわずかな抉りを入れて重ね焼き時の接着面を小さくして、溶着防止を図った工夫が看取される。第20図の5や7は内面を蛇の目釉剥ぎし、製品を重ねる技法のさらに簡略化した方法として割高台という技法が開発されたことを物語っている。おそらく高台を割る、抉りを入れるという発想の起点を示す製品に違いなからう。

第20図6（巻頭カラー14A・B-1）は四都窯址群で比較的多く見られる高脚杯である。第20図8（巻頭カラー14A・B-3）の青花鉢は清朝期のものであるが、製作技法が窺える資料で、底板を置き、その際から磁土紐を巻き上げ轆轤挽きしていることが分かる。当地の宋代～明代の白磁碗皿類に共通した伝統的技法を踏襲していることが分かる。前述した名蔵シタダル海底遺跡採集の青磁碗・皿類もこの手法で製作されている。挿図3に成形工程模式図を示した。恐らくこの技法はかなり長い期間また広い中国各地の窯業地で行われていた可能性がある。今後の追求課題といたく、あえてそうした意味をも込めて提示した。第20図9（巻頭カラー14A・B-4）は鉄釉碗で明代の白磁碗類と一緒にの地点に見られた資料である。

四都窯址の製品については以上に止めるが、この窯址の規模は大きく年代幅もきわめて長い。物原に散らばる製品は白磁を中心とし、時々鉄釉が見られ地域によっては青花も見られる。ただし青磁は未発見である。器種も豊富であり、四都窯址を性格に理解するには、正式の発掘調査が必要かと思われる。明代に日本に輸出された貿易陶磁器の一つの重要な産地として、今後も注目してゆく必要がある。

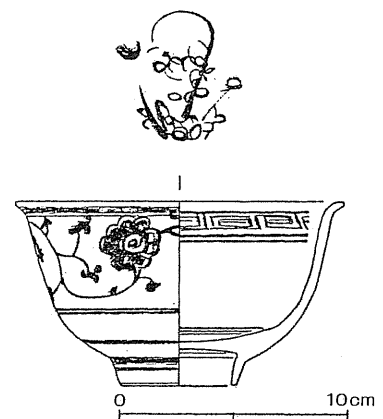
前述したように、この窯址で採集した2点の割高台白磁小皿と名蔵シタダル海底遺跡採集の2点の割高台白磁小皿の胎土・釉薬分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。それらとともに名蔵シタダル海底遺跡採集の「顧氏」銘青磁2点も分析した。その結果報告を後段に掲載してあり、大変有意義な内容ともなっている。是非参照していただきたい。

## 9. その他の名蔵シタダル海底遺跡採集明代陶磁器の類似出土例について

名蔵シタダル海底遺跡からの出土量はそれ程多くはなさそうだが、特徴ある文様の一つとして「梵字」文の印刻された青磁碗・皿がある。この梵字文青磁を出土した遺跡を第10表の文献番号48～67に示した。遺跡数としては20遺跡で20点の青磁碗・皿である。このうちの代表的のものの実測図を第17図1～6に示した。日本全国の報告書から割高台白磁小皿、「顧氏」銘青磁を探索している際に、目に付いた例を抽出しておいたものである。それ故時代的なまとまりもあるようで15世紀後半代の遺跡からの出土例が多いようである。器種としては碗が19点となり、1点の皿は第17図3の滋賀県坂本遺跡の例（註32）で稜花小皿となるタイプである。名蔵シタダル海底遺跡の第8図9の例に類似するものかと思う。

同じく青花の梅枝文と捻り菊文も目に付いた事例を抽出しておいた。主力に探索していたのではないので遺漏も多いが、参考として第12表に掲げた。

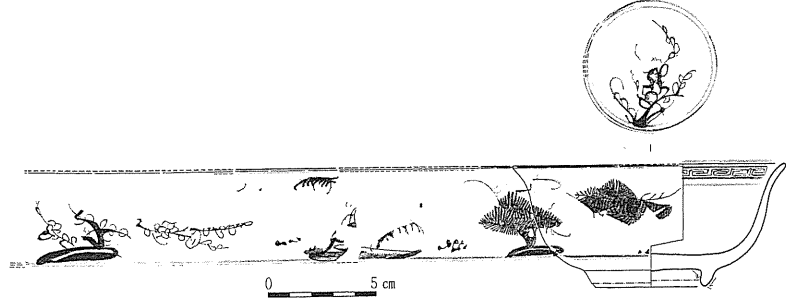
また梅枝文の場合も捻り菊文の場合も文様細部の点では、必ずしも名蔵シタダル海底遺跡の事例と同一と



挿図8 首里城京の内跡SK01出土青花碗

はならず、文様様式に先後関係がありそうなものも含まれている。ただこれらの文様をもつ青花が15世紀代の遺跡からの出土である例が多い点は上記の梵字文青磁の場合と同じである。15世紀中頃～後半に沈んだとされるフィリピン・パンタナン島沈船からの引き揚げ青花碗には写真48C・Dに示したように梅枝文、捻り菊文の両種類がある（註33）。ただ両方とも名蔵シタダル海底遺跡の青花文に比べると丁寧な写実的なタッチで描かれている。

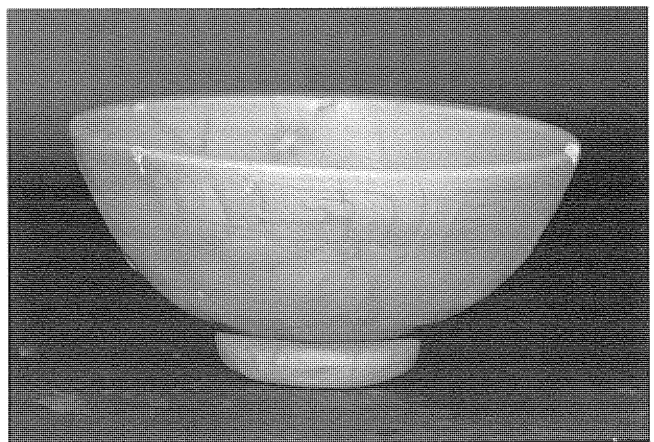
梅枝文青花碗では内底面と外側面にかなり写実的な梅枝文が描かれている。また捻り菊文では内底面の圏線内に素早く13弁の捻り菊文を描いている点は名蔵シタダル海底遺跡のものに似ているが外側面の仙嶽図は写実的で丁寧なタッチであり名蔵シ



挿図9 紀淡海峽出土青花碗

タダル海底遺跡の青花片には見られない。両方とも上手の感があり、文様様式的に見るなら名蔵シタダル海底遺跡の梅枝文碗や捻り菊文碗の先行形態とすべきであろう。こちらの年代が15世紀中頃～後半というのであれば、名蔵シタダル海底遺跡の青花はそれ以降の15世紀後半～末すなわち15世紀第3～第4四半期に位置づけられよう。また首里城京の内SK01出土品中にも内底面に梅枝文を描いた例が何点か見られるが、いずれもやや丁寧なタッチで描かれている（註34）。特に名蔵シタダル海底遺跡の青花碗の形状に似た口縁が外反し、高台部が強く内傾するタイプの碗で梅枝文を描いた例（註35）でも写実性を残した筆法である（挿図8）。この遺構は前述したように報告では15世紀前半代が想定されているが、割高台白磁小皿の検討から15世紀中葉以降とする年代が指摘され、天順3年（1459）の火災に伴う遺物群であるとも指摘されている（註36）。筆者もその意見である。名蔵シタダル海底遺跡の青花の一群はいずれにしてもこの例よりも後出である。

青花梅枝文で文様タッチがより類似したものとしては写真47Eに示した和歌山県友ヶ島沖（別の報告では紀淡海峽と書かれているが、遺跡は同一と思われる）採集の青花がある（註37）。内底面の2重圏線内に手馴れた筆遣いで梅枝文を簡略化して描き、左横に月を置く。同一青花碗と思われる実測図が上田秀夫氏により報告（註38）されており、それを見ると内面の口縁下の文様帯は雷文で、外面には花唐草文が描かれている。器形は口縁外反し、高台幅は細くて強く内傾しており、名蔵シタダル海底遺跡の青花碗に類似する形状である（挿図9）。この青花は第17図7～11に載せた青磁碗皿類と同じ海域から採集されているもののようにだが、当初報告された西山要氏は、青磁器類はイカ場から染付、絵付皿など幾分新しいと思われるものがハゼ場から採集されると報告している（註39）。筆者は全点を実見していないので何ともいえないが、この青花等は青磁と共伴していても良いと考えている（註40）。友ヶ島沖採集の第17図7の青磁碗は外面にヘラ彫り線刻蓮弁文が施されている名蔵シタダル海底遺跡のものと同種である（註41）。第17図10は内底面に花文の印が押されていて、これも名蔵シタダル海底遺跡に多々見られ

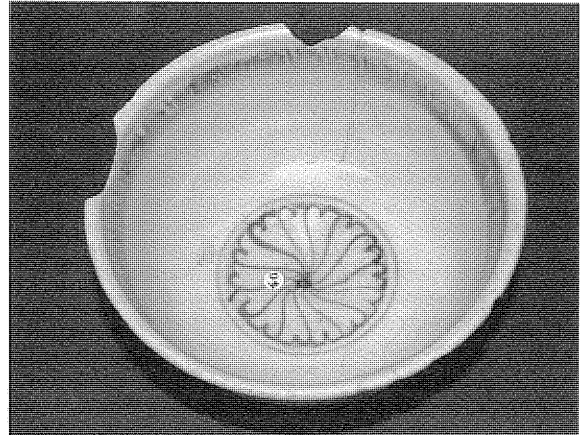


挿図10 野底崎遺跡古墓出土青磁碗

るものである。第17図9も山梨県東八代郡一宮町新巻本村出土例の細線刻蓮弁文（写真47A・B）（註42）のように簡略化されておらず、線刻幅は多少異なるが、名蔵シタダル海底遺跡の例に近く、江蘇省淮安県明代王鎮夫婦合葬墓出土の線刻蓮弁文碗により近い（写真47C）。この墓主である王鎮の埋葬年代は墓誌から1496年であることが判明している（註43）。第17図10の青磁碗と11の青磁小皿の内底面の印文は第5図9に示した名蔵シタダル海底遺跡の「金玉満堂」の印文の構成に似ている。



挿図11 野底崎遺跡古墓出土青花碗1



挿図12 野底崎遺跡古墓出土青花碗2

特に11の青磁稜花小皿はヘラ彫り文様や形態は名蔵シタダル海底遺跡の第8図7・8と近似する。さらに第17図8の青磁雷文碗は崩れた雷文帯の筆法、その下のヘラ彫り蓮弁文そして碗の形態などすべての点で名蔵シタダル海底遺跡の第7図1・2などの例と近似する。まさに紀淡海峡採集の一群の明代陶磁器は名蔵シタダル海底遺跡の年代、産地に近い製品群だと言える。

こうした例は石垣島内の遺跡からも確認されている。野底崎遺跡で発掘された第1号方形石組墓からは、墓室内から青磁雷文碗（挿図10）と青花捻り菊文碗（挿図11～13）がほぼ完器の状態と一緒に発見されている。この青花碗の内底面には円圏内に14弁の捻り菊文が描かれ、口縁内側には雷文帯が描かれている。外側面には抽象的な花文状の文様がにじんだ調子のコバルト顔料で壁面一杯に描かれている。名蔵シタダル海底遺跡第11図10の青花口縁片の図柄、筆遣い、コバルトの発色などが酷似している。器形も口縁が大きく外反し、高台も強く内傾しているという特色が共通する。ほぼ同一産地の同時代の青花碗と見て差し支えない。墓の周辺からも青磁雷文碗の口縁片と青磁線刻蓮弁文碗の口縁片が発見され、中には内底面に「寿字」文の印刻された青磁碗も見られた。ここでも青磁細線刻蓮弁文タイプは皆無である。野底崎遺跡の青磁雷文帯碗と青花捻り菊文碗は同一時期の遺物であることを示す好例となっている。この遺跡に関するより詳細な内容は後段の大濱永寛氏の論文を参照されたい。



挿図13 野底崎遺跡古墓出土青花碗3

## 10. 小 結

本書は沖縄県石垣島名蔵シタダル海底遺跡から大濱永寛氏が過去半世紀以上に亘って収集した中国明代陶

磁器の整理、研究報告書である。収集品から3,461点を抽出し分類、集計、考察、写真、実測図などを順次行いまとめたものである。その結果、青磁は2,845個体をカウントし、そのうち碗が2,675個体であった。他の器種として鉢類、皿類、瓶類、小香炉等が見られた。青磁では「顧氏」銘青磁に注目して資料の集成と「顧氏」の由来でもある龍泉窯の陶磁製造業者であった顧仕成の文献収集に意を払った。大瀆資料分の名蔵シタダル海底遺跡からでも「顧氏」銘青磁は12個体の青磁碗・鉢を確認した。日本での出土例を集成して46冊の報告書から54点の報告内容を第11表に掲載した。それらとの比較を出来るように第13～16図に代表例を掲載した。また顧仕成の記述がある原典である『龍泉縣志』の順治12年（1655）刊本、乾隆27年（1762）刊本、光緒4年（1878）刊本などを調べ、関連部分のすべてを抜粋し大意を示した。こうしたことと併せて龍泉青磁研究の大先達である陳万里先生、小山富士夫先生の成果を活用させて頂き、「顧氏」銘青磁がおおよそ3期に大別されることを示した。すなわち顧仕成存命中からその直後と目される15世紀第2～第3四半期の作品、ここにはトルコのトプカプ・サライ美術館収集品や最近発掘されている龍泉大窯楓洞岩窯址出土例などが相当することを指摘した。また15世紀第3～第4四半期の製品として名蔵シタダル海底遺跡の12点を始め日本で出土する「顧氏」銘青磁のかなりのものがそれに相当すること。『龍泉縣志』に記載された成化（1465－1487）・弘治（1488－1505）以後の製品の質は粗く色も悪く、とても鑑賞には堪えられないとされた青磁に相当することも指摘した。さらにそれよりも下った15世紀第4四半期以降すなわち弘治（1488－1505）～嘉靖4年（1525）頃の製品として山梨県東八代郡一宮町新巻本村タイプの「顧氏」銘青磁碗を想定し「顧氏」銘青磁の最後の製品になるものと指摘した。

白磁は440個体をカウントし、そのうち437個体が小皿であった。さらに白磁小皿のうち高台部を抉り4箇所ないし5箇所の脚のみを残した割高台白磁小皿が357個体あり、小皿の81.7%を占めていた。割高台白磁小皿で胴部下半以下底部にかけて無釉のaタイプとしたものが6.9%で、底部畳付まで施釉したbタイプとしたものが93.1%であり、bタイプが圧倒的に多いカウント数となっているのが特色でもある。本書では割高台白磁小皿を焼成していた中国福建省邵武市四都窯址の現地調査の報告をも併せて行い、割高台白磁小皿の形成過程をも追及した。窯詰めの際、窯内空間を有効に利用して生産効率を上げるために行う重ね焼きの技法の発展した一つの技法であることが看取出来た。宋・元以来行われていた「目」積みによる重ね焼きから内面を蛇ノ目釉剥ぎにして無釉帯を造って重ねる方法そして内底面に釉を掛けずに無釉として重ねる方法といった過程から発展的に生まれてくることが分かった。開始時期の割り（抉り）は浅く、「目」積みの簡略形でもあった。それが名蔵シタダル海底遺跡のbタイプに見られるように高台も造ったかどうか分からないような粗雑な造りになり、底部を大きく抉って4脚とした量産化形状で、施釉もどぶ漬けのままで一切調整を行わないといった具合の量産化のみの形態に辿り着いている。割高台白磁小皿の日本での出土例を集成して311冊の報告書から696点の報告内容を第11表に掲載した。名蔵シタダル海底遺跡の割高台白磁小皿の量の多さ一つからして、日本の中世遺跡特に15世紀の中で持つ意味がいかに大きく、特異であるのかがこの表からも分かる。また遥か中国福建省の山奥邵武市四都地域で生産された恐らくは最も低廉な陶磁器であった割高台白磁小皿が海路沖縄に搬送され、南は与那国島、西は波照間島、そして石垣島・宮古島から沖縄本島にかけてほとんどの島嶼群で消費されていた。さらに日本列島の隅々北は北海道まで運ばれ消費されていたこと分かる表でもあり、それぞれの地域の15世紀の歴史が詰まった列島地図にもなる。

名蔵シタダル海底遺跡採集の青花は少量で底部・胴部・口縁部のすべての破片を集計しても69片であった。その器種は碗・皿類であり、内底面の青花文様では捻り菊文・梅枝文・寿字梅枝文の3種が主要な図柄とな

る。第12表にこれら文様をもつた青花の出土例を簡単にまとめた。そうした出土例及び石垣島野底崎遺跡古墓出土の例などとの比較検討から名蔵シタダル海底遺跡の青花は15世紀後半～末すなわち15世紀第3～第4四半期に位置づけられ、上記青磁や白磁と共伴する遺物であると考えた。産地については俄かに断定し難く、景德鎮は当然ながら、景德鎮の周辺から福建省内の窯址にも注意を払って今後探求してゆきたいと思う。

鉄釉は、沖縄県ではかつては「南蛮」と総称されていた一群の壺・甕類である。無釉焼締めではなく施釉されているのが特色である。中身の運搬容器と考えられ、県内の遺跡ではそれらが転用されて使用されている。名蔵シタダル海底遺跡の鉄釉も沖縄県の遺跡では通有のタイプかと思われ、肥厚口縁タイプの甕を主とし、次にラッパ状に口縁が開くタイプで、時としてタイ産と言われる壺もある。また頸部が直行し口縁が玉縁状になるものも若干採集されている。

以上の考察から名蔵シタダル海底遺跡の陶磁器類は明代である15世紀第3～第4四半期の一括遺物であり、その数量などから見ても沈没船である可能性が極めて高いことが分かった。積載された青磁は浙江省龍泉窯の製品でおそらく慶元県竹口地域を中心とする窯付近のものとして推定される。また白磁は福建省邵武市四都付近の製品と考えて間違いない。これらの陶磁器は中国国内運搬され、福建省の海岸福州、定海地域で集積混載されて出航したものとする。当然私貿易船であり、積載された陶磁器類も高級品はほとんどなく、「顧氏」銘青磁は上等の部類に入る。割高台白磁小皿や「顧氏」銘青磁の日本全国の出土表からも見えてくるように名蔵シタダル海底遺跡採集の陶磁器と同種の製品の出土例は極めて多く、特に沖縄県では先島諸島の隅々の遺跡から沖縄本島まで15世紀代の遺跡からの出土が際立っている。この間の日本列島の歴史上での動きはどのように展開していたのかに少し触れて小結を終わりたい。

15世紀末の石垣島の歴史ではよく登場するオヤケ・アカハチが注目される。宮古島の仲曾根豊見親が首里王府の尚真王の軍とともにアカハチ率いる八重山を討伐に出向いた、俗に言うオヤケ・アカハチの乱（1500年）である。本書の共同研究者である大瀨永巨氏がすでにオヤケ・アカハチの乱については詳細な資料収集と研究発表をされている（註44）。ここでは筆者の考えを簡単に述べておく。この頃の首里王府や宮古島からのこうした支配関係の強化と地域の一元化を目指す政治的動きの背景には中国福建地域からの私貿易船の掌握と取引を管理下に置くといった経済的な目的が検討追及されるべきと考える。大瀨氏の説にはそうした視点が含まれているが、通説本には全くそうした点に触れられていない（註45）。首里王府すなわち琉球国は朝貢貿易という正規の形での商業取引であったが、後々貿易国家と称された由縁のように儲けは莫大であったに違いない。したがって沖縄諸島の村々にとって増大する福建からの私貿易船との直接取引による利潤はきわめて大きかったはずで、福建に近い先島諸島の方に当然地理的メリットがあつた訳でもある。ただそうした前提には福建商人や船員たちが求める物品で宮古島や沖縄本島にある特産品と同等のものが先島諸島にもあること一筆者は土夏布などの織物を想定しているが—また私貿易船を将来しようとする組織、社会が先島諸島内に等質的に形成されていたということがなければならぬ。ちなみに台湾には福建商人や船頭が求める物品が少なく、私貿易船を将来しようとする組織もまだ形成されていなかったから、15世紀の陶磁器を出土する遺跡がほとんど見当たらないのであろう。発掘された村落跡の構造や墓のつくり、そして島民たち自身が使用した豊富な明代陶磁器等から見て、すでに石垣島・西表島など先島諸島では十分そうした社会となっていたと言える。オヤケ・アカハチはそうした私貿易での石垣島でのリーダー的存在でもあったに違いない。オヤケ・アカハチの居城したとされる国史跡フルスト原遺跡（挿図14）は、発掘調査では堅固な石塁群と古墓群が見つかるが、その遺跡の本来の性格が城的遺構なのか村落なのか墓なのかと実態



はまだ解明されていない（註46）。しかし遺跡からは広い海が臨め、眼下には筆者も大学院生の頃発掘調査と整理に携ったカンドウ原遺跡という中世から近世にかけての集落も存在した（註47）。さらにその先には古くは「フナツク（船着）」と呼称された海岸で青磁や鉄釉陶器が採集され、後に薩摩の船も行き来したという大浜村の入り江がある。筆者は総合的に判断してフルスト原遺跡の本来の機能は中国からの私貿易船を意識して15世紀後半代に造られた見張り台・連絡所・狼煙台・居住地などを兼ねた複合遺跡だったと考える。



挿図14 空から見たフルスト原遺跡

オヤケ・アカハチの乱（1500年）に至る前に先島諸島には福建からの私貿易船が大量の陶磁器を積載して多数来航しており、そのうちの一艘が不幸なことに名蔵湾のシタダル沖で沈没したものと推定する。名蔵シタダル海底遺跡の船が沈んだ時期の日本は応仁の乱（1467-1478）前後であり、第11表の割高台白磁小皿の全国の出土状況がその間の事情を物語っている。すなわち沖縄を経由して運ばれた陶磁器は鹿児島、博多へと回漕され、そこから博多商人を介在して日本海航路で一乗谷朝倉氏遺跡のある北陸や東北、北海道まで転売されたと思われる。また一方、応仁の乱以前では琉球船や博多の船が瀬戸内を通過して畿内方面、特に堺を目指して航行した。あるいは船首として堺商人が博多に出向いていた場合もあったであろう。しかし応仁の乱が始まると状況は変わる。割高台白磁小皿の瀬戸内地域からの出土が少なく、逆に太平洋側の高知県南国市田村遺跡や明應2年（1493）の墨書のある護符を同一層で伴出している高知県喜川郡芳原城跡等では集中した出土量が目立っている。それは応仁の乱により瀬戸内の海上交通に支障が出て、堺へ往来する船の航路は太平洋側にとらざるを得なくなった原因によるものと推定する。名蔵シタダル海底遺跡の青磁と類似したセットの青磁類が採集されている友ヶ島沖（紀淡海峡）もこの航路沿にあり、早くに西山要氏により堺商船が琉球から九州南部、土佐沖を通るいわゆる南海路を経て紀伊水道に入り、紀淡海峡通過中に難破・沈没したものと推定されていた（註48）。文献研究では戦前から小葉田淳氏が堺商人の琉球貿易についての研究（註49）をまとめられ、さらに安里延氏が琉球と堺の通交についてより闡明にされた研究（註50）を発表されている。その書の中でも応仁の乱により瀬戸内が戦場と化し琉球船の船舶来航の廃絶により、堺商人が直接琉球へ渡航に乗り出した内容が詳述されている。考古学では森村健一氏が堺の貿易陶磁から各時代の貿易システムをまとめられ、この15世紀後半～16世紀前半の貿易港と主なルートについて言及されたことがあった（註51）。そこでは福州・寧波→琉球（中核地）→坊津→土佐→堺のルートが掲げられていた。これらの内容と上記割高台白磁小皿の出土状況とを比較するとその間の歴史状況が色濃く反映している分布状況になっていると言える。全国の分布状況をより細かく検討してゆけば、それぞれの地域史が見えてくるであろうし、日本列島の15世紀第3～第4四半期の連動した歴史もまた鮮明になってゆくものと考えられる。

名蔵シタダル海底遺跡採集の明代陶磁器を研究した結果として上記のような歴史的背景をも知ることが出来た。さらに本書をベースとして、いろいろな活用の仕方でも別の歴史も解明出来るものと期待して擱筆させて頂く。

（2008.10.5.稿了）

## 第2章 註

1. 沖縄県立博物館所蔵の名蔵シタダル海底遺跡採集品と思われる青磁香炉はこの小香炉とは異なり、口径14.5cmの盤形をしたタイプである。『日本出土の中国陶磁』1978 東京国立博物館編 NO.296参照
2. 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館論文集4』1978 九州歴史資料館
3. 吉良文男氏からお借りしたメナム・ノイ (Mae Nam Noi) 窯の発掘調査報告書 (タイ語) や『Underwater Archaeology in Thailand II Ceramics from The Gulf Thailand』(1990 Samaphan Published Co.Ltd.) などの書籍に掲載されたメナム・ノイ (Mae Nam Noi) 窯産とされる鉄釉の壺・甕類の中には名蔵シタダル海底遺跡採集のラッパ状口縁の鉄釉壺に似たものもある。すなわち黒味がかかった鉄釉がかかり、時にかせて一部剥落した壺の例が似ており、また口縁がラッパ状に開くものなどに似た雰囲気を感じる。しかし胎土や成形技法などをも含めて、両者を詳細に比較検討しないと確信を持った結論は出せず、将来の検討課題として残しておきたい。一方名蔵シタダル海底遺跡採集の頸部が短く、分厚く口縁を肥厚させた壺の例は上記書籍中のメナム・ノイ (Mae Nam Noi) 窯産品には見当たらなかったことも付加しておきたい。
4. 写真の提供は静嘉堂美術館学芸員長谷川祥子氏のご厚意によるもので、また掲載許可にもご尽力頂いた。大変感謝申し上げる次第である。
5. 『沖縄・石垣島仲筋貝塚発掘調査報告』1981 大瀨永亘・谷川章雄・関口広次・他
6. 『陳万里陶瓷器考古文集』1990 紫禁城出版社・両木出版社 香港・台湾台北 に転載されている。また他に陳万里『瓷器與浙江』1975 神州図書公司 香港 及び陳万里『中國青瓷史略』1971 中華書局 香港がある。
7. 小山富士夫『支那青磁史稿』1943 文中堂 東京
8. この資料も長谷川祥子氏のご厚意でコピーを頂戴した。『やきもの趣味』1935 学藝書院 東京 (雑誌)
9. 註6.
10. 順治12年刊本『龍泉縣志』は中国科学院図書館編『稀見中國地方志彙刊』第19冊 1992 中国書店 北京 所収の史料を見た。原史料は日本の旧内閣文庫蔵本で現在国立公文書館蔵となっている。乾隆27年刊本『龍泉縣志』は上海図書館蔵本の請求番号360358-62 (全5冊)、同じく請求番号413465~68 (全4冊) 等の史料を見た。光緒4年刊本『龍泉縣志』は『中國方志叢書 華中地方 第217号 浙江省龍泉縣志』成文出版社 台湾 所収を見た。また『光緒處州府志』は光緒3年刊本『中國方志叢書 華中地方 第193号 浙江省處州府志 (二)』成文出版社 台湾 及び『中國地方志集成 浙江府縣志輯63』江蘇古籍出版社・上海書店・巴蜀書社所収等を見た。
11. 『中國文物報』2007.2.23.「遺産周刊」第213期掲載 参照
12. 本報告書脱稿後の2008年12月13～14日に愛知県陶磁資料館で開催された「シンポジウム海のシルクロードとアジア—沈没船と陶磁器—」の研究発表中、浙江省文物考古研究所の潘岳明氏が「龍泉窯大窯楓洞岩窯の発掘」と題しての発表があった。発表成果内容はほぼ新聞記事と同内容の報告であったが、顧仕成に関する内容として「顧仕成の娘が当時の県令の息子に嫁いだとの記事があり、顧氏がかなりの家柄であることを示している」との言及もされた。発表後、この文献の典拠を直接潘岳明氏にお尋ねしたところ、『康熙刊本龍泉縣志』中にあるとの回答を得た。筆者はこの文献は未読で、稀少本であるとのこ

とも伺った。記して感謝申し上げる次第である。

13. 葉英瑛・華雨衣編著『発見 大明処州竜泉官窯』2005 西泠印社出版社 杭州
14. ①監修長谷部楽爾『トプカプ宮殿の中国陶磁 II 青磁・清』1986 講談社 東京 及び②『CHINESE CERAMICS IN THE TOPKAPI SARAY MUSEUM ISTANBUL A COMPLETE CATALOGUE I YUAN AND MING DYNASTY CELADON WARES』1986 LONDON 前者は後者の縮小した日本語版であり、後者が原本である。写真は同一のものようである。
15. 上記①ではNO.183、②ではNO.418でトプカプ・サライ美術館の収蔵番号TKS15 / 115とされる青磁である。掲載写真は刻印された漢字から見ると天地逆向きとなっている。
16. この報告書を印刷所に入稿後の2008年12月29日にフォロー調査で浙江省慶元県竹口鎮の竹口（後窯）窯址と新窯窯址を訪れた。竹口窯址の物原では、名蔵シタダル海底遺跡で採集されるヘラ彫り雷文帯青磁碗と酷似した青磁片や稜花青磁小皿そして山梨県新巻本村出土の細線刻蓮弁文タイプの青磁碗がかなりの数量確認出来た。（挿図6）また、新窯窯址の物原でも細線刻蓮弁文タイプの青磁碗が確認出来た。名蔵シタダル海底遺跡の青磁のみならず、日本出土の15～16世紀の明代青磁の主要生産地の一つが竹口地域にあるとの確信を得た。竹口窯址・新窯窯址については、別途報告する。
17. 同種の歴史故事碗（人形手）青磁は湖北省京山県梭羅河の陳恩礼夫婦墓（明 弘治15年 1502年）からも出土していることが、朱伯謙主編『龍泉窯青瓷』1998 台湾に掲載されている。これも傍証資料となろう。
18. 『江戸城外堀跡四谷御門外橋詰・御堀端通・町屋跡』1996 帝都高速度交通営団・他
19. 森田勉「15～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』NO.2 1982日本貿易陶磁研究会
20. 『大宰府史跡昭和53年度発掘調査概報』1979九州歴史資料館
21. 資料の実見に当たっては九州歴史資料館学芸第二課課長馬田弘毅氏、同主任技師大庭孝夫氏、太宰府市教育委員会中島恒次郎氏等のお力添えを得た。記して感謝申し上げる次第である。
22. 富山正明「福井県興行寺遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』NO.13 1993 日本貿易陶磁研究会
23. 『首里城跡一京の内発掘調査報告書（I）—』1998 沖縄県教育委員会
24. 亀井明德「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』1980 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会
25. 水澤幸一「15世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相」『貿易陶磁研究』NO.24 2004 日本貿易陶磁研究会
26. 『芳原城跡発掘調査報告書』1984 高知県教育委員会
27. この項については『陶説』第668号 2008.11月号 日本陶磁協会に発表したものを一部改変した。
28. 田中克子「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁」『博多研究会誌』第10号 2002 博多研究会
29. 傅宋良・王上「邵武四都青雲窯址調査簡報」（『福建文博』1988 福建省博物館）
30. 『福建省邵武府志』『中国方志叢書』第73号 成文出版社 台湾
31. 関口広次「定窯の覆焼技法につて」『貿易陶磁研究』NO.14 1994 日本貿易陶磁研究会
32. 吉水眞彦「大津市坂本遺跡出土の貿易陶磁」『貿易陶磁研究』NO.26 2006 日本貿易陶磁研究会
33. 森村健一「フィリピン・パンダナン島沈没船引き揚げ陶磁器」『貿易陶磁研究』NO.16 1996 日本貿易陶磁研究会所載
34. 註23

35. 註23の第59図26
36. 註25
37. 『日本出土の中国陶磁』1978 東京国立博物館編所載
38. 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』NO.2 1982日本貿易陶磁研究会
39. 西山要「紀淡海峽海底採集の中国陶磁」『古代研究』5 1975
40. 『明代前半期陶磁器の研究—首里城京の内SK01出土品—』2002 専修大学アジア考古学研究報告書1の中で遠藤啓介氏は友ヶ島沖の遺物を一括遺物とする説を否定する見解を示されている。また山梨県東八代郡一宮町新巻本村出土の青花にも一括遺物とせず、年代幅があるとしている。筆者の見解とは異なる。
41. 第17図7～11の和歌山県紀淡海峽出土品は註38より転載。
42. 『日本出土の中国陶磁』1978 東京国立博物館編所載
43. 江蘇省淮安県博物館「淮安県明代王鎮夫婦合葬墓清理簡報」『文物』1987-3
44. 大瀨永亘『オヤケアカハチ・ホンカワラケの乱と山陽姓一門の人々』2006 先島文化研究所（自費出版）
45. 与並岳生『新琉球王統史6 宮古・八重山／尚清王・尚元王・尚永王』2006 新星出版
46. 『フルスト原遺跡』1977 沖縄県石垣市教育委員会
47. 『八重山石垣島 カンドウ原遺跡発掘調査報告』1977 沖縄県石垣市教育委員会
48. 註39
49. 小葉田淳『中世南島通交貿易史の研究』1939 日本評論社
50. 安里延『沖縄海洋発展史—日本南方発展史序説—』1941（1967再版）琉球文教図書
51. 森村健一「堺の貿易陶磁」『日本考古学協会1998年度沖縄大会資料集』1998 日本考古学協会1998年度沖縄大会実行委員会

## 第2章 表・挿図目録

### 表

- 第1表 名蔵シタダル海底遺跡採集陶磁器一覧表
- 第2表 名蔵シタダル海底遺跡採集青磁口縁分類
- 第3表 名蔵シタダル海底遺跡採集鉄釉口縁分類
- 第4表 名蔵シタダル海底遺跡採集白磁片（個体数カウント外）
- 第5表 八重山博物館収蔵の名蔵シタダル海底遺跡採集陶磁器一覧表
- 第6表 青磁考察表
- 第7表 白磁考察表
- 第8表 青花考察表
- 第9表 鉄釉考察表

### 挿図

1. 名蔵シタダル海底遺跡 名蔵湾より遠景
2. 名蔵シタダル海底遺跡
3. 青磁碗成形工程模式図

4. 龍泉大窯楓洞岩窯址出土「顧氏」銘青磁盤 『中國文物報』2007.2.23.「遺産周刊」第213期より。
5. トルコ・トプカプ宮殿所蔵青磁皿「顧氏?」銘 監修長谷部楽爾『トプカプ宮殿の中国陶磁 II 青磁・清』1986 講談社 東京 より。TOPKAPI SARAY MUSEUM収蔵番号TKS15/158
6. 中国浙江省慶元県竹口鎮後窯窯址の製品
7. 中国福建省邵武市四都窯址所在地
8. 『首里城跡—京の内発掘調査報告書 (I)—』1998 沖縄県教育委員会 第59図26より。
9. 和歌山県紀淡海峡出土 上田秀夫「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』NO. 2 1982 日本貿易陶磁研究会
10. 野底崎遺跡古墓出土青磁碗
- 11.~13. 野底崎遺跡古墓出土青花碗
14. 空から見たフルスト原遺跡

第1表 名蔵シタダル海底遺跡採集陶磁器一覧表  
(底部集計)

釉 別	器 形	部 位	形 状 ・ 特 色	細 分	総 計
I. 青磁 2845 (個体数)	碗	底部	(1) 無文		1,685
			(2) 見込無釉もしくは蛇の目		61
			(3) 花文印		401
			(4) 「顧氏」銘印		12
			(5) その他・不明	「金玉満堂」・梵字文・双魚文・鹿文等も含む。	516
	大皿	底部	φ 125~180mm		11
	中皿	底部	φ 70~125mm		50
	小皿・鉢	底部	φ 50~70mm		82
	大鉢	底部	φ 135mm~		3
大碗	底部	φ 65~90mm		18	
小碗	底部			1	
小香炉	底部			5	
II. 白磁 440 (個体数)	碗・小碗	底部	輪高台		3
	小皿	底部	割高台	高台4分割 (232)・高台5分割 (19)・不明 (106)	357
			輪高台	内面無釉 (50)・内面蛇の目 (4)・内面施釉 (2)・不明 (22)	78
	菊花小皿	底部	輪高台		2
III. 青花 59 (破片数)	碗	底部	φ 55~60mm	捻り菊文 (16片)・梅枝文 (16)	32
	小碗	底部	φ 40~45mm	「寿」字状梅枝文 (14片)・梅枝文 (1片)	15
	小皿	底部	φ 47~55mm	捻り菊文 (4片)・他 (1片)	5
小中皿	底部	φ 70mm~	花文 (3片)・碁ヶ底花文 (1片)	4	
大皿	底部	φ 110mm~	羯磨文 (1片)	3	
IV. 鉄釉 117 (破片数)	壺・甕類	底部			117
総数量					3,461

備 考

- 1 青磁は底部が1/2以上残存したものをカウント (計数) した。それを個体数推定時一個体とみなした。したがって、個体実数はこれより多い。
- 2 青磁の器形 (器種) には、この他に袋物口縁 (2片) が確認されている。
- 3 白磁皿は底部約1/3以上残存したものをカウント (計数) し、それを個体推定時一個体とみなした。
- 4 白磁小皿としたものは「皿形」であり、碗・杯形になるものは無い。また胴部を面取りしたのも未検出である。
- 5 白磁の器形 (器種) には、この他に口禿口縁皿 (1片) が確認されている。
- 6 この「鉄釉」は「南蛮」と称するものと同類である。
- 7 南蛮は底部から胴部への立ち上がり部が残っているものをすべてカウント (計数) した。個体数ではない。
- 8 青花の底部については、大きさにかかわらず、すべての破片をカウント (計数) した。
- 9 青花片は、この他に口縁・胴部で10片採集されている。

第2表 名蔵シタダル海底遺跡採集青磁口縁分類（口縁付近残存部 30mm以上をカウント）

1	口縁特色	数量	細分	
				数量
	無文外反	82	稜花大中皿	56
			稜花大鉢	1
			稜花小皿	21
			円形大鉢	2
			円形碗鉢	2
2	無文直立	29	稜花	0
			円形碗	29
3	1~3条圏線	27		
4	崩れた雷文帯	7		
5	やや退化した線刻蓮弁文	3		
総計		148		

備考

- 1 口縁部の残存率が低く、元々表採数量も少ない。海中でローリングされ、破碎されてしまっているためであろう。
- 2 底部まで残存しているものは、この表に含まれていない。

第3表 名蔵シタダル海底遺跡採集鉄釉口縁分類

	形状	数量
1	肥厚口縁	66
2	ラップ状口縁	3
3	玉縁口縁	2
4	他（播鉢）	1
	計	72

備考

- 1 破片数をカウント
- 2 この「鉄釉」は「南蛮」と称するものと同類である。

第4表 名蔵シタダル海底遺跡採集白磁片（個体数カウント外）

	器形	数量	備考
1	割高台白磁小皿（底部）	88	
2	輪高台白磁小皿（底部）	16	
3	不明（底部）	10	
4	近世碗底部（沖縄産）	1	
5	口縁	19	皿片
総数		134	

備考

- 1 不明片も口縁片も小皿以外の器形なし。すべて割高台白磁小皿か輪高台白磁小皿となるもの。

第5表 八重山博物館収蔵の名蔵シタダル海底遺跡採集陶磁器一覧表

釉別	器形	小計	計	形状・特色
I. 青磁	碗・鉢	112		うち「顧氏」銘青磁碗1点
	大皿・中皿・小皿	14		
	口縁・胴部	38		
			164	
II. 白磁	割高台白磁小皿	25		うち bタイプ割高台（10）、他は不明
	輪高台白磁小皿	3		
			28	
III. 鉄釉（南蛮）	壺・甕類 口縁	8		肥厚口縁（7）・玉縁口縁（1）
	壺・甕類 底部・胴部	7		
			15	
IV. 染付（青花）		1	1	
V. 近代瓦等			若干	
総数量			208	

備考

- 1 2008. 8. 10. に筆者と大瀨永亘氏・大瀨永寛氏の3名で石垣市立八重山博物館学芸員下地傑氏のご好意で管見させて頂いた時の集計数量である。
- 2 収蔵品はジョージ・H・カー氏寄贈品ほか個人の寄贈品からの資料である。
- 3 八重山博物館収蔵品には、大瀨永亘氏採集の名蔵シタダル海底遺跡の陶磁器類に含まれないような新資料は見当たらなかった。

第6表 青磁考察表

NO	注記NO	種類	写真番号	図版番号	器形	部位	重量(g)	口径(mm)	高台外径(mm)	内底径(mm)	高さ(mm)	胎土
1	98	青磁	1A.B-1	2-1	大皿	底部～口縁	1068	320	160	143	54	灰白色 磁質
2	85	青磁	巻頭カラー 2A.B-2	2-2	大皿	底部	320		125	105		灰白色 半磁質
3	86	青磁	巻頭カラー 2A.B-3	2-3	大皿	底部	162		約125			灰褐色 半磁質
4	95	青磁	巻頭カラー 2A.B-1	2-5	大皿	底部～口縁	768	350	180	160	53	灰色 磁質
5	153	青磁	3A.B-1		大皿	口縁	52	約320				灰白色 磁質
6	263	青磁	3A.B-10		大皿	口縁	40					灰色 磁質
7	112	青磁	3A.B-2		大皿	口縁	68	約340				灰褐色 半磁質
8	137	青磁	3A.B-3		大皿	口縁	118	約300				割口褐色
9	126	青磁	3A.B-4		大皿	口縁	45	約300				灰白色 磁質
10	254	青磁	3A.B-5		大皿?	口縁	92	約320				灰白色 磁質
11	252	青磁	3A.B-6		大皿?	口縁	64					灰色 半磁質
12	259	青磁	3A.B-7		大皿?	口縁	50					灰白色 半磁質
13	266	青磁	3A.B-8		大皿	口縁	61	約350				灰白色 磁質
14	244	青磁	3A.B-9		大皿	口縁	54					割口褐色
15	89	青磁	2A.B-4	2-4	中皿	底部	304		84	68		灰白色 半磁質
16	97	青磁	巻頭カラー 3A.B-1	3-1	中皿	底部～口縁	564	280	127	108	48	灰白色 磁質
17	96	青磁	巻頭カラー 3A.B-2	3-2	中皿	底部～口縁	595	280	150	130	51	灰白色 磁質
18	84	青磁	2A.B-1	4-1	中皿	底部～口縁	558	200	89	70	36	灰色 半磁質
19	87	青磁	2A.B-2		中皿	底部	182		約89	64		灰褐色 半磁質
20	92	青磁	2A.B-3		中皿	底部	150		78	61		灰色 半磁質
21	155	青磁	4A.B-1		中皿	口縁	81	約260				割口褐色
22	118	青磁	4A.B-2		中皿	口縁	71	約260				灰褐色 半磁質
23	146	青磁	4A.B-3		中皿	口縁	74	約240				灰白色 磁質
24	163	青磁	4A.B-4		中皿	口縁	38	約180				灰白色 半磁質
25	114	青磁	4A.B-5		中皿	口縁	41					割口褐色
26	150	青磁	4A.B-6		中皿	口縁	37	約240				灰白色 磁質
27	121	青磁	4A.B-7		中皿	口縁	47					灰白色 半磁質
28	115	青磁	4A.B-8		中皿	口縁	63	約260				灰褐色 磁質
29	123	青磁	4A.B-9		中皿	口縁	23	約280				灰白色 磁質
30	164	青磁	5A.B-1		中皿	口縁	78	約280				白色 磁質
31	141	青磁	5A.B-2		中皿	口縁	58	約220				灰褐色 半磁質
32	154	青磁	5A.B-3		中皿	口縁	62					灰色 磁質
33	161	青磁	5A.B-4		中皿	口縁	52	約240				灰褐色 半磁質
34	241	青磁	5A.B-5		中皿	口縁	49	約250				灰白色 磁質
35	208	青磁	5A.B-6		中皿?	口縁	69	約220				灰色 磁質
36	133	青磁	5A.B-7		中皿	口縁	27	約200				割口灰褐色
37	162	青磁	5A.B-8		中皿	口縁	24					灰白色 半磁質
38	143	青磁	5A.B-9		中皿	口縁	40	約180				灰白色 半磁質
39	144	青磁	6A.B-1		中皿	口縁	61	約260				割口褐色
40	139	青磁	6A.B-2		中皿	口縁	42	約260				灰褐色 半磁質
41	130	青磁	6A.B-3		中皿	口縁	58	約250				割口褐色
42	156	青磁	6A.B-4		中皿	口縁	62	約250				灰色
43	117	青磁	6A.B-5		中皿	口縁	32					灰白色 半磁質
44	157	青磁	6A.B-6		中皿	口縁	40	約280				灰色 半磁質
45	148	青磁	6A.B-7		中皿	口縁	18	約180				灰白色
46	267	青磁	6A.B-8		中皿	口縁	13	約230				灰白色 磁質
47	124	青磁	6A.B-9		中皿	口縁	29					灰白色 磁質
48	103	青磁	8A.B-2	8-8	小皿	底部～口縁	194	137	64	48	35	灰白色 半磁質
49	90	青磁	8A.B-1	8-7	小皿	底部～口縁	136	117	53	38	30	灰白色 半磁質
50	46	青磁	10A.B-1		小皿	底部	106		55	37		灰褐色 半磁質
51	12	青磁	10A.B-2		小皿	底部	50		45	32		灰褐色 半磁質
52	26	青磁	10A.B-3		小皿?	底部	102		50	40		灰色 半磁質
53	33	青磁	10A.B-4		小皿?	底部	75		55	40		割口褐色 半磁質
54	188	青磁	10A.B-5		小皿	口縁	21	約130				灰白色 半磁質
55	206	青磁	10A.B-6		小皿	口縁	13					灰褐色
56	202	青磁	10A.B-7		小皿	口縁	13	約130				割口褐色
57	207	青磁	10A.B-8		小皿	口縁	9					割口褐色
58	198	青磁	10A.B-9		小皿	口縁	11					割口褐色
59	91	青磁	8A.B-3		小皿	底部～口縁	98	120	62	50	39	灰白色 半磁質
60	94	青磁	8A.B-4		小皿	底部	164		69	54		褐色
61	199	青磁	8A.B-5		小皿	底部～口縁	58	約120	70			割口褐色
62	190	青磁	9A.B-1		小皿	口縁	15					灰色
63	189	青磁	9A.B-10		小皿	口縁	21					割口褐色
64	203	青磁	9A.B-11		小皿	口縁	17					割口褐色
65	201	青磁	9A.B-12		小皿	口縁	17	約100				割口褐色
66	196	青磁	9A.B-2		小皿	口縁	19	約140				割口褐色



	釉色	施釉	外面文様	内面文様	轆轤 回転方向	削り 回転方向	特記事項
	灰青色 半透明 貫入	底部蛇ノ目釉剥ぎ	ヘラ彫り蓮弁文	ヘラ彫り蓮弁文			口縁稜花
	灰緑色 半透明 貫入	底部蛇ノ目釉剥ぎ	浮刻蓮弁文	見込み印花草花文 ヘラ彫り稜花文			
	剥落		浮刻蓮弁文	見込み印花輪違文			底部底板造り
	青緑色 半透明 貫入	底部蛇ノ目釉剥ぎ	ヘラ彫り蓮弁文	見込み印花草花文 ヘラ彫り蓮弁文			
	剥落		浮刻蓮弁文				口縁稜花 型打
	青緑色 半透明			ヘラ彫り文			
	剥落		浮刻蓮弁文				口縁稜花
	剥落		浮刻蓮弁文				型打
	剥落		浮刻蓮弁文				口縁稜花 型打
	青緑色 半透明		ヘラ彫り文	ヘラ彫り草花文			
	剥落			ヘラ彫り文			
	青緑色 貫入						
	青緑色 半透明						
	剥落			ヘラ彫り文			
	青緑色 半透明 貫入	底部蛇ノ目釉剥ぎ		見込み印花花文 ヘラ彫り蓮弁文		左	
	青緑色 半透明 貫入	底部蛇ノ目釉剥ぎ		見込み印花輪違文			底部底板造り
	青緑色 半透明 貫入	底部蛇ノ目釉剥ぎ		見込み印花輪違文 ヘラ彫り唐草文			
	灰緑色 半透明 貫入	底部蛇ノ目釉剥ぎ		ヘラ彫り唐草文		左	口縁稜花
	剥落	底部蛇ノ目釉剥ぎ		見込み印花草花文			
	剥落	底部蛇ノ目釉剥ぎ		印花文		左	
	剥落		浮刻蓮弁文				口縁稜花 型打
	灰緑色		浮刻蓮弁文	ヘラ彫り文			口縁稜花 型打
	灰緑色 半透明 貫入		浮刻蓮弁文				口縁稜花 型打
	剥落						口縁稜花
	剥落		浮刻蓮弁文				口縁稜花 型打
	灰緑色		浮刻蓮弁文				口縁稜花 型打
	灰緑色		浮刻蓮弁文				口縁稜花 型打
	灰緑色 半透明 貫入		浮刻蓮弁文				口縁稜花 型打
	青緑色 半透明 貫入		浮刻蓮弁文	ヘラ彫り文			口縁稜花 型打
	灰緑色 半透明		浮刻蓮弁文	ヘラ彫り草花文			口縁稜花 型打
	灰緑色 半透明 貫入		浮刻蓮弁文	ヘラ彫り花文			口縁稜花
	剥落			ヘラ彫り文			
	剥落						口縁稜花
	青緑色			ヘラ彫り文			
	灰緑色						
	剥落			ヘラ彫り文			口縁稜花
	剥落						口縁稜花
	剥落						
	剥落						
	剥落						
	剥落						
	剥落						口縁稜花
	剥落						口縁稜花 型打
	剥落						口縁稜花
	剥落						口縁稜花
	剥落						口縁稜花
	剥落						
	青緑色 半透明 貫入						
	黄褐色 半透明 貫入	底部無釉		見込み印花文 ヘラ彫り唐草文		左	巻き上げ痕
	青緑色 半透明 貫入	底部無釉		見込み印花文 ヘラ彫り文		左	口縁稜花
	灰緑色 貫入	底部無釉		印花草花文			
	灰青色 半透明 貫入	蛇ノ目釉剥ぎ				左	底部底板造り
	剥落	底部無釉					
	剥落	底部無釉		印花文			
	灰青色			ヘラ彫り草花文			口縁稜花
	剥落			ヘラ彫り文			口縁稜花
	剥落			ヘラ彫り草花文			口縁稜花
	剥落			ヘラ彫り文			口縁稜花
	剥落			ヘラ彫り文			口縁稜花
	青緑色 半透明 貫入	底部蛇ノ目釉剥ぎ		見込み印花文 ヘラ彫り文		左	焼台痕
	剥落			ヘラ彫り文			
	灰青色 貫入	底部無釉					口縁稜花 サンゴ付着
	灰青色 貫入						口縁稜花
	剥落			ヘラ彫り文			口縁稜花
	剥落						口縁稜花
	灰青色 半透明 貫入			ヘラ彫り文			口縁稜花
	剥落						口縁稜花

NO	注記NO	種類	写真番号	図版番号	器形	部位	重量(g)	口径(mm)	高台外径(mm)	内底径(mm)	高さ(mm)	胎土
67	191	青磁	9A.B-3		小皿	口縁	20	約110				割口褐色
68	195	青磁	9A.B-4		小皿	口縁	22	約130				割口褐色
69	192	青磁	9A.B-5		小皿	口縁	19					灰白色 半磁質
70	205	青磁	9A.B-6		小皿	口縁	20	約130				割口褐色
71	197	青磁	9A.B-7		小皿	口縁	11					割口褐色
72	204	青磁	9A.B-8		小皿	口縁	14					割口褐色
73	187	青磁	9A.B-9		小皿	口縁	14					灰色 半磁質
74	93	青磁	11A.B-1	8-9	皿	底部	71		59	45		灰褐色 半磁質
75	152	青磁	11A.B-10		皿	口縁	26					灰白色
76	132	青磁	11A.B-11		皿	口縁	29					割口褐色
77	145	青磁	11A.B-12		皿	口縁	30					灰褐色
78	127	青磁	11A.B-13		皿	口縁	33					割口褐色
79	5	青磁	11A.B-2		皿	底部	86					灰色 磁質
80	125	青磁	11A.B-3		皿	口縁	40					灰色 半磁質
81	147	青磁	11A.B-4		皿	口縁	37					灰色 磁質
82	159	青磁	11A.B-5		皿	口縁	36					割口灰褐色
83	151	青磁	11A.B-6		皿	口縁	31					割口褐色
84	131	青磁	11A.B-7		皿	口縁	30					割口褐色
85	142	青磁	11A.B-8		皿	口縁	32					灰褐色
86	165	青磁	11A.B-9		皿	口縁	28					灰褐色 半磁質
87	128	青磁	12A.B-1		皿	口縁	24					灰色
88	110	青磁	12A.B-10		皿	口縁	22					灰褐色
89	158	青磁	12A.B-11		皿	口縁	22					灰色
90	119	青磁	12A.B-12		皿	口縁	20					灰白色 半磁質
91	149	青磁	12A.B-2		皿	口縁	35					割口褐色
92	160	青磁	12A.B-3		皿	口縁	32					灰色
93	134	青磁	12A.B-4		皿	口縁	24					割口灰褐色
94	138	青磁	12A.B-5		皿	口縁	40					灰色 半磁質
95	194	青磁	12A.B-6		皿	口縁	22	約180				灰褐色 半磁質
96	135	青磁	12A.B-7		皿	口縁	19					灰褐色 半磁質
97	116	青磁	12A.B-8		皿	口縁	26					灰色 半磁質
98	109	青磁	12A.B-9		皿	口縁	27					灰褐色 半磁質
99	49	青磁	13A.B-1		皿?	底部	110		60	49		灰褐色 半磁質
100	50	青磁	13A.B-2		皿?	底部	82		54	38		灰褐色 半磁質
101	111	青磁	13A.B-3		皿	口縁	19					灰色
102	113	青磁	13A.B-4		皿	口縁	25					灰色
103	140	青磁	13A.B-5		皿	口縁	23					灰褐色 半磁質
104	129	青磁	13A.B-6		皿	口縁	25					灰褐色
105	120	青磁	13A.B-7		皿	口縁	16					割口褐色
106	136	青磁	13A.B-8		皿	口縁	14					割口灰褐色
107	106	青磁	14A.B-1	4-2	大鉢	底部	1584		140	116		灰白色 磁質
108	108	青磁	16A.B-1	4-3	大鉢	底部	1670		144	122		灰色 磁質
109	107	青磁	15A.B-1	4-4	大鉢	底部	1154		135	110		灰白色 磁質
110	102	青磁	巻頭カラー 5A.B-1	4-5	大碗	底部～胴部	866		90	70		灰白色 磁質
111	100	青磁	巻頭カラー 4A.B-1	5-1	大碗	底部～口縁	522	170	70	52	95	灰白色 磁質
112	104	青磁	17A.B-1		大碗	底部	446		約90	68		灰色 磁質
113	101	青磁	17A.B-2		大碗	底部	286		91	72		灰白色 磁質
114	209	青磁	17A.B-3		大碗	口縁	106	約220				灰白色 磁質
115	242	青磁	17A.B-4		大碗?	口縁	95					割口褐色
116	200	青磁	18A.B-1		大碗?	口縁	18	約200				割口褐色
117	232	青磁	18A.B-10		大碗?	口縁	13	約200				割口褐色
118	227	青磁	18A.B-11		大碗?	口縁	19	約200				灰色 磁質
119	193	青磁	18A.B-2		大碗?	口縁	20	約200				灰色 半磁質
120	186	青磁	18A.B-3		大碗?	口縁	41					灰白色 磁質
121	246	青磁	18A.B-4		大碗	口縁	55	約240				割口褐色
122	260	青磁	18A.B-5		大碗?	口縁	55	約220				割口褐色
123	215	青磁	18A.B-6		大碗	口縁	33	200				灰白色 半磁質
124	229	青磁	18A.B-7		大碗?	口縁	47					割口褐色
125	245	青磁	18A.B-8		大碗	口縁	53	約210				灰白色 半磁質
126	231	青磁	18A.B-9		大碗?	口縁	10	約200				割口褐色
127	99	青磁	巻頭カラー 4A.B-2		大碗	底部	242		67	52		灰白色 磁質
128	105	青磁	巻頭カラー 5A.B-2		大碗	底部	190		約90	約67		灰色 磁質
129	78	青磁	19A.B-2	5-2	碗	底部	148		約65	47		灰白色 半磁質
130	74	青磁	19A.B-5	5-3	碗	底部	138		約65	47		割口褐色 半磁質
131	69	青磁	20A.B-2	5-4	碗	底部	138		約68	52		底板褐色 胴部灰褐色 半磁質
132	64	青磁	20A.B-6	5-5	碗	底部	120		約62	48		灰褐色 半磁質

	釉色	施釉	外面文様	内面文様	轆轤 回転方向	削り 回転方向	特記事項
	剥落						口縁稜花
	剥落						口縁稜花
	剥落			ヘラ彫り文			口縁稜花
	剥落			ヘラ彫り文			口縁稜花
	剥落						口縁稜花
	剥落						口縁稜花
	灰青色 半透明 貫入						
	灰青色 半透明 貫入			印花梵字文		左	
	剥落		浮刻蓮弁文				口縁稜花 型打
	剥落		浮刻蓮弁文				口縁稜花 型打
	剥落		浮刻蓮弁文				口縁稜花 型打
	剥落		浮刻蓮弁文				口縁稜花 型打
	剥落		線刻文	印花文			底部底板造り
	灰青色		浮刻蓮弁文				口縁稜花 型打
	灰青色		浮刻蓮弁文	ヘラ彫り文			口縁稜花 型打
	灰緑色 半透明		浮刻蓮弁文				口縁稜花
	剥落		浮刻蓮弁文				口縁稜花 型打
	剥落		浮刻蓮弁文				口縁稜花
	剥落		浮刻蓮弁文	ヘラ彫り文			口縁稜花
	灰緑色		浮刻蓮弁文				口縁稜花 型打
	青色 半透明 貫入			ヘラ彫り文			口縁稜花
	剥落			ヘラ彫り文			口縁稜花
	剥落						口縁稜花 型打
	青色						口縁稜花
	剥落						口縁稜花
	灰緑色 半透明			ヘラ彫り文			口縁稜花 型打
	剥落			ヘラ彫り文			口縁稜花
	剥落						口縁稜花
	青緑色 半透明 貫入			ヘラ彫り文			口縁稜花?
	灰青色			ヘラ彫り文			口縁稜花
	灰緑色			ヘラ彫り文			口縁稜花
	剥落			ヘラ彫り文			口縁稜花
	青緑色 半透明 貫入	底部無釉 見込無釉				左	
	剥落						
	剥落						口縁稜花
	剥落						口縁稜花
	剥落						口縁稜花
	剥落						口縁稜花
	剥落						口縁稜花
	剥落						口縁稜花
	灰緑色 半透明 貫入	底部蛇ノ目釉剥ぎ	ヘラ彫り文	見込み印花文 ヘラ彫り文			底部底板造り 焼台痕
	灰緑色 半透明 貫入	底部蛇ノ目釉剥ぎ	ヘラ彫り文				焼台痕
	灰緑色 半透明 貫入	底部蛇ノ目釉剥ぎ	ヘラ彫り文				焼台痕
	灰緑色 半透明	底部蛇ノ目釉剥ぎ		印花「顧氏」銘			底部底板造り・胎土、 釉薬分析サンプル1
	灰緑色 半透明	底部蛇ノ目釉剥ぎ		印花「顧氏」銘		左	
	灰緑色 光沢	底部無釉	ヘラ彫り文	ヘラ彫り文			
	灰緑色 半透明	底部蛇ノ目釉剥ぎ	ヘラ彫り唐草文	見込み印花輪違文			
	青緑色			ヘラ彫り文			
	灰緑色			ヘラ彫り文雷文			
	灰緑色						口縁稜花?
	剥落						
	剥落						
	青緑色		ヘラ彫り文				口縁稜花
	灰緑色						口縁稜花?
	剥落		ヘラ彫り文				
	剥落						サンゴ付着
	青色 半透明 貫入						
	灰青色			ヘラ彫り草花文			サンゴ付着
	灰青色 半透明						
	青色 半透明 貫入						サンゴ付着
	灰緑色 半透明	底部蛇ノ目釉剥ぎ		印花「顧氏」銘?			
	灰緑色 半透明			印花文			
	灰緑色	底部蛇ノ目釉剥ぎ		印花「顧氏」銘			胎土、釉薬分析サンプ ル2
	剥落	底部蛇ノ目釉剥ぎ		印花「顧氏」銘			底部に焼台痕
	灰緑色 貫入	底部蛇ノ目釉剥ぎ		印花「顧氏」銘		左	底部底板造り
	剥落	底部無釉		印花「顧氏」銘			

NO	注記 NO	種類	写真番号	図版 番号	器形	部位	重量 (g)	口径 (mm)	高台外径 (mm)	内底径 (mm)	高さ (mm)	胎土
133	45	青磁	21A.B-1	5-6	碗	底部	158		約62			灰褐色 半磁質
134	24	青磁	21A.B-4	5-7	碗	底部	180		60	45		灰褐色 半磁質
135	53	青磁	21A.B-7	5-8	碗	底部	188		60	45		灰褐色 半磁質
136	28	青磁	21A.B-6	5-9	碗	底部	176		56	44		灰褐色 半磁質
137	34	青磁	22A.B-5	5-10	碗	底部	115		約52	約35		灰褐色 半磁質
138	44	青磁	22A.B-1	5-11	碗	底部	162		約66	49		灰色 半磁質
139	88	青磁	22A.B-6	6-1	碗	底部	78		49	34		灰白色 半磁質
140	29	青磁	23A.B-3	6-2	碗	底部	110		52	40		灰褐色 半磁質
141	36	青磁	23A.B-5	6-3	碗	底部	152		約59	45		灰褐色 半磁質
142	75	青磁	23A.B-1	6-4	碗	底部	296		59	41		灰色 半磁質
143	71	青磁	23A.B-6	6-5	碗	底部	234		60	42		灰色 半磁質
144	72	青磁	23A.B-2	6-6	碗	底部	222		59	41		灰色 半磁質
145	42	青磁	24A.B-3	6-7	碗	底部	150		57	40		灰褐色 半磁質
146	73	青磁	25A.B-1	6-8	碗	底部～口縁	248	150	56	40	68	灰色 半磁質
147	83	青磁	25A.B-2	6-9	碗	底部～口縁	230	150	60	44	74	灰色 半磁質
148	57	青磁	26A.B-1	6-10	碗	底部～口縁	224	約150	60	43	74	灰褐色 半磁質
149	40	青磁	27A.B-1	7-1	碗	底部～口縁	282	155	56	37	77	灰褐色 半磁質
150	41	青磁	26A.B-2	7-2	碗	底部～胴部	308		61	44		灰褐色 半磁質
151	82	青磁	27A.B-3	7-3	碗	底部	272		57	39		灰白色 半磁質
152	48	青磁	28A.B-5	7-4	碗	底部	250		55	42		灰色 半磁質
153	77	青磁	28A.B-4	7-5	碗	底部	284		60	42		灰色 半磁質
154	81	青磁	28A.B-2	7-6	碗	底部	324		60	44		灰色 半磁質
155	13	青磁	30A.B-4	7-7	碗	底部	66		約60	40		底板褐色 胴部褐色 半磁質
156	21	青磁	30A.B-5	7-8	碗	底部	178		約60	45		灰褐色 半磁質
157	18	青磁	30A.B-2	7-9	碗	底部	150		57	44		灰褐色 半磁質
158	175	青磁	31A.B-11	7-10	碗	口縁	12					割口褐色
159	176	青磁	31A.B-12	7-11	碗	口縁	14	約140				割口褐色
160	177	青磁	31A.B-10	7-12	碗	口縁	42	約150				割口褐色
161	168	青磁	31A.B-3	7-13	碗	口縁	39	約160				灰色 磁質
162	169	青磁	31A.B-1	7-14	碗	口縁	53	150				割口褐色
163	170	青磁	31A.B-2	8-1	碗	口縁	24	約160				灰白色 半磁質
164	174	青磁	31A.B-4	8-2	碗	口縁	14					灰色 半磁質
165	211	青磁	32A.B-4	8-3	碗	口縁	63	150				割口褐色
166	262	青磁	34A.B-14	8-4	碗?	口縁	14	約160				割口褐色
167	228	青磁	33A.B-6	8-5	碗	口縁	62	約150				灰色 半磁質
168	240	青磁	34A.B-2	8-6	碗	口縁～胴部	110	約160				割口褐色
169	25	青磁	19A.B-1		碗	底部	146		60	44		灰褐色 半磁質
170	66	青磁	19A.B-3		碗	底部	152		約66	49		灰色 半磁質
171	80	青磁	19A.B-4		碗	底部	194		約74	50		灰白色 半磁質
172	70	青磁	19A.B-6		碗	底部	188		約63	47		灰褐色 半磁質
173	67	青磁	20A.B-1		碗	底部	174		約74	55		灰白色 半磁質
174	79	青磁	20A.B-3		碗	底部	126		約70	51		割口赤褐色 半磁質
175	62	青磁	20A.B-4		碗	底部	69		約51	35		灰褐色 半磁質
176	65	青磁	20A.B-5		碗	底部	120		約66	48		灰白色 半磁質
177	63	青磁	20A.B-7		碗	底部	118		約65	49		灰色 半磁質
178	61	青磁	20A.B-8		碗	底部	85		約55	40		灰色 半磁質
179	68	青磁	20A.B-9		碗	底部	74		約60	40		底板褐色 胴部灰褐色 半磁質
180	10	青磁	21A.B-2		碗	底部	136		56	40		割口褐色 半磁質
181	39	青磁	21A.B-3		碗	底部	117		約57	39		灰色 半磁質
182	1	青磁	21A.B-5		碗	底部	166		61	45		灰褐色 半磁質
183	38	青磁	22A.B-2		碗	底部	188		約60	44		灰褐色 半磁質
184	60	青磁	22A.B-3		碗	底部	117		47	32		灰色 半磁質
185	30	青磁	22A.B-4		碗	底部	101		50	36		灰褐色 半磁質
186	47	青磁	23A.B-4		碗	底部	134		56	38		灰色 半磁質
187	31	青磁	24A.B-1		碗	底部	90		約62	45		灰色 半磁質
188	37	青磁	24A.B-2		碗	底部	140		約53	43		灰褐色 半磁質
189	9	青磁	24A.B-4		碗	底部	74		約60	45		褐色 半磁質
190	58	青磁	24A.B-5		碗	底部	122		約55			灰褐色 半磁質
191	35	青磁	24A.B-6		碗	底部	180		60	41		灰褐色 半磁質
192	56	青磁	24A.B-7		碗	底部	196		約65	50		灰褐色 半磁質
193	55	青磁	24A.B-8		碗	底部	112		55	40		褐色
194	52	青磁	24A.B-9		碗	底部	138		62			灰褐色 半磁質
195	23	青磁	25A.B-3		碗	底部	158		59	40		底板褐色 胴部灰色 半磁質
196	14	青磁	25A.B-4		碗	底部	146		50	39		灰褐色 半磁質
197	20	青磁	25A.B-5		碗	底部	168		53	39		灰褐色 半磁質
198	54	青磁	25A.B-6		碗	底部	138		62	43		褐色
199	22	青磁	26A.B-3		碗	底部	140		約60	45		割口褐色 半磁質

	釉色	施釉	外面文様	内面文様	轆轤 回転方向	削り 回転方向	特記事項
	剥落			印花双鱼文			
	灰青色 半透明 貫入	底部無釉	ヘラ彫り蓮弁文	印花双鱼文			底部底板造り
	灰緑色 半透明 貫入			印花「天」字文		左	
	剥落	底部無釉		「金玉□□」印花	左	左	
	灰緑色 半透明 貫入			印花福鹿文			
	青緑色 半透明 貫入	底部無釉	線刻蓮弁文	捺り菊文			底部底板造り
	青緑色 半透明	底部蛇ノ目釉剥ぎ		印花輪違文			
	灰緑色 半透明 貫入	底部無釉		印花草花文			
	剥落			印花草花文			底部底板造り
	灰緑色 半透明 貫入	底部無釉		印花草花文		左	
	黄褐色 半透明 貫入	底部無釉	ヘラ彫り蓮弁文	印花草花文		左	
	剥落	底部無釉	線刻蓮弁文	印花草花文		左	
	青色 半透明 貫入	底部無釉		印花文		左	底部底板造り
	青色 半透明 貫入	底部無釉		印花文		左	
	剥落	底部無釉		印花文		左	
	灰緑色 半透明 貫入	底部無釉		印花文		左	
	灰緑色 貫入	底部無釉	ヘラ彫り雷文・蓮弁文	印花文		左	
	青緑色 半透明 貫入	底部無釉	ヘラ彫り雷文・蓮弁文	印花文		左	
	灰青色 半透明 貫入	底部無釉		印花文		左	
	青色 貫入	底部無釉	線刻蓮弁文	印花文		左	
	灰青色 半透明 貫入	底部無釉	線刻蓮弁文	印花文		左	
	灰緑色 半透明 貫入	底部無釉	ヘラ彫り蓮弁文			左	
	灰青色 半透明 貫入	底部無釉					底部底板造り
	剥落	底部施釉					底部底板造り 底部に 輪状焼台痕
	剥落	底部無釉				左	底部底板造り
	灰青色 半透明 貫入		線刻蓮弁文				
	灰青色 半透明 貫入		線刻蓮弁文				
	灰青色 半透明 貫入		線刻蓮弁文				
	青緑色 半透明 貫入		ヘラ彫り雷文・蓮弁文				サンゴ付着
	青緑色 半透明 貫入		ヘラ彫り雷文・蓮弁文				
	青緑色 半透明 貫入		ヘラ彫り雷文				
	剥落		ヘラ彫り雷文				
	灰青色 半透明 貫入						サンゴ付着
	灰緑色 半透明 貫入						口縁小玉縁状
	灰青色 半透明 貫入						サンゴ付着
	灰緑色						
	灰青色 半透明 貫入	底部蛇ノ目釉剥ぎ	線刻唐草文	印花「顧氏」銘			底部底板造り
	灰青色			印花「顧氏」銘			
	灰青色 半透明 貫入	底部蛇ノ目釉剥ぎ		印花「顧氏」銘			
	灰緑色	底部蛇ノ目釉剥ぎ?		印花「顧氏」銘			
	灰青色	底部蛇ノ目釉剥ぎ?	線刻唐草文	印花「顧氏」銘			底部底板造り
	剥落			印花「顧氏」銘			底部底板造り
	剥落	底部無釉		印花「顧氏」銘			底部底板造り
	灰緑色 半透明 貫入	底部蛇ノ目釉剥ぎ		印花「顧氏」銘			
	灰青色 半透明 貫入	底部無釉		印花「顧氏」銘?			底部底板造り
	灰青色 半透明 貫入	底部無釉		印花「顧氏」銘?			
	青色 半透明 貫入	底部蛇ノ目釉剥ぎ		印花「顧氏」銘?			底部底板造り
	青灰色 半透明 貫入	底部無釉		印花双鱼文		左	
	青色 半透明 貫入	底部無釉		印花双鱼文		左	
	剥落	底部無釉	不明	「金玉□□」印花	左	左	
	青色 半透明 貫入	底部無釉		印花梵字文?			底部底板造り
	剥落			印花梵字文?			
	灰緑色 半透明 貫入	底部無釉		印花福鹿文		左	
	剥落			印花草花文			
	剥落			印花文			底部底板造り
	剥落			印花文			底部底板造り
	剥落			印花草花文			底部底板造り
	剥落			印花文			
	剥落			印花草花文			
	青色 半透明 貫入			印花文			底部底板造り
	剥落			印花草花文			
	剥落			印花草花文			
	青色 半透明 貫入	底部無釉		印花文		左	底部底板造り
	灰青色 半透明 貫入	底部無釉		印花文		左	
	灰青色 半透明 貫入	底部無釉		印花文		左	底部底板造り
	剥落						底部底板造り
	剥落	底部無釉		印花草花文			底部底板造り

NO	注記 NO	種類	写真番号	図版 番号	器形	部位	重量 (g)	口径 (mm)	高台外径 (mm)	内底径 (mm)	高さ (mm)	胎土
200	51	青磁	26A.B-4		碗	底部	110		60	44		灰褐色 半磁質
201	8	青磁	26A.B-5		碗	底部	152		59	45		褐色 半磁質
202	76	青磁	27A.B-2		碗	底部	328		58	37		灰色 半磁質
203	19	青磁	27A.B-4		碗	底部	160		約54	41		割口褐色 芯部灰色 半磁質
204	2	青磁	28A.B-1		碗	底部	172		60	45		灰褐色 半磁質
205	16	青磁	28A.B-3		碗	底部	130		56	44		割口褐色 芯部灰色 半磁質
206	4	青磁	28A.B-6		碗	底部	186		55	40		底板灰褐色 胴部灰色
207	6	青磁	29A.B-1		碗	底部	190		57	45		底板褐色 胴部灰色 半磁質
208	59	青磁	29A.B-2		碗	底部	164		59	42		灰褐色 半磁質
209	32	青磁	29A.B-3		碗	底部	106		約65	50		割口褐色 半磁質
210	11	青磁	29A.B-4		碗	底部	82		約55			割口褐色 半磁質
211	7	青磁	29A.B-5		碗	底部	132		59	42		灰褐色 半磁質
212	210	青磁	29A.B-6		碗	底部	76		41	29		割口褐色
213	15	青磁	30A.B-1		碗	底部	112		56	39		灰褐色 半磁質
214	3	青磁	30A.B-3		碗	底部	193		60	45		割口褐色 半磁質
215	27	不明	30A.B-6		碗	底部	36		約60			灰褐色 陶質
216	172	青磁	31A.B-5		碗	口縁	14	約140				割口褐色
217	173	青磁	31A.B-6		碗	口縁	12					灰白色 半磁質
218	253	青磁	31A.B-7		碗	口縁	14	約150				灰色 半磁質
219	171	青磁	31A.B-8		碗	口縁	11					割口褐色
220	251	青磁	31A.B-9		碗	口縁	19	約150				灰色 半磁質
221	183	青磁	32A.B-1		碗	口縁	16	約150				割口褐色
222	218	青磁	32A.B-10		碗	口縁	22					灰色 半磁質
223	219	青磁	32A.B-11		碗	口縁	21					割口褐色
224	220	青磁	32A.B-12		碗	口縁	24	約160				割口灰褐色
225	221	青磁	32A.B-13		碗	口縁	23	約160				灰褐色 半磁質
226	184	青磁	32A.B-2		碗	口縁	10	約160				灰色 半磁質
227	185	青磁	32A.B-3		碗	口縁	12	約130				割口褐色
228	212	青磁	32A.B-5		碗	口縁	44					割口褐色
229	213	青磁	32A.B-6		碗	口縁	15	約160				割口褐色
230	214	青磁	32A.B-7		碗	口縁	40	約150				灰色 半磁質
231	216	青磁	32A.B-8		碗	口縁	26					約160
232	217	青磁	32A.B-9		碗	口縁	23					灰色
233	222	青磁	33A.B-1		碗	口縁	48	約200				割口褐色
234	235	青磁	33A.B-10		碗	口縁	20	約150				割口褐色
235	236	青磁	33A.B-11		碗	口縁	19	約160				割口褐色
236	237	青磁	33A.B-12		碗	口縁	16	約140				割口褐色
237	238	青磁	33A.B-13		碗	口縁	15	約160				灰色 半磁質
238	223	青磁	33A.B-2		碗	口縁	19					灰色 半磁質
239	224	青磁	33A.B-3		碗	口縁	29	約160				灰色 半磁質
240	225	青磁	33A.B-4		碗	口縁	16	約150				割口褐色
241	226	青磁	33A.B-5		碗	口縁	15	約150				割口褐色
242	230	青磁	33A.B-7		碗	口縁	22					割口褐色
243	233	青磁	33A.B-8		碗	口縁	15	約150				割口褐色
244	234	青磁	33A.B-9		碗	口縁	20	約160				灰白色 磁質
245	239	青磁	34A.B-1		碗	口縁	12	約160				割口褐色
246	258	青磁	34A.B-10		碗	口縁	13	約140				割口褐色
247	261	青磁	34A.B-11		碗	口縁	24					割口褐色
248	264	青磁	34A.B-12		碗	口縁	9					割口褐色
249	265	青磁	34A.B-13		碗	口縁	12	約200				灰白色 半磁質
250	243	青磁	34A.B-3		碗	口縁	14	約180				灰白色 半磁質
251	247	青磁	34A.B-4		碗	口縁	16					灰白色 磁質
252	248	青磁	34A.B-5		碗	口縁	14	約120				割口褐色
253	250	青磁	34A.B-6		碗	口縁	25	約180				割口褐色
254	255	青磁	34A.B-7		碗	口縁	10	約150				割口褐色
255	256	青磁	34A.B-8		碗	口縁	21	約180				割口褐色
256	257	青磁	34A.B-9		碗	口縁	45					割口褐色
257	182	青磁	7A.B-5		小碗?	底部	29		約42	約30		割口褐色
258	178	青磁	7A.B-6		小碗	底部	21		26			割口褐色
259	180	青磁	7A.B-1	8-11	香炉	底部	51		42	29		灰褐色 半磁質
260	249	青磁	7A.B-4	8-13	香炉?	胴部	50					灰色
261	179	青磁	7A.B-2		香炉	底部	34		42	30		割口褐色
262	181	青磁	7A.B-3		香炉	底部	24		34	22		割口褐色
263	167	青磁	7A.B-7	8-10	瓶?	口縁	26	約150				灰色 磁質
264	166	青磁	7A.B-8	8-12	瓶	口縁	16	約42				灰白色 半磁質
265	17	青磁	7A.B-9		盤	底部	64					底板褐色 胴部灰色 半磁質
266	43	青磁	7A.B-10		不明	底部	52					灰褐色 半磁質

	釉色	施釉	外面文様	内面文様	轆轤 回転方向	削り 回転方向	特記事項
	剥落	底部施釉		印花文			底部に輪状焼台痕
	青色 半透明 貫入	底部無釉		印花文		左	底部底板造り
	灰緑色 半透明 貫入	底部無釉		印花文			
	灰青色 半透明 貫入	底部無釉		印花文			底部底板造り
	青色 透明 貫入	底部無釉	ヘラ彫り蓮弁文			左	底部底板造り
	灰青色 半透明 貫入	底部無釉	線刻蓮弁文			左	
	灰青色 半透明 貫入	底部無釉	線刻蓮弁文			左	底部底板造り
	灰青色 半透明 貫入	底部無釉		不明		左	底部底板造り
	剥落	底部無釉					
	剥落	底部無釉					見込み蛇ノ目釉剥ぎ
	剥落						
	青色 半透明 貫入	底部施釉					底部に輪状焼台痕
	剥落	底部無釉				左	
	剥落						底部底板造り
	青色 透明 貫入	底部無釉				左	底部底板造り
	剥落						種類・時代不明
	青緑色 半透明 貫入		ヘラ彫り雷文				
	剥落		ヘラ彫り雷文				
	灰緑色 半透明 貫入		ヘラ彫り雷文				
	剥落		ヘラ彫り雷文				
	灰青色 半透明 貫入		ヘラ彫り文雷文?				
	灰緑色 半透明 貫入						口縁外反
	灰緑色						
	剥落						サンゴ付着
	剥落						
	剥落						
	灰緑色 半透明 貫入						口縁外反
	剥落						サンゴ付着
	剥落						
	青色 半透明 貫入						
	剥落						サンゴ付着
	剥落						サンゴ付着
	剥落						
	灰青色 半透明 貫入						
	剥落						
	剥落						
	剥落						
	灰青色						
	剥落						
	灰青色 半透明 貫入						
	灰青色 半透明 貫入						
	剥落						
	剥落						
	剥落						
	青色 半透明 貫入						
	剥落						
	灰青色 半透明 貫入						
	青緑色 半透明						サンゴ付着
	剥落						胴部剥離痕
	灰青色						
	灰緑色						
	青緑色						
	青緑色 半透明 貫入						
	黄褐色 半透明 貫入						
	青色 半透明 貫入						
	灰緑色						
	青緑色						サンゴ付着
	剥落					左	口縁外反
	剥落						内面白磁?
	灰青色	底部無釉 見込無釉				左	3脚あり 見込に溶着痕
	剥落	内外	彫り文算木文				
	灰青色 半透明 貫入	底部無釉					脚あり
	剥落						脚あり
	青緑色 半透明		印花花文				盤状口縁?
	灰緑色 半透明 貫入						
	灰青色 半透明 貫入	底部蛇ノ目釉剥ぎ					底部底板造り
	剥落			印花草花文			

第7表 白磁考察表

NO	注記NO	種類	写真番号	図版番号	器形	部位	重量(g)	口径(mm)	高台外径(mm)	内底径(mm)	高さ(mm)	胎土
1	280	白磁	巻頭カラー 6A.B-5	9-1	小皿	完器	49	80	40	38	18	白色 半磁質
2	294	白磁	巻頭カラー 6A.B-6	9-2	小皿	完器	45	75	42	30	14	表面褐色 磁質
3	285	白磁	巻頭カラー 6A.B-8	9-3	小皿	復元完器	65	84	40	24	23	灰白色 磁質
4	287	白磁	巻頭カラー 7A.B-2	9-4	小皿	完器	45	73	40	37	18	黄白色 磁質
5	296	白磁	巻頭カラー 7A.B-1	9-5	小皿	完器	62	85	38	29	23	剥落部褐色 半磁質
6	302	白磁	巻頭カラー 7A.B-8	9-6	小皿	完器	51	81	41	26	19	灰白色 磁質
7	279	白磁	巻頭カラー 7A.B-5	9-7	小皿	底部～口縁	46	79	45	31	19	割口褐色 磁質
8	298	白磁	巻頭カラー 7A.B-3	9-8	小皿	完器	53	76	37	26	19	灰色 磁質
9	295	白磁	35A.B-6	9-9	小皿	底部～口縁	51	79	40	27	19	白色 磁質
10	284	白磁	35A.B-3	9-10	小皿	完器	48	76	42	27	15	表面褐色 磁質
11	290	白磁	36A.B-6	9-12	小皿	完器	49	79	41	26	17	灰白色 磁質
12	301	白磁	36A.B-1	9-13	小皿	完器	50	80	44	33	18	白色 磁質
13	282	白磁	36A.B-5	9-14	小皿	完器	45	73	42	28	14	白色 磁質
14	291	白磁	37A.B-4	9-15	小皿	完器	59	82	37	26	20	表面灰褐色 磁質
15	278	白磁	37A.B-2	9-16	小皿	完器	42	75	35	23	16	表面灰褐色 半磁質
16	277	白磁	37A.B-1	9-17	小皿	完器	39	74	49	27	19	表面灰褐色 磁質
17	307	白磁	38A.B-2	9-19	小皿	底部～口縁	24	80	45	40	22	灰白色 磁質
18	303	白磁	巻頭カラー 6A.B-3		小皿	完器	55	86	43	28	20	黄白色 半磁質
19	276	白磁	巻頭カラー 6A.B-7		小皿	完器	44	76	41	29	18	黄白色 半磁質
20	281	白磁	巻頭カラー 6A.B-4		小皿	完器	45	76	42	29	19	黄白色 半磁質
21	289	白磁	35A.B-8		小皿	完器	44	75	43	29	17	黄白色 半磁質
22	308	白磁	38A.B-1		小皿	口縁	3	約100				灰白色 磁質
23	292	白磁	35A.B-5		小皿	底部	13		38	25		割口褐色
24	272	白磁	36A.B-7		小皿	底部	39		42	27		割口褐色 磁質
25	293	白磁	36A.B-4		小皿	底部	38		42	31		白色 磁質
26	275	白磁	35A.B-7		小皿	底部	39		50	37		割口褐色
27	271	白磁	巻頭カラー 6A.B-1		小皿	底部～口縁	48	78	42	31	18	白色 磁質
28	283	白磁	巻頭カラー 6A.B-2		小皿	底部～口縁	37	74	39	27	17	灰白色 磁質
29	288	白磁	35A.B-2		小皿	底部～口縁	43	83	45	30	19	黄白色
30	286	白磁	巻頭カラー 7A.B-4		小皿	底部～口縁	47	76	37	28	19	褐色
31	299	白磁	巻頭カラー 7A.B-7		小皿	底部～口縁	54	81	44	33	18	割口褐色
32	300	白磁	巻頭カラー 7A.B-6		小皿	底部～口縁	41	約80	49	35	18	割口褐色
33	306	白磁	35A.B-4		小皿	底部～口縁	41	約85	45	33	18	割口褐色
34	273	白磁	36A.B-3		小皿	底部～口縁	29	約74	約50	30	14	白色 磁質
35	304	白磁	37A.B-5		小皿	底部～口縁	21	80	50	35	18	黄白色
36	297	白磁	36A.B-2		小皿	復元完器	43	77	45	30	15	白色 半磁質
37	309	白磁	38A.B-6	9-18	小杯	底部	19		34	25		割口褐色
38	270	白磁	37A.B-3	9-20	碗	底部～口縁	298	127	52	33	55	灰白色 半磁質
39	305	白磁	38A.B-4	9-21	碗	口縁	45	150				灰色 磁質
40	268	白磁	38A.B-3	9-22	碗	口縁	6	約180				白色 磁質
41	274	白磁	38A.B-5		碗	口縁	13	150				灰白色 磁質
42	269	白磁	35A.B-1	9-11	碗?	底部	81		52	39		灰白色 磁質



	釉色	施釉	内面文様	轆轤 回転方向	削り 回転方向	特記事項
	黄白色 半透明 貫入	全施釉 (bタイプ)			左	割高台4脚 見込目跡4ケ
	灰白色 半透明	全施釉 (bタイプ)				割高台4脚 見込目跡4ケ
	灰白色 半透明	全施釉 (bタイプ)				割高台4脚 見込目跡4ケ 溶着痕
	灰白色 半透明	全施釉 (bタイプ)			左	割高台4脚 見込目跡4ケ
	黄白色 半透明 貫入	全施釉 (bタイプ)			左	割高台4脚 見込目跡4ケ
	白色 透明	全施釉 (bタイプ)		左	左	割高台4脚 見込目跡4ケ
	青白色 半透明	全施釉 (bタイプ)				割高台4脚 見込目跡4ケ 底部に目1ケ
	灰白色 貫入	全施釉 (bタイプ)				割高台4脚 見込目跡4ケ
	白色 半透明	全施釉 (bタイプ)			左	割高台4脚 見込目跡4ケ サンゴ付着・胎土、釉薬分析サンプル3
	灰白色 半透明	全施釉 (bタイプ)			左	割高台5脚 見込目跡5ケ
	灰白色 半透明	全施釉 (bタイプ)				割高台5脚 見込目跡5ケ
	灰白色 半透明	全施釉 (bタイプ)			左	割高台5脚 見込目跡なし・胎土、釉薬分析サンプル4
	灰白色 透明	全施釉 (bタイプ)				割高台5脚 見込目跡なし
	灰白色 半透明 貫入	底部無釉 見込無釉			左	輪高台
	灰黄色 半透明 貫入	底部無釉 見込無釉			左	輪高台
	灰白色 半透明	底部無釉 見込無釉		左	左	輪高台
	青白色 透明	畳付のみ無釉	印花菊花文			薄造り
	剥落	全施釉 (bタイプ)			左	割高台4脚 見込目跡4ケ
	剥落	全施釉 (bタイプ)			左	割高台4脚 見込目跡あり
	剥落	全施釉 (bタイプ)			左	割高台4脚 見込目跡あり
	剥落	全施釉 (bタイプ)			左	割高台5脚 見込目跡5ケ
	青白色 透明	畳付のみ無釉	印花菊花文			薄造り NO.307に類似
	褐色 貫入	全施釉 (bタイプ)			左	割高台4脚 見込目跡4ケ
	白色 透明	底部無釉 見込無釉 (aタイプ)				割高台5脚 見込目跡5ケ サンゴ付着
	白色 半透明	全施釉 (bタイプ)			左	割高台5脚 見込目跡なし
	剥落	底部無釉 見込無釉 (aタイプ)			左	割高台6脚 サンゴ付着
	白色 透明	全施釉 (bタイプ)				割高台4脚 見込目跡4ケ
	灰白色 透明	全施釉 (bタイプ)			左	割高台4脚 見込目跡4ケ
	剥落	全施釉 (bタイプ)			左	割高台4脚 見込目跡4ケ
	黄白色 貫入	全施釉 (bタイプ)				割高台4脚 見込目跡4ケ サンゴ付着
	灰白色 半透明 貫入	全施釉 (bタイプ)				割高台4脚 見込目跡4ケ サンゴ付着
	褐色 貫入	全施釉 (bタイプ)				割高台4脚 見込目跡4ケ サンゴ付着
	褐色 貫入	全施釉 (bタイプ)				割高台4脚 見込目跡あり サンゴ付着
	白色 透明	全施釉 (bタイプ)				割高台5脚? 見込目跡5ケ
	黄白色 貫入	底部無釉 見込無釉				輪高台
	剥落	不明				割高台5脚 見込目跡5ケ
	青白色 透明 貫入	底部無釉 見込蛇ノ目釉剥ぎ			左	
	黄白色 半透明	畳付のみ無釉				厚手 サンゴ付着
	灰色 透明					口縁外反
	青白色 透明	口禿				
	灰白色 半透明 貫入					口縁直口
	黄白色 半透明	底部無釉 見込蛇ノ目釉剥ぎ			左	割高台 底板造り?

第8表 青花考察表

NO	注記NO	種類	写真番号	図版番号	器形	部位	重量(g)	高台外径(mm)	内底径(mm)	胎土
1	377	青花	巻頭カラー 10A.B-2	10-4	小皿	底部	19	約50	46	白色 磁質
2	375	青花	巻頭カラー 10A.B-4		小皿	底部	22	46	43	白色 磁質
3	376	青花	巻頭カラー 10A.B-3		小皿	底部	19	48	45	白色 磁質
4	378	青花	巻頭カラー 10A.B-1		小皿	底部	17	約50	45	白色 磁質
5	368	青花	巻頭カラー 10A.B-10	10-3	皿	底部	52	110	94	割口褐色 磁質
6	373	青花	巻頭カラー 10A.B-5	10-5	皿	底部	48	約70	66	割口褐色 磁質
7	371	青花	巻頭カラー 10A.B-8	10-6	皿	底部	24	約60		白色 磁質
8	370	青花	巻頭カラー 10A.B-9	10-7	皿	底部	23	約60	50	白色 磁質
9	372	青花	巻頭カラー 10A.B-6		皿	底部	39	約70	60	割口褐色 磁質
10	367	青花	巻頭カラー 10A.B-12		皿	底部	11			白色 磁質
11	369	青花	巻頭カラー 10A.B-11		皿	底部	17	約100		灰白色 磁質
12	374	青花	巻頭カラー 10A.B-7		皿	底部	17			白色 磁質
13	324	青花	巻頭カラー 9A.B-3	11-2	皿?	底部	40	約60	約56	白色 磁質
14	335	青花	巻頭カラー 8A.B-2	10-1	碗	底部	154	約60	52	灰白色 磁質
15	326	青花	巻頭カラー 8A.B-5	10-2	碗	底部	126	約60	約54	白色 磁質
16	322	青花	巻頭カラー 9A.B-6	10-8	碗	底部	80	約60	約48	割口褐色 磁質
17	359	青花	42A.B-6	11-9	碗	口縁	12			割口褐色 磁質
18	312	青花	巻頭カラー 9A.B-7	10-9	碗	底部	63	約65	54	灰白色 磁質
19	358	青花	42A.B-7	11-10	碗	口縁	7			割口褐色 磁質
20	310	青花	巻頭カラー 9A.B-2	10-10	碗	底部	126	60	51	割口褐色 磁質
21	363	青花	42A.B-5	11-11	碗	口縁	5			白色 磁質
22	311	青花	巻頭カラー 9A.B-1	11-1	碗	底部	107	62	49	割口褐色 磁質
23	362	青花	42A.B-8	11-12	碗	口縁	4			白色 磁質
24	319	青花	40A.B-5	11-3	碗	底部	98	約60	約46	灰白色 磁質
25	343	青花	41A.B-2	11-4	碗	底部	67	約46	39	割口褐色 磁質
26	342	青花	42A.B-1	11-5	碗	底部	58	約45	36	灰白色 磁質
27	351	青花	42A.B-4	11-6	碗	底部	30	約40	38	白色 磁質
28	348	青花	42A.B-2	11-7	碗	底部	34	約40	36	白色 磁質
29	365	青花	42A.B-9	11-8	碗	胴部	20			割口褐色 磁質
30	357	青花	42A.B-10		碗	底部	6			割口褐色
31	327	青花	巻頭カラー 8A.B-4		碗	底部	56	約60		灰白色 磁質
32	328	青花	39A.B-2		碗	底部	34			灰白色 磁質
33	329	青花	39A.B-3		碗	底部	49			白色 磁質
34	330	青花	39A.B-7		碗	底部	38	約60		割口褐色 磁質
35	331	青花	39A.B-1		碗	底部	25			灰白色 磁質
36	332	青花	39A.B-8		碗	底部	37			割口灰白色 磁質
37	333	青花	巻頭カラー 8A.B-6		碗	底部	67	約60	約50	灰白色 磁質
38	334	青花	巻頭カラー 8A.B-1		碗	底部	49	約60	約50	割口褐色 半磁質
39	336	青花	39A.B-9		碗	底部	22	約60		灰白色 磁質
40	337	青花	39A.B-4		碗	底部	43	約60		灰白色 磁質
41	338	青花	39A.B-6		碗	底部	30			白色 磁質
42	339	青花	39A.B10		碗	底部	29			灰白色 磁質
43	340	青花	39A.B-5		碗	底部	22			割口褐色
44	341	青花	巻頭カラー 8A.B-3		碗	底部	62	約60		割口褐色
45	313	青花	巻頭カラー 9A.B-5		碗	底部	55	約70		白色 磁質
46	314	青花	巻頭カラー 9A.B-8		碗	底部	28	約60		灰白色 磁質
47	315	青花	巻頭カラー 9A.B-4		碗	底部	53	約60		白色 磁質
48	317	青花	40A.B-3		碗	底部	68	約60	約52	白色 磁質
49	318	青花	40A.B-1		碗	底部	54	約60		黄白色 磁質
50	320	青花	40A.B-4		碗	底部	43	約60		灰白色 磁質
51	321	青花	40A.B-6		碗	底部	49	約60		割口褐色 磁質
52	323	青花	40A.B-2		碗	底部	42	約60		白色 磁質
53	325	青花	40A.B-8		碗	底部	48	約60		黄白色 半磁質
54	344	青花	41A.B-11		碗	底部	21			灰白色 磁質
55	345	青花	41A.B-9		碗	底部	13			灰白色 磁質
56	346	青花	41A.B-1		碗	底部	36	約42	38	割口褐色 磁質
57	349	青花	41A.B-4		碗	底部	26			白色 磁質
58	350	青花	41A.B-6		碗	底部	17			割口褐色 磁質
59	353	青花	41A.B-7		碗	底部	19			灰白色 磁質
60	354	青花	41A.B-5		碗	底部	24			割口褐色 磁質
61	355	青花	41A.B-3		碗	底部	27			灰白色 磁質
62	356	青花	41A.B-8		碗	底部	22			白色 磁質
63	347	青花	42A.B-3		碗	底部	15			白色 磁質
64	352	青花	41A.B-10		碗	底部	7			灰白色 磁質
65	316	青花	40A.B-7		碗	底部	32			白色 磁質
66	366	青花	42A.B-13		碗	胴部	3			白色 磁質

	釉色	施釉	外面文様	内面文様	特記事項
	灰白色 透明	疊付のみ無釉		捻り菊文	
	黄白色 透明 貫入	疊付のみ無釉		捻り菊文	
	黄白色 透明	疊付のみ無釉		捻り菊文	
	青白色 透明	疊付のみ無釉		捻り菊文	
	灰白色 透明 貫入	疊付のみ無釉		羯磨文	高台内傾
	青白色 透明	疊付のみ無釉		花文	
	黄白色 透明	疊付のみ無釉		花文	高台基筋底
	黄白色 透明	疊付のみ無釉		野菜文	底部底板造り?
	黄白色 透明	疊付のみ無釉		花文	
	青白色 透明	疊付のみ無釉		羯磨文?	高台内傾
	青白色 透明	疊付のみ無釉		羯磨文?	高台内傾
	青白色 透明	疊付のみ無釉	圏線		
	青白色 半透明	疊付のみ無釉		梅枝文	薄手
	青白色 透明	疊付のみ無釉		捻り菊文	
	青白色 透明	疊付のみ無釉		捻り菊文	高台内傾 サンゴ付着
	白色 半透明	疊付のみ無釉		梅枝文	底部底板造り?
	黄白色 透明	内外	唐草文		口縁外反
	白色 半透明 貫入	疊付のみ無釉		梅枝文	底部底板造り?
	灰白色 半透明	内外	花文	雷文帯	口縁外反
	黄白色 半透明 貫入	疊付のみ無釉		梅枝文	
	青白色 透明	内外	唐草文		口縁外反
	白色 半透明 貫入	疊付のみ無釉		(簡略) 梅枝文	底部底板造り?
	青白色 半透明	内外	唐草文?		
	黄白色 半透明 貫入	疊付のみ無釉		(簡略) 梅枝文	
	青白色 透明	疊付のみ無釉		梅枝文	
	青白色 透明	疊付のみ無釉		梅枝文 (寿字文)	
	青白色			梅枝文 (寿字文)	
	青白色 透明	疊付のみ無釉		梅枝文 (寿字文)	
	青白色 半透明	内外	唐草文?		
	青白色 半透明			圏線	
	青白色 透明			捻り菊文	高台破損
	青白色 透明			捻り菊文	カンナ痕
	青白色 透明	疊付のみ無釉		捻り菊文	
	青白色 透明	疊付のみ無釉		捻り菊文	カンナ痕 高台際接合痕
	青白色 透明			捻り菊文	
	剥落			捻り菊文	
	青白色 透明	疊付のみ無釉		捻り菊文	高台内傾 サンゴ付着
	青白色 透明	疊付のみ無釉		捻り菊文	
	青白色 透明			捻り菊文	
	青白色 透明			捻り菊文	
	青白色 透明			捻り菊文	高台内傾
	青白色 透明			捻り菊文	高台内傾
	青白色 透明			捻り菊文	
	青白色 透明	疊付のみ無釉		捻り菊文	高台内傾
	白色 半透明 貫入	疊付のみ無釉		梅枝文	
	青白色 半透明 貫入	疊付のみ無釉		梅枝文	
	黄白色 半透明 貫入	疊付のみ無釉		梅枝文	
	灰白色 半透明 貫入	疊付のみ無釉		梅枝文	
	黄白色 半透明 貫入	疊付のみ無釉		梅枝文	底部底板造り?
	黄白色 半透明 貫入	疊付のみ無釉		梅枝文	
	黄白色 半透明 貫入	疊付のみ無釉		梅枝文	
	青白色 半透明	疊付のみ無釉		梅枝文	
	白色 半透明 貫入	疊付のみ無釉		梅枝文	
	剥落			梅枝文	
	灰白色 半透明	疊付のみ無釉		梅枝文	
	青白色 透明			梅枝文	
	青白色 透明	疊付のみ無釉		梅枝文	
	青白色 透明	疊付のみ無釉		梅枝文	
	青白色 透明	疊付のみ無釉		梅枝文	
	青白色 半透明	疊付のみ無釉		梅枝文	
	青白色 半透明	疊付のみ無釉		梅枝文	
	青白色 半透明	疊付のみ無釉		梅枝文	
	青白色 透明			梅枝文 (寿字文)	
	剥落			梅枝文?	
	青白色 半透明 貫入	疊付のみ無釉		不明	
	白色 透明	内外	花文		

NO	注記 NO	種類	写真番号	図版 番号	器形	部位	重量 (g)	高台外径 (mm)	内底径 (mm)	胎 土
67	360	青花	42A.B-12		碗	胴部	4			割口褐色 磁質
68	361	青花	42A.B-11		碗	胴部	3			白色 磁質
69	364	青花	42A.B-14		碗	胴部	6			黄白色 磁質

第9表 鉄釉考察表

NO	注記 NO	種類	写真番号	図版 番号	器形	部位	口径 (mm)	底径 (mm)	胎 土	釉 色	特記事項
1	1	鉄釉	43A.B	12-1	甕	口縁	191		灰褐色 陶質	茶褐色	
2	2	鉄釉	43C.D	12-2	甕	口縁	200		灰色 陶質	茶褐色	
3	3	鉄釉	43E.F	12-3	甕	口縁	188		灰褐色 陶質	茶褐色	
4	4	鉄釉	44A.B	12-4	甕	口縁	190		灰白色 陶質	茶褐色	
5	5	鉄釉	44C.D	12-5	甕	口縁	190		灰褐色 陶質	黒色	横耳付
6	6	鉄釉	44E.F	12-6	壺	口縁	110		灰赤色 陶質	黒色	横耳付
7	7a	鉄釉	46A.B-2	12-7	甕	口縁	約280		茶褐色 陶質	黒褐色	玉縁口縁
8	7b	鉄釉	46A.B-1	12-8	甕	口縁	約280		茶褐色 陶質	黒褐色	玉縁口縁
9	8	鉄釉	45C.D	12-9	甕	底部		158	黒褐色 陶質	茶褐色	上げ底
10	9	鉄釉	45A.B	12-10	甕	底部		190	灰褐色 陶質	黒褐色	上げ底

	釉 色	施 釉	外 面 文 様	内 面 文 様	特 記 事 項
	灰白色 半透明	内外	唐草文		
	青白色 半透明	内外	唐草文?		
	黄白色 半透明	内外	唐草文?		

## 中文要旨

### 冲绳县石垣岛

#### 名藏シタダル (SHITADARU) 海底遗址收集到的中国明代陶瓷器的研究

本书是大滨永亘用了过去半个世纪以上的时间从冲绳县石垣岛名藏シタダル (SHITADARU) 海底遗址收集到的中国明代陶瓷器的整理、研究报告书。从收藏品中抽出 3461 个按顺序进行分类、合计、考察、拍摄和绘制实际测量图。结果得出, 清数青瓷 2845 个, 其中有 2675 个碗。另外还发现钵类、皿类、瓶类、小香炉等其他器种。青瓷中刻意注目于“顾氏”铭青瓷进行资料收集以及有“顾氏”由来之称的龙泉窑的陶瓷器制造者顾仕成的文献收集。从大滨的名藏シタダル海底遗址资料中也证实有 12 个“顾氏”铭青瓷的碗、钵。54 点报告内容记载在由日本出土物编成的 46 册报告书的表 11 中。它们之间能够形成比较的代表例记载在图 13 ~ 图 16。另外查阅了记述顾仕成的原著顺治 12 年 (1655) 版、乾隆 27 年 (1762) 版、光绪 4 年 (1878) 版等《龙泉县志》, 概括了全部有关联的部分来表示要旨。以及配合活用龙泉青瓷的前辈陈万里先生、小山富士夫先生的成果, 表示“顾氏”铭青瓷大致可区分为 3 个时期。即顾仕成有生之年至紧接而来的 15 世纪第 2 ~ 第 3 又四分之一期的作品, 相当于土耳其トプカプ・サライ (TOPKAPI・SARAY) 美术馆收藏品和最近挖掘出的龙泉大窑枫洞岩窑址出土物等。接着是 15 世纪第 3 ~ 第 4 又四分之一期的制品, 相当于以名藏シタダル (SHITADARU) 海底遗址的 12 件为首在日本出土颇多的“顾氏”铭青瓷。《龙泉县志》中记载着成化 (1465 ~ 1487)、弘治 (1488 ~ 1505) 以后的制品质量粗糙、色泽不佳, 被指出是不值得鉴赏的青瓷。再是 15 世纪第 4 又四分之一期以后即弘治 (1488 ~ 1505) ~ 嘉靖 4 年 (1525) 时期的制品, 假设山梨县东八代郡一宫町新卷本村类型的是“顾氏”青瓷碗, 指出是“顾氏”铭青瓷最后的制品。

清数白瓷 440 个, 其中有 437 个小碟。白瓷小碟中有 357 个割圈足只残留 4 至 5 处的, 占小碟的 81.7%。割圈足白瓷小碟中下部至底部无釉的 a 类型有 6.9%, 施釉至圈足底端的 b 类型有 93.1%, b 类型占压倒性的多数是其特色。本书通过烧制割圈足白瓷小碟的中国福建省邵武市四都窑址的实地调查报告, 可以追溯到割圈足白瓷小碟的形成过程。能够看出在烧窑的最后关头, 有效利用窑内空间提高生产效率进行的重复烧制法是发展过的技术之一。了解到宋、元以来从用“支烧痕”重复烧制内部、用重叠圈无釉部分作出无釉带的方法到内部底部不施釉重复烧制法的在发展过程。开始时期痕迹浅淡即“支烧痕”的简略形式。成为被视为名藏シタダル海底遗址 b 类型一样不知是否制出圈足的粗糙, 底部夹有产量化 4 脚的制品, 摸索到一切都不经调整施釉的产量化。由日本出土的割圈足白瓷小碟编辑成的 311 册报告书中 696 点报告内容记载在表 11 中。仅从名藏シタダル (SHITADARU) 海底遗址的割圈足白瓷小碟量多这一点来看, 对日本中世纪遗址特别是 15 世纪中期意义非凡, 从表中也可得知是否有特别之处。在遥远的中国福建省深山邵武四都地区生产的恐怕是最低廉的割圈足白瓷小碟经海路被运输到冲绳, 被南以与那国岛、西以波照间岛, 从石垣岛、宫古岛到冲绳本岛的大多数岛屿群消费。并了解到运送到日本列岛北至北海道的各个角落被消费, 那些地区的 15 世纪的历史也表示在列岛地图上。

从名藏シタダル (SHITADARU) 海底遗址采集的少量青花瓷底部、中部、边缘部全部的残片只有 69 片。器种有碗、皿类, 内部底面的青花图文有月华文、梅枝文、寿字梅枝文 3 种主要图案。表 12 简单地总结了有这些花纹的青花出土物。从这些出土物以及石垣岛野底崎遗址古墓出土物的比较中确定, 名藏シタダル (SHITADARU) 海底遗址的青花属于 15 世纪后半期 ~ 末期即 15 世纪第 3 ~ 第 4 又四分之一期, 认为上述的青瓷和白瓷是共同伴随的文化遗产。就产地很难立刻断定, 景德镇是理所当然的, 认为今后应该谨慎地探求景德镇周边到福建

省内的窑址。

铁釉是在冲绳县曾经被统称为“南蛮”的坛、瓮类。特色是不采用无釉烧制而是施釉。作为运输容器，在县内的遗址被转用和使用。推测名藏シタダル（SHITADARU）海底遗址的铁釉和冲绳县遗址中是否为共同类型，主要有边缘部分肥厚类型的瓮，其次是如喇叭形状边缘张开类型，还有有时被称为泰国产的坛，也收集到颈部径直边缘有漂亮镶边的若干个。

从以上的考察得知，名藏シタダル（SHITADARU）海底遗址的陶瓷器类是明代15世纪第3～第4又四分之一时期的总括文化遗产，从其数量等看出是沉船的可能性相当高。推测装载的青瓷可能是浙江省龙泉县，以庆元县竹口地区为中心附近的制品。白瓷一定是福建省邵武市四都附近的制品。这些陶瓷器在中国国内运输，在福建省海岸福州、定海地区集聚装载后起航。当然是私有贸易船，装载的陶瓷器类也基本没有高级品，“顾氏”铭青瓷属于高级种类。如从割圈足白瓷小碟和“顾氏”铭青瓷的日本全国出土表可以看出一样，和名藏シタダル（SHITADARU）海底遗址采集的同种类的陶瓷器出土物非常多，特别是在冲绳县从先岛诸岛遗址的各个角落到冲绳本岛15世纪遗址的出土物十分显著。打算稍微涉及一下日本列岛历史动向是如何展开的来结束小结。

15世纪末石垣岛历史上经常登场的オヤケ・アカハチ（OYAKE・AKAHACHI）受到注目。宫古岛的仲曾根丰见亲和首里王府的尚真王军前往讨伐アカハチ（AKAHACHI）统率的八重山，就是通常所说的オヤケ・アカハチ（OYAKE・AKAHACHI）之乱（1500年）。本书的共同研究者大滨永亘已经就オヤケ・アカハチ（OYAKE・AKAHACHI）之乱进行详细资料收集和研究发表。在此简单说明作者（关口广次）的想法。研究追溯到当时首里王府和宫古岛以支配关系的强化和地区一元化为目的的政治动向背景里有对中国福建地区来的私有贸易船的掌握和贸易管理的经济目的。大滨的学说中虽然包含这一观点，通说本中完全没有涉及这点。首里王府即琉球国以朝贡贸易正规的形式进行商业贸易，然而和之后被称为贸易国家一样，利润相当巨大，因此对冲绳诸岛的村庄来说和日益增多的福建的私有贸易船的直接交易所得的利润相当大，当然先岛诸岛距离福建省近的地理位置的优势也是原因之一。只是作为前提的是，和福建商人和船夫需要的物品或宫古岛、冲绳本岛的特产品同等的物品在先岛诸岛中存在——作者设想是土夏布等特产纺织品——以及必须先岛诸岛内等质形成用私有贸易船作为未来事业的组织、社会。附带说一下，在台湾福建商人和船夫需要的物品数量少，以私有贸易船作为未来事业的组织还未形成，所以基本没有15世纪陶瓷器出土的遗址。从挖掘出的村落的构造和墓地以及岛民自身使用的丰富的明代陶瓷器来看，可以说在石垣岛、西表岛等先岛诸岛已经充分形成那样的社会。オヤケ・アカハチ（OYAKE・AKAHACHI）无疑是石垣岛私有贸易领导者的存在。从オヤケ・アカハチ（OYAKE・AKAHACHI）居城的国史迹フルスト原（FURUSUTOBARU）遗址（插图）挖掘调查发现坚固的石罍群和古墓群，然而遗址本来的性质是城的结构，还是村落、墓地的真实情况还是不解之谜。但是遗址面临广阔大海，作者研究生时期挖掘调查和整理的中世到近世的カンドウ原（KANDOUBARU）遗址集落眼下也存在着。（注43）并且之后在旧称“船着・フナツク（FUNATUKU）（码头）”的海岸采集青瓷和铁釉瓷器，就是被称为有往来的萨摩船经过的大滨村海湾。作者综合判断出フルスト原（FURUSUTOBARU）遗址本来的机能是意识到从中国来的私有贸易船后，兼备瞭望台、联络所、狼烟台、居住地功能的复合遗址。推定出在オヤケ・アカハチ（OYAKE・AKAHACHI）之乱以前在先岛诸岛有装载大量陶瓷器从福建而来的私有贸易船来航，不幸的是其中一艘在名藏湾シタダル（SHITADARU）沉没。

名藏シタダル（SHITADARU）海底遗址船沉没的时期是日本应仁之乱前后（1467～1478），表11对其间割圈足白瓷小碟的全国出土状况进行说明。即经由冲绳运来的陶器在鹿儿岛、博多回漕，然后经博多商人通过日本海航路转卖到有一乘谷朝仓遗址的北陆、东北、北海道。另一方面，应仁之乱以前琉球船和博多船通过濑户内

海到几内,特别是向堺(地名)航行。也有堺商人向博多方向出发的情况。但是应仁之乱开始后状况就改变了。濑户内海出土的割圈足白瓷小碟数量变少,相反地太平洋沿岸的高知县南国市田村遗址和明应2年(1493)和有墨书护符同一层的高知县喜川郡芳原城集中的出土量很显著。推测其原因是应仁之乱濑户内海上交通出现障碍,往来堺的船的航路必须经太平洋沿岸。采集到和名蔵シタダル(SHITADARU)海底遗址青瓷类似的友岛冲(纪淡海峡)也在这一航路上,早先西山要先生推测堺商船从琉球到九州南部、经过土佐冲即南海路进入纪伊水道,在通过纪淡海峡时破损、沉没。小叶田先生在其文献研究中归纳了战前堺商人的琉球贸易,安里延先生也阐明发表了有关琉球和堺的互通友好的研究。书中也详细记述了因为应仁之乱濑户内海的战场化而拒绝琉球船的来航,堺商人直接向琉球出发。考古学中森村健一先生总结了各个时代堺贸易陶瓷系统,言及了15世纪后半期~16世纪前半期的贸易港主要路线。列举了福州、宁波→琉球(中心地)→坊津→土佐→堺的路线。这些内容和上述的割圈足白瓷小碟出土情况的比较强烈反映了当时历史状况和分布状况。若更细致地研究全国的分布状况,地域史和日本列岛15世纪第3~第4又四分之一期连锁的历史也将变得更清晰。

作为采集名蔵シタダル(SHITADARU)海底遗址的明代陶瓷器的研究成果,了解到上述的历史背景。而且以本书为基础,期待能够通过各式各样的活用解明其他方面的历史。在此搁笔。

(关口广次 记)



## 英文要旨

The study of ceramics in the reign of the Ming dynasty collected from Nagura Shitadaru undersea site in Ishigaki-island, Okinawa Pref.

This paper is a report of the study of ceramics made in the reign of the China Ming dynasty which Mr. Eisen Ohama has collected from Nagura Shitadaru undersea site in Ishigaki-island, Okinawa Pref. during the past about half of a century.

From his collection, I picked out 3461 pieces of the ceramics to classify, add up, consider, photograph, make an actual measurement illustration one after another, and arranged data. As a result, 2845 pieces of celadons are counted and 2675 pieces among them are bowls. The rest of the celadons are wide bowls, dishes, bottles or vases, small incense burners and so on. I found 12 celadon bowls with a signature “Gu Shi (which means the Gu family)” in Mr. Ohama's collection and so I paid attention to the celadons with a signature “Gu Shi” especially to collect data and also to collect documents about “Gu Shi Cheng” who was a porcelain—manufacturer in Long Quan Yao, and became to an origin of the name of “Gu Shi”. I compiled 46 reports of the celadons with a signature “Gu Shi” unearthed on Japan and arranged them to 54 contents to show as Table No.11. In order to compare Mr. Ohama's collection to those unearthed on Japan, I placed typical examples of them as illustration No.13 — No.16. Also, for the purpose of researching Gu Shi Cheng, I checked “The history of Long Quan Pref.” published in Shun Zhi 12 (1655), that published in Qian Long 27 (1762) and that in Guang Xu 4 (1878), those were the original texts written about Gu Shi Cheng, and excerpted all parts of them related with him to make a summary. Adding to that, I pointed out that the times of manufacturing celadons with a signature “Gu Shi” are roughly divided into three periods by using the results of Prof. Chen Wan Li's and Prof. Fujio Koyam's studies. They are great masters of the study of celadons in Long Quan Yao. Three periods are that 1) from the second quarter to the third quarter in the 15th century when Gu Shi Cheng supposed to be alive and just after he died 2) from the third quarter to the fourth quarter in the 15th century 3) after the fourth quarter in the 15th century. I represented that the period of No.1) corresponds to Topkapi Saray Museum collection in Turkey and the pieces excavated recently on the kiln vestiges of Long Quan Da Yao Feng Dong Yan. I also represented the period of No.2) corresponds to 12 pieces excavated on Shitadaru undersea site and many celadons with a signature “Gu Shi” excavated on Japan. Moreover, I indicated that the products of this period correspond to those celadons which were mentioned on “The history of Long Quan Pref.” that the quality of the products made in after Cheng Hua (1465-1487), Hong Zhi (1488-1505) periods was coarse and they were not good colored, unequal to appreciate. As the products made in the period of No. 3) i.e. approximately from the Hong Zhi (1488-1505) period to the fourth year in the Jia Jing period (1525), I assumed a celadon bowl of type of Aramaki Honson, Yamanashi Pref. and I represented that it was the last product of the celadons with a signature “Gu Shi” .

In the meantime, I counted 440 pieces of white porcelains from Mr. Ohama's collection and 437 pieces

of them are small dishes. Among the small dishes of white porcelains, 357 pieces are footring-shaved style with 4 or 5 places of the footring left and they account for 81.7% of the small dishes. In the small dishes with footring-shaved style, a-type which I called on the one side is that lower part of the body towards the bottom is left unglazed and it accounts for 6.9% . On the other side, b-type I called is that the body towards the bottom of the footring is glazed and it accounts for 93.1% . It predominates and distinguishes. In this paper, in addition I also reported a result of practical research for Fu Jian Sheng Shao Wu Shi Si Du Yao Zhi (kilns vestige) in China where the small dishes of white porcelains with footring-shaved were fired and moreover, I investigated the making process of them. I grasped that it was one of the developed firing technique with piling the articles in order to use space in a kiln effectively to achieve high productivity when they stuffed a kiln. This firing technique, I found, is developed from the process that was, from the firing style to pile tightly with using the small clays to support practiced since the Song, the Yuan periods, through the way to pile with janome (snake eye) style that leaves a circular area of the base inside of the articles unglazed, and to the way to pile with the base inside of the articles unglazed. At the beginning, the depth of the shaving of the footring was shallow, and it was a simplified style of the piling with small supporting clays. Afterwards, the making coarsened as we couldn't see the footring was made or not, such as b-type pieces of Sitadaru undersea site. In other words, it finally reached to the mass-production style only such as the bottom of the footring was shaved widely to form four feet and the glazing was dipped all at once, not to adjust at all. I compiled the examples of the footring-shaved small white porcelain dishes unearthed on Japan from 311 reports and arranged them to 696 contents to show at Table No.11. As a large quantity of the footring-shaved small white porcelain dishes of Sitadaru undersea site shows, we understand in the Japanese Middle Ages sites, especially in the 15th century, how the footring-shaved small white porcelain dishes are significant and unique when we look through this table. These footring-shaved small white porcelain dishes were made in Fu Jian Sheng Shao Wu Shi Si Du Yao Zhi area, China where is deep in the mountains and faraway distant from Japan. They seemed to be the cheapest porcelains made in there and were conveyed by sea to Okinawa.

And they were used in almost all islands of Okinawa area, i.e. from the Island of Yonaguni in the south, the Island of Hateruma in the west, the Island of Ishigaki, the Island of Miyako, to the Main Island of Okinawa. Moreover, this table signifies that they were transported to use everywhere in the Japanese Islands, to Hokkaido in the north, and it also becomes to be a map of each area in Japan filled with the history in the 15th century.

Porcelains with glazed blue and white collected from Sitadaru undersea site are small amount, and all shards of the bottom, the body and the rim totaled 69 pieces. Their kinds are bowls and dishes, and their main designs of the inside of the bottom are three patterns, namely twisted chrysanthemum pattern, plum branch pattern, and plum branch with a letter “ju (celebrating)” pattern. I arranged briefly the unearthed examples of the porcelains with glazed blue and white having design of these patterns at Table No.12. In consequence of comparing these examples with those on the ancient grave at Nosokozaki site in Ishigaki-Island, I thought the porcelains with glazed blue and white of Sitadaru undersea site were

placed at from the second half to the late in the 15th century, and they were contemporary relics with the celadons and the white porcelains mentioned above. Since I was unable to conclude their producing area at once, I would like to investigate their producing area where Jing De Zhen as a matter of course, from the outskirts of Jing De Zhen to the kiln vestiges in Fu Jian Sheng attentively from now on.

Iron-glazed potteries are a group of the pots and jars, generally called “Nanban” formerly in Okinawa Pref. Their outstanding characteristics are fired with glazed, not unglazed. They are supposed to be the containers to carry the contents, and were diverted to use at the sites in Okinawa Pref. Iron-glazed potteries at Sitadaru undersea site are supposed to be common type at the sites in Okinawa Pref. Their main type is a jar with the very thick rim, the second is a jar with the rim opened widely like a trumpet, sometimes, some of them are remarked to be made in Thailand. Some of the jars with the straight neck and the round rim are also collected.

Considering the studies mentioned above, I found out the ceramics at Sitadaru undersea site are relics in a lump from the third to the fourth quarter in the 15th century in the Ming dynasty and from the quantity of them, it is very likely to be a sunken ship. Celadons loaded on a ship are presumed to be the products of Zhe Jiang Sheng Long Quan Yao, probably the kilns in the vicinity around central Qing Yuan Xian Zhu Kou area. There is no doubt to judge that the white porcelains were made in the vicinity of Fu Jian Sheng Shao Wu Shi Si Du. And I thought that these ceramics were transported through China and accumulated as a mixed cargo to ship at Fu Zhou or Ding Hai area, the coast in Fu Jian Sheng where the ships sailed from. These ships were private trading ones as a matter of course, and almost of all ceramics shipped were not high quality, so the celadons with a signature “Gu Shi” were classed under superior quality. In Japan, the examples of the ceramics unearthed of the same kind as collected at Sitadaru undersea site are extremely many just as you come to see the table of the footring-shaved small white porcelain dishes and the celadons with a signature “Gu Shi” unearthed on all over Japan. In Okinawa Pref. specially, from every sites on Sakishima Islands to those on Okinawa's main island, ceramics unearthed on the sites in the 15th century are conspicuous.